

---

# この背中に、白い翼は無いとしても。 2 《第一章～どうか忘れないで、君が交わした約束を～》

煌はじめ

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

この背中に、白い翼は無いとしても。2 『第一章～どうか忘れな  
いで、君が交わした約束を～』

### 【Zコード】

N7475M

### 【作者名】

煌はじめ

### 【あらすじ】

『サツカーはね、魔法なんだよ。大好きな人と、仲良くなる魔法。一緒に幸せになる魔法なんだ』

それは今から四十年以上昔。暴力に晒され、雨の中ボールを蹴っていた少年はそう言って笑った。己を不運を呪う事なく。やがて少年・・影山零治の世界が朽ち果て、歪んだ大人に

なる口まで。

四十年後。新たな悲劇が幕を開ける。エイリア事変。宇宙人襲来と雷門イレブン。影山がかつて育てた子供・鬼道有人が策謀の中命を落とした時、封じられた過去は呼び覚まされる。まだ本当の惨劇は始まってすらいない。仲間の死に立ち竦む円堂達。兄の死に嘆く春奈と、愛する者の死を前にそれでも尚立ち上がる塔子。

憎しみに壊れた佐久間と源田。愛を請うて歪んだ不動。そして“絶望の魔術師”こと影山零治。真帝国に魔女が降臨する時、新たな終わりが始まる。

語られるエイリア事変、そのもう一つの物語。これはその、第一章。

後に

この作品は、イナズマイレブンの一次創作になります。公式とは一切関係がありません。また、以下の点が含まれます。

イナズマイレブン一期（驚異の侵略者編）をベースにしたパラレル。

原作沿いと見せかけたサッカーバトルファンタジー。最終的には原作とまったく違った展開と結末が待っています。

闇墜ち要素、死ネタ要素強し。残酷な生体実験描写、暴力描写あり。また間接的に性的暴力や虐待を示唆する表現がある為、R15 指定。

エイリア学園はマスター・ランク以外洗脳されている設定。全てのキャラクターにおいて過去捏造だらけ。

塔子と鬼道が幼なじみ設定。若干この一人で恋愛描写あり（プラトニック）

鬼道やエイリアっ子をはじめとして、悲惨な目に遭うキャラが後を絶たず。

うみねこパロ要素あり。全ての悪事の黒幕として魔女が登場。ディシディアファイナルファンタジー、キングダムハーツ、すばらしきこのせかい、からゲストキャラ出演。ただし上記キャラを知らずとも支障なし（また第一章で彼らの出番はありません）。

一応一般向けとして執筆しておりますが、一部女性向けに見える表現があるかもしれません。

基本友情重視ですが、塔子×鬼道以外にも公式の恋愛描写は若干あります。リカ×一之瀬は強めかも。

また基本的にダーク。ものすごくダーク。

序章を読まれた方ならご存知の通り、序章終盤にイナズマイレブンのキャラから死人が出ています。また今後も出る予定ですし、生き返り…なんて非常識展開もあつたりします。

それでも大丈夫な方のみ、どうぞ。長い長い物語になりますがお付き合いいただければ幸いです。

## オリジナルキャラクター紹介

この作品にはオリジナルキャラクターが登場します。ただし、以下出張るのは一名のみ。またあくまでメインは版権キャラクターになります（個人的にオリキャラがたくさん出る＆メインに来る版権小説は苦手なため）。

桜美聖也  
サクラミサトヤ

雷門中三年の男子生徒。最近転校してきて、サッカー部に入部した。ポジションはMF。

青みがかった黒髪とキヤップが特徴。群青色の瞳の中性的な容姿。黙つてれば相当な美形。が、とんでもない方向音痴。運動神経は良いのにドジ。さらに、可愛い口を男女問わずお持ち帰りしようとする問題児。雷門中の数少ないギャグ要員である。

体力馬鹿で怪力馬鹿だが、コントロール音痴すぎて試合ではあまり戦力にならない。必殺技は一応、彗星シート。

FFで帝国地区予選の際、鉄骨の下敷きになりかけたにも関わらず足の骨折だけで済むほど丈夫。また、どこかの国の軍に関わる仕事をしていると専ら噂であり、謎の多い人物である。

外見は中二だが、見た目通りの年齢ではない。天涯孤独となつた吹雪の面倒を見ており、今でも仕送りは欠かせていない。

その正体は、S級犯罪者・災禍の魔女アルルネシアを追つて、異世界からやつて来た創造の魔女キー・シクス。性別年齢外見を自在に変える事ができる為、普段は少年の姿をしている。が、性格と喋り方は完全に素のまま。

吉良星一郎直属の警護頭にして秘書官。エイリア石に關わる研究と実験を推し進める科学者達のリーダーである。

後ろでくくつた茶髪のおかっぱが特徴。紅い眼をした、二十七歳くらいの妖艶な美女。ある日突然吉良の元に現れ側近になつた為、エイリア学園メンバーからは多かれ少なかれ疑念を抱かれている。

冷酷で身勝手なサディストであり、ガゼルを始めとした多くの子供達に嫌われている。実は、全ての事件の鍵を握る存在である。

その正体は、自分の喜悦の為にあらゆる世界を混乱に陥ってきた災禍の魔女・アルルネシア。死者を自在に生き返らせ、駒として操つたり、人々の心の負の要素を増幅させ洗脳する事が出来る。

人間をゴミとしか思つておらず、良識などひとかけらも持ち合わせていない。聖也いわく、“最低最悪の愉快犯”。

## 【1・0・Message from Satoya Sakurami】

「この世界にやつてきた俺の、一番古い記憶は…大体四十何年か前のものになる。

その時まだ俺は、桜美聖也の姿をしていなかつた。キーシクス、とこう名の魔女にしてソルジャー。二十歳前くらいの女の姿で、世界を調査して回つていた頃だ。

そのガキに出逢つた場所は、公園。しかも酷い雨が降つていた夕暮れ。もう子供はどうに帰る時間だ。なのにわいつは傘もささないで、雨の中泣いていた。

サッカーボールを抱きしめて。

『ボウズ』

俺はその日の仕事はもう済ませてあつたし（部下に押し付けたとも言つ）、特に急ぐ用も無かつた。何よりさすがに見過『』すのもやるせなくて、ガキに声をかけたわけだ。

『んなとこで、何やつてんだ。風邪ひくぞ』

突然見知らぬ女が現れて、傘を差し出されて。ガキは相当驚いたようだ。寧ろ怯えさせてしまつたかもしれない。

そりやそうだ。見知らぬ大人にほいほい着いてつちゃいけませんよ、なんて小学生並の注意事項。今の御時世なら即行で防犯ブザー鳴らされてもおかしくない。

いや、確かに女の姿ではあつたけども。田つきが悪いのは自覚してゐるわけですよ。

変な誤解を招かずに済んだのは時代のせいか、子供が憔悴していたせいか。

『だつて…地面がびしょびしょじや、練習できない』

少年は嗚咽しながら囁つた。

『練習できなきや、サッカー上手にならない。サッカー上手になんなきや…父さん笑つてくれない…』

気付いたよ。涙を流すガキの、シャツから覗く首や手足に。明らかに普通じゃない傷がたくさんついていた。

サッカーの練習じやこんな怪我はしない。明らかに殴られて紫色に変色した箇所や、鬱血や引っかき傷。トドメが煙草を押し付けられた跡とくじや決定的だ。

『お父さん、叩くのか?』

尋ねると子供は微かに、本当に微かに頷いた。

『…僕が、悪い子だからいけない。でもね。サッカーが上手になつたら、父さんも喜んでくれるから』

だから、練習したいのに、雨が降つてきちゃつたの。と。子供はますます、胸が痛くなる声で泣き出してしまう。

そのガキは、父親から虐待を受けていた。それでも、サッカーをやつている時だけは、父も笑つてくれるし痛い事もない。だからもつと上手になりたいと切実に願つていた。

全では大好きな父に、愛される為に。

『…雨の中でも練習したら、風邪ひくよ。風邪ひいたら、もつと練習できなくなつちゃうよ』

俺は涙を流す子供の頭を撫でて、言った。自分に出来うる限り優しい声で。

『でも元気でいたら、明日も明後日もいっぱい練習できるから。今日はもう、お家に帰りな』

その日はそのまま彼を家に送つただけで終わった。それが、自分と彼の出逢いであり、全ての始まりとなつた。

数日後。今度は晴れていた日。

ガキはまた公園にいた。そしてたつた一人でリフティングをしていた。

『よお』

また声をかける。子供は目をまんまるくして俺を見た。

今日は泣いていなかつたが、子供の怪我は明らかに増えてやがる。額には大きいガーゼが貼つてあつたし、首筋からは火傷の跡が除いてた。

またお父さんに叱られたのか。痛くないのか。そう尋ねると、平気だよ、と笑う子供。

『平気。僕強いもん!』

そうか、と。頷ぐに留める。

確かに、彼は強い子なのだろう。どんなに残酷な目に遭つても立つてようとする。どんなに痛くても耐えようとする。

昔の俺より・・母親に殴られても世界を呪うしかできなかつた自分より・・何百倍も、強い。

だから心配なのだ。そういう子は受け流す事ができず、いつかボ

ツキリ折れてしまいそうで。誰かを、何かを憎む事でストレスを発散する事ができないまま、いつか大きく爆発させてしまつ氣がして。

『父さんは怒ると怖いけど、サッカー上手になつたらいっぱい誓めてくれるんだ!』

だから練習しなきや、とまた笑う。愛らしく笑顔の筈なのに、どうしてこんなにも胸が痛くなるのだろう。

『サッカー、好きか?』

子供はますます笑顔を輝かせて、頷く。

『うん!僕、サッカー大好き!…』

俺はその子の頭を撫でる。それだけしか出来る事が無かつたから。

『じゃあさ…俺にもサッカーを教えてくれよ。君の名前はなんていうんだ?』

ガキは木の枝を捲ってきて、地面に文字を書いた。この年の子供が書けるだけで凄い、難しい漢字だったが、彼は書き順すら間違えなかつた。きっと根がまじめで頭もいいのだろう。

『れいじ…影山零治だよ…』

その名前は - - 僕にとつて一生忘れられないものになる。

『 そうか。俺は、キーシクス。 … よろしくな、零治』

それから暫く続いた、俺と零治とのとさやかな日々。

零治にとつてサッカーは、父と自らを繋ぐ絆であり。幸せになる為の白き魔法でもあつた。サッカーをする事で彼は誰かを呪う事なく、魔法に溶かす事ができたのだ。

零治は本当にサッカーが上手で。ついでに指導もうまかったから驚いた。素人だつた俺がみるみる上達していったのだから。

『 キーシクスは、パワーはあるのにノーコンだなあ』

『 うつせーや!』

俺は幸せな気持ちを、零治からたくさん貰つた。零治も俺とサッカーをしている瞬間は幸せであったと - - そう信じてもいいのだろうか。

だが、零治の傷は日増しに増えるばかり。酷い時はガーゼや包帯から血が滲んでいた。近所では有名な子供だつたそうだ。なんせ虐待は明らかで、父親は世間に名の知れた人物だつたから。

どうにかして少年を救えないものか。そう考えた俺は零治の身辺を調べ始める。

影山東吾。零治の父はプロサッカー選手だつた。全盛期ではMFとしてチームの指揮をとり、幾度となく勝利に導いたという。だが - - 円堂大介率いる新人勢に日本代表の座を奪われて以来、スランプから抜け出せなくなつてしまつたそうだ。

絶不調の影山東吾を、ファンもメディアも責め立てた。ついたあだ名は『疫病神』。酷い話ではないか。調子のいい時は散々持ち上

げていた癖に、不調になつた途端コレである。

生真面目で有名だつた東吾がどれだけ追い詰められていたかは、本人にしか分かるまい。ただアルコールに溺れて、どんどん堕落していったというのは事実のようだ。

鬱屈したストレスは全て、自分よりか弱い存在に向けられた。つまり、幼い零治に。

妻が病弱で入院がちだつたせいもあるだろう。暗い家には父と息子の二人だけ。中でどんな惨たらしい仕打ちが行われていようとも、誰も止める事はできなかつたのである。

しかし、このままではいずれ零治は死んでしまう。周りの人間や警察は見て見ぬフリなのか。いくら本人が父と共にいたいと望んでいても、これでは - - 。

『キーシクスにも、教えてあげるね』

記憶の中で、幼い彼は笑つていた。必死で、必死で、自分の無力さ以外の何者も呪わずに生きていた。

『サッカーはね、魔法なんだよ。大好きな人と、仲良くなる魔法。一緒に幸せになる魔法なんだ』

彼の言う大好きな人というのが、父親である事は明白で。

『だから僕はサッカーが大好き!』

虐げられても傷つけられても、彼は父を愛していた。父に愛される事を望んでいた。

その愛が歪んでいる事を誰にも教えて貰えないまま。その愛が普通だと信じたまま - - 大人になつてしまつたのだ。

結局俺は、零治を救う事が出来なかつた。

ある日パツタリと公園に来なくなつた零治。俺が彼を救う手だてを見つけられないままに。

零治は父と一緒に失踪。空っぽの家はめちゃくちゃに荒れていって、壊れた食器や倒れた棚が散乱し、ゴミが散らばつていたといつ。やがて父親だけが、山の中遺体で見つかった。まるでその後を追うように母親も病死した。零治は - - 行方不明のままだつた。

彼がその後どんな人生を歩んだかは分からぬ。だが俺は四十年後、救えなかつたその結果を田の前に叩きつけられる事になるのである。

サツカーラを愛し、幸せの魔法を信じていた少年は、もはや何処にもいなくなつていた。

愛していた筈のサツカーラを憎む事で、どうにか生き残ってきた零治。そうしなければ生きてこれなかつた彼。

そうさせたのは、一体誰だ。何のせいだ。何故こうなつたのだ。

- - 多分俺は、少しでも罪を償つ方法を捜してた。

吹雪を引き取つて、我が子のように育てようと決めた裏には。かつて救えなかつた幼子への罪滅ぼしの意識が少なからずあつて - - それを使い出すたび罪悪感な襲われた。

吹雪は零治の代わりではないし、自分のハコに利用される道具でもない。

- - それでも俺は誓つたんだ。零治を護れなかつた分も…吹雪を護

つてみせるつて。もう一度と、あんな悲しい子を出すものかつて。

悲劇は繰り返される。歪んだまま大人になってしまった零治は、サツカーへも教え子達へも歪んだ愛し方しかできなくなっていた。気付く。彼は歪んで尚誰かを愛そうともがいでいるのだと。

父親として、鬼道と照美に愛情を注いではいたのだと。ただそのやり方が間違つていただけ。自分が父にされたきた事と同じ事を一人にしてしまつただけで。

過ぎた時間は戻らないとしても。もつ遅すぎる事がたくさんあるのだとしても。

出来る事がまだあるなら、試したい。

・・四十年で。俺には護りたい物がたくさん増えたけど。お前の事、忘れた事なんて無かつたんだぜ。

零治との再会。別離。そしてまた俺は彼と再会しようとしている。多分、彼の一番根っここの部分を引き上げられるのは俺じゃない。傷ついて絶望して尚、彼を助けようと走る子供達だ。

照美と鬼道の二人。彼らは今でも尚、あんたを父親だと信じてる。血など繋がつていなくとも、心は繋がっている筈だと。

あんたが出した真帝国学園の招待状は。雷門を誘つた本当の意味は。あんた自身が、心の何処かで終わりを望んでいるからじゃないのか？

きつと零治は俺の事なんざ覚えてねえし。桜美聖也の姿の俺を見ても何も分かりやしないだろうが。

それでも構わないと思つた。一人が零治に手を差し伸べる、その手伝いさえ出来たのたら。

なのに。

教えてくれよ。どうしてこんな事になつた。あんたとエイリアは繋がつてゐんじやないのか？あんたはエイリアに帝国を破壊しない

よつに頼んだんじゃないのか？

もう一度鬼道に逢いたいって、誰より願つてたのは零治、お前だ  
るいづ。

- - 四十年前、俺はお前を護れなかつた。そして今また、俺はあの  
子を護れなかつた。

あの子もあんたと対決する事を望んでいた。なのに。  
どうして鬼道は殺されたんだ。何であんな酷い死に方をしなきや  
ならなかつたんだ。

- - とつぐに知つてたけどよ。神様なんかいねえつて。だけど。

今はその居もしない神様が憎くて仕方ない。  
もしかしてお前もまた、こんな感情を、四十年間も抱え続けてい  
たのだろうか。

## 【1・1・哀しみ、ブルー】

そのまま自分はびつやけり、氣を失つて病院に担ぎ込まれたらしかつた。

円堂が田覚めた時は翌日の晝になつていて、惨劇から一夜明けたと知つたのは、病院のベッドの上だった。

何だらう。起きたばかりだが、思考が何一つ正常に働いてくれない。感情が麻痺して、自分の体でないかのようだ。

「おはよう、円堂」

パイプイスに座つて円堂を覗き込んでいたのは、一之瀬。もしかして随分前から側にいてくれたのかもしれない。

落ち着いているように見える彼だが、目の下にはつら隈ができていて、本当は憔悴しきっているのだろう。それでも笑顔を作れるあたり流石だと思つ。

そういうえば、鬼道もいつもそつだつた。この二人はとてもよく似ている。本当は激情家なのにそれを押し殺して冷静な判断を下す。滅多に感情的に怒つたりしない。いつも余裕を漂わせる。

それが自分達の役目だと言うように。

「…一之瀬」

いつもなら、彼を気遣つ言葉の一つや二つ出した筈だ。しかし今は何も言う事が出来ない。

疲れきつた色を隠して笑う一之瀬の顔を見て、悟つてしまつたから。

「鬼道は…本当に…」

昨晚見たものは、嘘じやない。幻でもなければ質の悪い悪夢でもない。

紛れもない現実なのだと。

「円堂と一緒に、病院に搬送された。でも」

「之瀬も分かっている。だから沈黙する事も隠し立てする事もなく、ハツキリと告げた。

優しいだけの嘘に、意味など無いと知っていたから。

「病院でハツキリと死亡が確認された。遺体は司法解剖に回されたよ。…他殺なのは、間違いないらしいから」

他殺。つまり、殺された、ということ。

あの状況で事故や自殺である「筈がない。それは現場を間近で見た円堂が一番よく分かっている。でもその事実が。改めて重くのしかかる。

殺人事件だなんて、サスペンスドラマや映画の中だけの出来事だと思っていた。確かに世界では毎日人が人を殺しているわけだが、それが身近で起きるなんて考えもしなかつた事だ。

ましてやその被害者が、自分の大事な友達だなんて。

「…詳しい話、聞くか？」

「……うん」

「円堂も塔子も倒れちゃったし、帝国メンバーも錯乱状態で殆ど話にならなくて。だから事情聴取は聖也さんと瞳子監督が受けたんだ。まあ、どっちみち後で円堂のところにも来るかもだけど」

「之瀬が得た情報の大半は、聖也から聞いたものようだ。その聖也は警察からある程度詳しい状況を聞かせて貰つたらしい。鬼道有人の死因は、失血死。刃渡り数十センチ程度の刃物による、

全身何十力所の切り傷や刺し傷、最終的には心臓と肺に届く胸の傷が致命傷。

また、左手上腕、左足首、肋骨四本、左鎖骨が複雑骨折。右足は腱を切断されていた。骨折は素手による暴力が原因と思われる。

傷のほぼ全てに生活反応があり、被害者は長時間に渡つていたぶられたものと考えられる。また、性的暴行も受けた形跡あり。体内からは犯人のものと思われる体液が数種類見つかっている為、犯人は複数名と見て間違いない。

以上の事から、犯人は少なくとも男性が三人以上。犯行動機は私怨である可能性が高い……とのこと。

「鬼道は佐久間から呼び出しを受けたけど……電話はかかってきてない。メールだけだ。だから本当に呼び出したのが佐久間本人かも分からぬ」

メールアドレスは佐久間の携帯からだつたが、アドレスを偽装する方法も実はある。

それに佐久間が失踪中である事を考えれば、その携帯を奪つた別人がメールを送つた可能性もある。さらに仮に本当に佐久間が呼び出したのだとしても……本人が直接犯行にかかわっているとは限らない。

いざれにせよ佐久間も源田も行方不明のままで、事情を聞く事もままならない。そして佐久間が鬼道を殺す筈ない、と円堂も思う。彼も犯人に捕らえられているかも知れない。

下手をすれば、もう生きてはいないかも知れない。

「……俺もさ、そう信じたいんだけどさ、円堂」

「之瀬はうなだれるように言った。

「鬼道…犯人の名前、残してないんだ。事切れる前に、音無にメールして、お前へのメッセージを打つだけの余力があつたのに」

彼が何を言いたいか、分かる気がした。こういう時に限つて冴えている自分の頭が恨めしい。

つまり。鬼道がダイイングメッセージを残さなかつたのは犯人が全く見知らぬ他人だつたか。あんな目に遭わされて尚庇いたい相手だつたか…そのどちらかである可能性が高いということだ。

目隠しをされた形跡もない。犯行時は電気はつけられていたと推測される。なら、鬼道が犯人の顔を見ていない…というのは考えにくいくらい。

「あいつらが…やるわけない」

田堂は絞り出すように言つた。

「するわけないだろ。あんな酷い、真似」

自分は確かに、佐久間や源田について深くは知らない。帝国にいた頃、鬼道と殊更仲が良かつたという事くらいしか。  
だけど。

「だつてそうだろ。もしそうなら…そつなら…鬼道が…可哀想すぎる…つ…あいつは今まで何の為に…誰の為にあんな…」

じりえていた涙が、一気に溢れ出した。押し込めていた悔恨と悲哀と共に。一度決壊した涙はどれだけ拭つても止まってくれない。知つているのだ。自分は春奈から聞いている。鬼道が影山からの虐待を受けていたことを。それは鬼道が鬼道家から逃げる術を持たなかつたせいもあるだろうが…誰にも打ち明けず耐えていたのは

やはり仲間の為だ。

追い詰められて追い詰められて。それでも仲間を護るひつとひ力し、仲間の仇を討つ為恨まれるのを承知で雷門に転校し。全てに決着をつけるべく再び影山と対決しようとしていた鬼道。

その結果がこれなら。なんて浮かばれないのだろう。

「…俺も、そう思つ。仮に佐久間達が関わってたとしても…それはあいつらの本意である筈がないって」

「…俺も、愛媛に行くよ。真帝国学園に行く。そして…眞実を確かめる」

「え？」

「ああそうだ。自分達は本当ならもう愛媛に行っている筈だったのだ。鬼道が惨死したせいで、予定は遅れたが」

「…これは俺の…推理にもならない推測なんだけど。鬼道の死に方からして、恨みによる犯行じゃないかって刑事さんは言つてた。確かに鬼道が昔帝国で影山に従つてた時の事を考えると、いくらでも逆恨みは考えられる。でも…俺はその上でこう考える。結論から言おう」

大きな目と愛らしい顔に、静かな憤怒を載せて。一之瀬は言つ。

「鬼道を殺したのは影山ではなく、エイリアの一派。ガゼルが言つていた、”魔女”の派閥。目的は口封じと…俺達への見せしめではないか…と」

彼の考えはこうだつた。

鬼道はエイリアについて相当調べをつけていた。眞実に近付きつ

つあつた事だらう。先日もイプシロン相手に情報を引き出さうと奮闘していた。

だから“口封じ”である可能性はけして低くない。

さらにガゼルの鬼道への忠告。残酷な魔女がお前を殺しに来る - という言葉からして。ガゼルは“魔女”に対しいい印象を持つてない様子が窺え、また“魔女”ならばやりかねないと考えているのも見てとれる。

エイリアは一枚岩ではないのではないか。あの子供達は皆“エイリア皇帝陛下”の為だけに動いているつもりのようだが、上層部には派閥があるのかもしれない。

エイリアと繋がっている筈の影山は、鬼道を真帝国に呼びたがっている。ならば少なくとも真帝国と戦う前に鬼道を殺すとは考えにくい。だがエイリア内に派閥があるなら、エイリア内の影山とは別の一派が独断で犯行に及ぶ事も考えられる。

とにかく - タイミングがおかしいのだ。ガゼルから忠告を受けてそう何日も経っていない。影山から呼び出しを受けたのもつい先日。どうも偶然とは考えられない。

「そして…佐久間と源田は今、影山に捕まっている可能性が高い」

影山の事を調べていて愛媛で行方知れずになつたのだ。無関係とは到底思えない。

携帯はその時奪われたのかもしれない。洗脳されたのかもしれない。いざれにせよ事件に関わっている可能性のある影山、佐久間、源田の三人に - 愛媛に行けばおそらく逢える。

そうすれば事件の真相も掴めるかもしない。

「俺にとつても鬼道は大事な仲間だ。鬼道をあんな目に遭わせた犯人を絶対赦せない。俺は…真実が知りたい」

強い意志の光が、一之瀬の眼にはあった。彼とて泣きたい筈だ。怒り狂いたい筈だ。それなのに・・自分を律して、現実を見据えている。

自分なんかより、余程強い。円堂は、布団を握りしめる。

「…鬼道さ。言つてたんだ…死ぬ前の晩に」

『『どんなに離れても。サッカーが俺達の絆になる。ずっと繋がつて  
いられる』』

あの夜は、こんな事になるなんて誰一人想像していなくて。いつものようにサッカーをして、笑いあつていた。こんな日がずっと続くと、信じていた。

「エイリアとの戦いが終わつたら、帝国に戻るつもりだからって。  
だから別れつて…そういう意味だと思ってて。まだ…先だつた筈  
で」

別れても、望めばまた逢える別れの筈だった。一度と逢えない別

れになるなんて考えもしなかった」と。

「……でも……サッカーが俺達の絆だつて鬼道は言つた。俺もそう、信じたい。サッカーしてゐ限り……あいつが完全に死ぬ事はないんだつて。俺達の中で生きてる筈なんだつて」

再び頬を伝う滴を、じるじると袖で拭つた。悲しい。苦しい。辛い。感情は幾多にも混ざり合つて、爆発しそうで。

でも、ここで立ち止まる事を、きっと彼は望まないから。

「だから俺一答えはサッカーで出したい……！鬼道の代わりに、あいつが望んだ決着をつけにいきたい……！」

譲れなかつた友へ、それが唯一の償いになるのなら。

円堂の叩きつけるような叫びに、一之瀬はうん、と頷いた。泣くのを我慢しているような、儚い笑みを浮かべて。

「……じゃあ、俺。そろそろ行くから

「うん」

「……あのや、円堂」

病室を出て行く間際。一之瀬はドアに手をかけて、言つた。

「昨日十門と話してた事があるんだ。俺達みんな……お前と鬼道と豪

炎寺に頼りすぎてるって。お前達にばっかり…背負わせてるんじゃ  
ないかって」

そんな事ないよ、と円堂は即答する。一ノ瀬は背中を向けたまま  
首を振った。そんな事あるんだよ、と。

「だから…これから先、もうお前達にばかり荷物は背負わせない。  
お前が俺達を護ってくれる分、俺達も全力でお前を護る。…忘れな  
いでくれ」

何も言つ事ができなくなつた。一ノ瀬の細い背中が、泣いてい  
たから。

閉まる扉を見送るとまた涙が出て來た。円堂はベッドの上でうず  
くまる。田覚めて一番最初に逢つたのが、彼で良かつた。

「くつう…う…う…」

声を押し殺して、一人で泣き続けた。決意はすれど、もう一度と  
帰らない。失つてしまつた、大事な人は。

## 【1・2・彼方の、レクイエム】

一之瀬は早足で病院の廊下を歩いていた。少しでも円堂達の病院から遠くへ行く為に。正直・・これ以上は、限界だったから。

円堂が無理をしているのは明白。自分の言葉でさらに無理をさせてしまったのも明白。それでも一之瀬は、半ば無理矢理でも円堂を立ち上がらせた。・・そうしなければならないと、感じたからだ。

鬼道が死んだ。

豪炎寺はまだ帰つて来ない。

雷門というチームは、良くも悪くも一部のカリスマが引っ張る形で成り立つている。本人達にその自覚は無いだろうが、少し遠いアングルで見ればすぐ分かる。当面雷門の・・円堂依存傾向がさらに強まるであろう事も。

それはけして良い事ではない。だから自分は、土門と誓つた。これから孤独な戦いを強いられるだろう円堂を、自分達で支えていこう。彼がどうしても弱つた瞬間、吐き出して貰えるくらいの存在になろうと。

だがその為にはまず、チーム全体がこの悲劇から立ち直らなくてはならず、やはり第一歩は円堂に踏み出して貰う他ないのである。彼が無理にでも立ち上がってくれなければ、雷門は空中分解必至だ。しかしその後は。それ以降は、自分達も最初に立ち上がる人間になる。円堂の荷物から脱却し、支える側の人間になる。そうでなければ・・意味が無いのだ。鬼道の死に、報いる事もできやしない。

「一之瀬」

人気の階段まで来た時、自分の名を呼ぶ声が。誰だ、と尋ねる必要も無かつた。当の本人は目の前にいたから。

「頑張ったな。お前

一之瀬よりだいぶ背の高い聖也は、身を屈めてこちらを見る。その眼は、優しい。

「円堂の前でよく、泣かなかつたな。偉いよ」

「…立ち聞きしてたのか、聖也？」

「俺も見舞いに来たんだつてば。そしたら先客がいて、深刻な話してたんで退散したのー」

まるで小さな子にするように頭を撫でられて。気恥ずかしさよりも先に、涙腺が緩みそうになる。

本当はずつと、我慢していた。最初に、訃報を聞いた時からずっと。悲しくて悔しくて泣き喚きたかったのだ。

それをしなかつたのは、円堂が倒れていたから。後輩達の前だから。

知っているのだ。どんな状況でもチームで必ず一人は、最後まで冷静に判断できる人間が必要な事を。今までその役目は鬼道であり、豪炎寺だった。だが一人ともいらないなら、自分こそが役目を買ってなければと思ったのだ。

それに先輩の自分まで取り乱したら、後輩達はどうなる。ただでさえ不安がっている彼らを、動搖している彼らを誰が安心させてやるというのだ。

だから感情を全力で殺した。上辺だけでも冷静で強い人間を演じようと頑張った…愛する仲間達の為に。

「…人死ぬつて。大事な誰かがいなくなるつてこういう事なんだな」

胸の内から緩やかに込み上げる想いを。一之瀬は吐き出すよう、放つ。

「もう一度会えない。もう一度笑つてくれない。俺達はもう一度と、鬼道とサッカー、出来ないんだ」

自分で言つのもアレだが。一之瀬は自らの非凡さをある程度自覚していた。自分は一瞬天才であり、サッカーの才能に恵まれていても理解していた。

伊達にフィールドの魔術師と呼ばれていないので。

体格の無さはテクニックと觀察力でカバーしてきた。それで切り抜けられないピンチなんて、日本に来るまで無かつた事だ。日本に来て初めて実力という意味でも壁にぶつかり。それを寧ろ嬉しく感じていた。

その壁の一つだったのが、鬼道の存在。個人技で自分と互角。觀察力では自分の方が劣るだろう。その分フィジカルでは自分が勝つだろうが、彼と対決して有利な勝負をさせて貰えた試しがない。

いつか鬼道に読み勝つこと。その策を読み切る事。それは一之瀬にとって一つの目標でもあった。

けれど。もうその目標を達成する事はできない。お互い最も望まない形で、鬼道に勝ち逃げされてしまったのだ。永遠に。

「悲しくて悔しくて…それだけで死んじゃいそうなんだ…つ…！何で鬼道があんな風に死ななくちゃいけなかつた！？鬼道が一体何をしたつていうんだつ！？まだたつた十四歳じゃないか…つ…！」

叫きつけるように、叫んでいた。

「しかも…俺、最低なんだ。鬼道が死んで初めて理解したんだから。身近な誰かが死ぬつてこんなに…こんなに辛いんだつて…！」

「しかも…俺、最低なんだ。鬼道が死んで初めて理解したんだから。身近な誰かが死ぬつてこんなに…こんなに辛いんだつて…！」

この痛みは、悲しみだけじゃない。どうしようもない、取り返しのつかない過去の、後悔にも、起因するもの。

「俺、本当に身勝手だ。自分勝手だ！こんな想いをずっと…土門や秋にさせてたんだから…」

あの日の事は、実は一之瀬自身もあまりよく覚えていない。生きていたのが奇跡と言われたほどの大怪我をして病院に担ぎ込まれ、長く生死をさ迷つたのだから当然かもしだれないが。

ただ、もうサッカーどころか満足に歩けるようになるかも分からぬ、そう宣告されて。絶望して。大好きな二人の親友と顔を合わせ勇気さえ持てなくなつて。

一之瀬一哉は死んだ事にして下さい、と家族に頼んだのは事実。友人達にもそう伝えて欲しいと。

サッカーが無い人生なんて考えられなかつたのだ。サッカーが出来なくなつたら自分なんか死んだも同然。いや、あながち比喩でもない。松葉杖で屋上に上がつては、何度も死を考えたかも分からぬ。あの時自分は、自分の事を考へるので精一杯だつた。それはどうしようもない事かもしれない。今同じ状況に置かれても冷静な判断を下せるか分からぬ。

だけど結果として、誤つた選択をしたのは間違いないのだ。一之瀬が死んだと聞かされた時。事故を目の前で見ていた二人はどれだけショックを受けたか。傷ついたか。

優しい彼らのこと。きっと長い間己を責め続けていただろう。そうさせたのは他でもない一之瀬で、だけどその罪の重さに、自分はまるで気付いて無かつたのだから笑える話だ。

あれだけ秋と土門を傷つけておいて、のうのうと日本に現れた自分を、彼らはまるで咎めなかつた。赦す赦さない、という概念すら頭に無かつたのかもしれない。

その心のどれだけ責い事か。ゆえに自分はどんな大きな過ちを犯

した事が。今になつてやつと理解させられたのだ。大事なチームメイトを喪つて、同じ痛みを味わつて、やつと。

「…それが分かつて、良かつたな。それだけで多分…意味はあつたわ」

頭を撫でる聖也の手は温かい。見つめる眼は、優しい。彼だつて傷ついてない筈はない。鬼道の死に悲しみと憤りを感じない筈がない。

だけどそれを押し隠して、自分の前に立つてくれてゐる。一之瀬の傷を少しでも癒やそうと慰めてくれる。

ああ、そうだ。彼は自分より年上なのだった。そして吹雪の保護者なんだつて。きっと…親として人を愛する事を、知つてゐるんだ。「…泣けよ。今なら俺以外誰も見ちゃいねーから、泣け。抱えてるもん全部ブチ撒けちまえ。…偶には先輩面させひや、後輩」

「…すみません」

スッと抱き寄せられる。背中に回される腕。スッポリ収まつてしまつ、身も心もまだまだ小さな自分。

ぎゅっとその胸にしがみついて、叫ぶ。

「悔しい…悔しい悔しい悔しい悔しい…」

溢れ出す。溢れかえる。涙と言葉と一緒に、感情が。

「何でだ！何で鬼道がつ！何であんなにボロボロにされてつ…まるでゴミみたいに捨てられてつ…ふざけるなよ…ふざけんじゃねえよおお…つ…！」

ただ殺すだけじゃ飽きたらズ。犯人達はよつてたかつて鬼道を痛めつけたのだ。私怨？口封じ？見せしめ？そんなもの知るか。奴ら

の理由なんか関係ない。

十四歳の男の子を輪姦して、リンチして、ボロ雑巾のよつた姿にして命を奪つた奴らの事なんて理解できない。したくもない。

鬼道は自分達の大事な仲間だったのだ。奴らはそれを最低なやり方で奪い去つた、それだけが全てだ。

何処の誰かも分からぬ変態どもが、今憎くて憎くて仕方ない。もしそれが佐久間達だつたら？ - - 寧ろこの憎しみはさらに濃くなるだろう。裏切り者。大好きなチームメイトに殺された鬼道がどれだけ無念だつた事か。

考えるだけで - - 腸が煮えくり返りそうだ。

「犯人を赦さない…絶対に赦さないつ - 殺してやる殺してやる殺して八つ裂きにしてやる - - つ！」

呪いの言葉を泣き叫ぶ一之瀬を、聖也はただ抱きしめて頭を撫でてくれた。一之瀬が泣き止むまで、ずっと。

「この知らせを、本当に伝えていいものなのか。『デザームの自室の前で、ゼルは一人思い悩んでいた。

「ここ最近で、いろんな事が起こりすぎている。先の京都での戦いから、イプシロンメンバーにも動搖が広がっている。原因は一つ。

『それでも戦うのか？たとえ…最終的に…自分達が人殺しの道具にさせられても…？その全てが、お前達の信じる人の意志ですらなく

ても…か…?』

あの雷門の鬼道、といつMF。彼が言つた言葉。そして。

『この勝負、預からせて貰おう』

まるで鬼道の言葉を遮るよひに現れ、勝つていた試合を中断させたガゼル。

自分達の知らない“何か”が、上で起きているのではないか。自分達は皇帝陛下の為に戦つてきましたが、果たして今までの命令は本当に全て陛下のご意志だったのか…。

疑惑を呼ぶ理由の一端が、自分達イブシロンが所詮ファーストランクのチームに過ぎないという事。陛下に謁見し、直接御命令いただく立場がないのだ。

だからもし、その“繋ぎ”に位置する上層部が…マスター・ランクの三人か一ノ宮か研崎が…命令を捏造していくも分からぬのである。

不安がる部下達に向けてデザームは言つた。自分達はエイリアの戦士。陛下のご意志を疑つことは赦されない。さかし陛下以外を疑う事は可能である、と。

特に、一ノ宮蘭子…あの魔女への疑いは日増し濃くなるばかりである。デザームは、上層部の事や彼女について独自に調べてみるとおりのようだ。

- - 貴方は優しく強い方だ。でも…だからこそ私は、貴方が心配で仕方ないのです。

確かに、ゼルとて不安な気持ちが無いと言えど嘘になる。でもそれ以上に、デザームの身を案じる気持ちの方が強いのだ。知りすぎてはならない。疑念を抱きすぎてはならない。その結果

どのような末路を辿るのか - - その実例を、ゼルは知つてしまつたから。

- - 私達に情報を与えた... 鬼道有人が死にました。

明らかに口封じと見せしめ目的だつた。あれは雷門のみならず、自分達イプシロンへの見せしめでもあるとゼルは考える。

あの残酷極まりない殺し方。あの魔女が黒幕である事は明白だつた。

- - 知りすぎれば... 貴方も奴と同じ目に...。

そんな未来は、想像するだけで恐ろしい。自分達は確かに皇帝陛下に尽くしてきた。しかし自分達を率いるのはデザーム以外には考えられない。彼以外の下で働くなんて考えたくもない。ゼルは意を決して、ドアを叩いた。

## 【1・3・花葬されし、追憶】

空は、晴れている。昨日の雨が嘘のよう、真っ青な色が頭上に広がっている。

残酷過ぎるほど、綺麗だ。世間はまるで何事も無かつたかのようにな動く。当たり前のように夜が来てまた朝が来る。それすらも、塔子にとつては恨めしい事だった。鬼道はもういいのに。彼の時間は永遠に止まってしまったといふのに。

「――昨日の晩じゃないか。鬼道が死ぬ前の晩だぞ。あたし達、いつもみたいに会話して……それで……」

月が綺麗で。ゴーグルを外してこちらを見つめてくれる鬼道の姿も、それ以上に綺麗で。

『好きだ、鬼道。愛してるって意味で……あたしはあんたが好きだ』

自分は想いを、伝えた。何年越しになるかも分からぬ、恋を。叶わなくてもいいと思った。ただ伝えておきたかったから、伝えた。だけだ。

『これがその、答えだ』

鬼道は最高の答えを返してくれた。塔子にとつても、多分鬼道にとつても生まれて初めてのキス。優しい味だった。愛しくて愛しくて、抱きしめて離したくないと、心からそう思つて。

自分は改めて誓つたのだ。鬼道を護ると。もう一度と傷つけさせないと。なのに。

その翌日が彼の命日になるだなんて……一体誰が想像しただろ？

「護れなかつたんだ、あたし。

あんな暗くて狭い場所で。ボロボロにされて棄てられていた鬼道。SPとしての知識と経験は、否が応でも事實を塔子に見せつけた。彼がどんな形でなぶり殺しにされたのかも。

「護れなかつた。

SPファイクサービスのリーダー失格だ。

本当なら、現場でもっと冷静な判断を下すべきだった。少なくともあの光景を、帝国メンバーに見せるべきでなかつたのは明白である。

なのに、自分はそうしなかつた。自分の感情で手一杯で、取り乱して。彼らをより傷つける結果を招いた。瞳子監督にもさぞかし迷惑かけた事だろう。

「でもさ。仕方ないじやん。大好きな人が、あんな死に方して落ち着けつてのも、酷い話だろ。

寝転ぶ河川敷。塔子は割とすぐ病院から解放された。取り乱した事は取り乱したが、日頃の訓練の成果か落ち着きを取り戻すのも早かつた。特に外傷があつたわけでもない。

だがそもそもいかないメンバーが数人。完全に気を失つてしまつた円堂に春奈。酷く錯乱した帝国メンバー。暴れた彼らを取り押されて、ひつかき傷をつけられた瞳子。

あとは吹雪も。思いの外取り乱し、パニック状態に陥つたので少しの間病院の世話になる事になつた。また、公に入院させられないが、レーゼがまた体調を崩して倒れたので休ませる必要ができた。事件の内容が内容だ。警察としても自分達にすぐ東京を離れられ

ては困るだろ？。自分達が遺体の第一発見者なのも間違いないし。結果。どうやらあと何日かは東京に留まるしかないと判断され、今に至る。

「赦さない。赦すもんか… つー犯人見つけたらブッ殺すだけじゃおさんねえよ… つ…！」

怒り。悲しみ。現実への絶望。自らへの失望。

それらがグルグル胸の内に渦巻き、今にも破裂しそうで。それが、怖かった。技術的には…自分はいくらでも他人を殺せる。それが複数の大人としても、関係あるまい。

今の自分は…感情に任せてそれをしてしまいそうで、恐ろしいのだ。力を持つゆえの恐怖。自分で自分が分からぬ。だがどうすればこの闇を打ち払えるかも、見当がつかない。

「！」

（ ）

場の空気の重さとあまりに不似合いな、ケータイの着信メロディー。この音はある人専用だつた。慌ててポッケから携帯電話を取り出して通話ボタンを押す。

『…塔子』

聞こえてきたのは大好きな父の声。

『悪いな、急にかけて…鬼道君の事、聞いたよ』

「…………うん」

どうして。総理大臣なのだ、忙しくない筈がない。今日は確か大事な首脳会談があつたとかなんとか…

もしかして無理矢理時間を空けてくれたのだろうか。大事な人を失つてハンパなく落ち込んでるであろう、自分を励ます為に。

「……何でこんな事になつたのか、本当によく分かんないんだ」

考えて喋るのは最初からやめた。元より性分ではない。ただ思い浮かぶまま語る事にしようと決める。

「あいつの事、本当に好きだつた。ビツコウもなく、好きだつた」

零れるよつに、零すよつに。

「だからビツコウとか、そこまで欲があつたわけじゃないんだ。あたしがあいつを好きなら良かつた。そしたらあいつも応えてくれて、もっと幸せになつた。だから……一緒にいられたら、それで良かつた筈なんだ」

紡がれるよつに、糸ぐよつに。

「ただ鬼道と並んで。円堂達と一緒に。サッカーしてられれば、それ以上に何も要らなかつたんだ……！」

だから。それを阻む物は全て排除しよう。その為に、彼を傷つけるすべてから護ろうと決めたのだ。

分かっている。鬼道の為じやない。結局全ては彼と一緒にいたい自分の為。自分勝手なエゴに違いないという事は。

それでも。彼が笑つてくれる場所になれるなら、それで良かつたの。

『：人が死ぬつていうのは、そういう事だ。いなくなるつていうの

は、そういう気持ちなんだよ』

黙つて聞いていた財前は、やがて静かに口を開く。

『塔子はまだ小さかつたから殆ど覚えてないだろうけど。：母さんが死んだ時も、そうだった。今の塔子みたいに泣いたし、悔しくて仕方なかつたよ』

塔子は目を見開く。それは初めて聞く、父の本音。

父の言うとおり、自分は母親の事など殆ど覚えていない。小さい時、海外でボランティアに行つた先で、熱病にかかり、死んだといつ話は聞いているが。

『塔子の母さんは、誰かに殺されたわけじゃなかつた。だけど私は恨まずにはいられなかつたよ…世界を。とにかく何でもいいからこのやるせない気持ちをぶつける先が欲しかつた』

分かる気がする。

悲しみを消す為に。怒りを紛らわす為に。何でもいいからその祖先となる何かが欲しい…そんな気持ちは、今まさに塔子の中にくすぶつっているものだ。

『復讐しても愛した人は帰らない。それは本当は誰だつて分かつてる。それでもぶつけて、壊さずにはいられないのが人間。赤の他人に綺麗事を並べる権利なんかない』

復讐。まさにそれも考えていた事。

犯人が憎い。赦せない。法に触れると分かつていても殺してやりたい…それで何かが解決になるわけでもなくとも、そう思った。

自分は人間で、それ以上でもそれ以下でもないから。

『私が正気を保てたのは塔子、お前がいたからだ。私が一時の激情に身を任せればお前はどうなつてしまつた。お前の存在が私の理性を留めてくれた』

「愛する、存在…」

『愛とは誰かを慈しむ気持ち。貴ぶ気持ち全てを言つ。お前を愛する人、愛してくれる人はたくさん要る筈だ。お前はみんなに愛される子なんだから』

愛。それは友愛や家族愛にも言える事。塔子は目を閉じる。たくさんの顔が浮かんでは消えていく。

父や鬼道だけではない。雷門のみんな。SPフィクサーZのみんな。いつも自分を影ながら助けてくれる大人達。自分はたくさんの人々に愛されて、此処にいる。

『その上で教えて欲しい、塔子』

父がしゃんと背筋を伸ばす気配。

『お前が一番やりたい事が、何なのかを』

そつと芝生から上半身を起こし、考える塔子。やりたい事。すべき事。一体、何だろう。

『私は…塔子に、イナズマキャラバンを降りて欲しいのが本音だ』

「…」

『エイリアと関わり、エイリアの秘密に触れたせいで鬼道君は消された可能性が高い。そして彼をあんな惨たらしく殺害した最大の目的は、お前達への見せしめであり、警句だろう。我々に関わる者は皆こうなる…とな』

ぎゅう、と携帯を握る手に力がこもる。鬼道は一人、真実に近付いていた。イプシロンとの会話だけでも分かる…多分彼はエイリア学園の正体をハッキリ掴んでいたのだと。

だから消された。理屈は分からないわけじゃない。が、納得しきれない。

ジョミニーストームもイプシロンも、数多く破壊活動を行つた。それで怪我をした者も少なくない。

けれど実際に試合してみて。また、記憶を失つたレー・ゼを見て感じたのは。サッカーをする彼らは内面的に見れば普通の子供となら違ひがないという事だった。

そんな彼らが、口封じと見せしめの為とはいえ鬼道を殺す？

いや・・彼らは何も知らないのかもしない。彼らの上にいる“エイリア皇帝陛下”てやうが独断で、別の駒に命じた事ならば。

『塔子が強いのは分かつている。それでももし…塔子まで同じ目に遭つたら。そう考えると…私はそれだけで死んでしまいそんなんだ』

でもね、と財前は続ける。

『それはあくまで、塔子に無事でいて欲しい私の願い。塔子の願いじゃ、ない。だから…最終的な決断は、お前が自分で決めなさい』

いつも落ち着いている父の声が、微かに震えていた。本気で心配されているのだ。

当然かもしれない。チームメイトが、おそらくエイリアの秘密を知つたせいで殺された。塔子は雷門の一員としてエイリアと戦い続けている。親として不安にならない筈もない。

そしてその“愛”が当然である事の、なんと幸せな事か。鬼道と春奈のように両親を早々に失つてしまつた子供達がいて。木暮のように信じていた親に裏切られた子供もいる中で。

『私は、塔子が心で選んだ道なら…どんな道でも応援する。たとえそれが復讐だつたとしても』

スッ、と眼を閉じて。一つ息をついて、塔子は自らの心に問う。  
一番やりたい事は一体何なのか。一番望む事は何なのか。

死んだ大好きな人。

護れなかつた約束。

心配してくれる父。

愛すべきたくさんの仲間達。

再び眼を開いた時、塔子の心は決まつていた。

「あたし… 鬼道を殺した奴が、赦せない。今日の前に現れたら、殺しちゃうかもしない」

せめて仇を討ちたい。それもまた紛れもない願いである。そのドス黒い感情を、憎悪を、憤怒を、忘れる事なんてできるわけもない。だけど気付いたのだ。それは多分…一番やりたい事ではない、と。

「だけど… それ以上にあたし、真実を明らかにしたい。もうこんな事が起きないよう… エイリアを止めたい」

大好きな人達と、笑つてサッカーできる世界。その願いは鬼道を失つて尚変わつてはいない。

彼はもういなけれど。もう抱きしめる事も、キスをする事も叶わないけれど。

彼の愛した世界は、此処にある。

愛する仲間達ね中で、生きている。

「あたしはみんなの世界を、あたし達のサッカーを護りたい。その為に、戦う。立ち向かう…！」

『 そつか』

父に申し訳ない気持ちがないわけじゃない。だが決めた。自分は

父を、愛する人達を裏切らない。

生きて生きて、生き抜いてやる。

「パパ、ありがとう

塔子はジャージについた草をはらって、立ち上がった。やるべき事はたくさんある。だから。

「あたしは、行くよ

## 【1・4・墜落する、走馬燈】

一体何をしているのだろう。

多分、端から見ればおかしな光景だ。佐久間は自嘲しようとして失敗する。嘲りの笑みすら、この顔には浮かんでくれない。源田と二人。サッカーのフィールドのど真ん中で、背中合わせに座っている。しかも懐かしの体操座り。何してるんだろうなあ、と思う。それでも、誰かの体温を感じていないとおかしくなりそうだった。

この虚しさを、共有できる存在がいなければ、源田がいなければとつぐに気が触れていた。

本当はもうとつぐに正氣でないのだとしても、最後に一本だけ残っている理性の糸は、佐久間にとつて人間としての誇りだ。一人きりならとつに断ち切られていた事だろう。

「…人間はさ。死ぬ前に走馬燈が巡るって言つだろ」

沈黙を破り、先に口を開いたのは源田だった。

「鬼道も…少しでも…ほんの一瞬でも…死ぬ前に思い出してくれたかな。俺達のこと」

ほんの少し前の自分なら。ぐだらない、と一蹴するか、情けない事を言うなど激昂しだらう。

今はそのどちらもできなかつた。源田の言つ通り、せめて鬼道が思い出してくれたならとすら思つた。僅かでもみすぼらしくとも、救いと呼べるもののが欲しい。喉から手が出るほど欲しいのだ。

それだけ…佐久間の心に重く重くのしかかる、鬼道有人の死。彼が赦せなかつた。憎いと思った。だがそれは…かつて彼を尊

敬し、誰より敬愛してきたからこそ。

自分達を置き去りにして、ボロボロで打ちひしがれる自分達を捨てて雷門に行つた男。勝利さえ得られれば、彼は仲間の存在なんてどうでも良かつたのだ。

気付いた時の絶望は言葉にもならない。全ての愛情が憎悪へとひっくり返る。裏切り者。赦せる筈がない。彼を断罪せずしてこの怒りが収まる筈もない。

だから自分達はこの真帝國学園に来たのだ。力を得て、鬼道と鬼道の愛する雷門をぐちやぐちやに踏み潰す為に。ひれ伏させる為に。一度は決別した影山に従う事も厭わず、今に至るのである。彼を倒し、勝利を得る為なら何でもしよう。禁断の技を学ぶ事もそれにより身体が悲鳴を上げようと構わない。そう思つた - - それなのに。

何故彼は死んだのだ。自分達との再戦も果たさず。自分達の目的を叶える事も自分達の裁きを受ける事もなく。どうして? 何で? どうして?

「どうすりやいいんだよ... 源田」

どうしよう。視界が滲む。憎い敵が、ボロ雑巾のような有り様で殺されたのだ。恐らく苦しみ抜いて死んでいったのだ。むしろ喜ぶべきだらう? なのに。

「俺達...俺達、鬼道と戦つ為に此処に居るのに... - - 鬼道がいないなら何の為に... 何の為に...」

ポロポロと大粒の雨がフイールドに落ちる。きっと今、自分はくしゃくしゃの、とんでもなく情けない顔で泣いている。醜い姿だ。何が醜いかもよく分からなければ、でも。

頭がガンガンと痛む。胸の奥がズキズキと悲鳴を上げる。身体中

にドス黒く渦巻く感情の汚物。吐きそうだ。汚らしい言葉を神聖なフィールドで吐き散らしてしまいそうだ。

怒りも虚しさも悲しみも、感情の行き場が何処にもない。鬼道を憎む事でやつと保てていた心が。定まっていた未来の方向性が一気に崩れた。

再戦して、彼を敗北に跪かせて。いつも背中しか見えなかつた彼を、裏切り者と罵りながら追い越して、屈辱を味あわせてやること。それが目標だつたし、生きる目的でもあつたというのに。

鬼道のいな雷門と戦つたつて何になる。意味なんかない。あの人の泣き顔も笑顔も併んでやれない。

自分は何の為に。これから誰が為に戦えばいい？生きればいい？

「憎めばいいのさ」

ふと思考に割つて入つた声。ハツとして顔を上げる佐久間。入り口の方。モヒカン頭の我らがキャプテン・不動明王が、手をひらひら振りながら歩いてきた。

「憎め。怨め。憤れ。お前達の怒りは、鬼道が死んだら萎んじまつ程ヤワなもんだったのか？」

不動は自分達のすぐ側に立ち。ニイ、てどこか狂気じみた笑みを浮かべた。

「お前達が一番恨むべき奴らがいるじゃねえか。お前達は憎めばいいのさ…雷門つてチーム、そのものをな…！」

「な…に…？」

最も恨むべきは、雷門。行き当たらなかつたその発想に、思わず源田と顔を見合わせる。

「おいおい、何意外ですつて顔してんだ。当然だろ。よくよく考え

てみるよ」

呆れたように溜め息をつく不動。

「雷門と試合しなけりや…アイツリと出逢わなけりや。鬼道はそもそも総帥に逆らわなかつた筈だぜえ？」

「…！」

「あいつらに鬼道は感化された。あいつらが鬼道を騙して、誑し込んだ。その結果お前らも“仕方なく”総帥と決別させられて、帝国は弱体化しちまつた」

「…！」

「で、フットボールフロンティア。…どうなつた？結局勝つたのは総帥のチームだつたらお？で、お前ら負けて病院送り。あー無様無様」

「…！」

「で、落ち込むあんたらの元キヤプテンの心の隙をついて雷門の奴が誘いやがつた。甘い誘いだ。世宇子に勝ちたいだろ？勝利の酒を味わいたいだろ？つてな」

「…！」

「そして後は知つての通り。鬼道ちゃんは雷門の奴にフランフランついてつちまつた。負けた原因是自分のくせに、お前らに咎をまつと押し付けて捨ててつた」

「…！」

「で、最期どうなつたよ？雷門に騙されで、雷門を信じて、雷門の為にうかうかエイリアと戦つた鬼道ちゃんは？」

嫌だ、 聽きたくない。

だが佐久間は耳を塞ぐ事が出来なかつた。まるで金縛りにあつたかのよう、動けない。

そんな佐久間と源田に、不動は容赦なく告げる。

「あーんなみつともない姿で、ボロ雑巾にされて、殺されちまつた。お前らに謝罪の言葉も無いまま、雷門に騙されたまま！…雷門の奴らは鬼道を護らなかつた。鬼道を騙して引き込んだくせに、奴一人に危険を押し付けて見殺しにした」

耳元で囁かれる。

絶対的な、言葉を。

「鬼道は、雷門の奴らに殺された」

耳なりが煩い。頭に激痛が走る感覚。佐久間は頭を抱えて呻いた。見開かれた眼からは涙が止まらない。がちがち。がちがち。歯の根も合わず、震える身体。

がたがた。がちがち。

がたがた。がちがち。

心の中の冷えた部分が伝える。不動の言う事は、正論。けして間違つてなどいない。寧ろそそうだとしたら自分はずつと、憎むべき眞の敵を見誤つっていた事になる。

鬼道は騙された。むしろ被害者なのであるまい。騙したのは誰だ。その挙げ句、使い捨ての駒にして、見殺しにした悪魔は何だ。

雷門だ。

「う…ああああああああ - - - ツ！」

結論が出た途端、佐久間は絶叫していた。頭をかきむしり、喉が

潰れるのではという程の声を絞り出していた。

佐久間だけではない。源田も同じように叫んでいた。恐ろしい。

自分の中にこれほどの激情が、憎悪が眠っていた事が。

「憎い…憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い…」

「殺してやる…殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺して

やる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺して

やる殺してやる…」

「そうだ、憎めつ！怨めつ！憤れつ！それを全て力に変えろおつ！」

！」

二人の呪詛の声と、一人の狂喜の声。弾ける紫色の光は、二人の眼に映らない。

目の前の男は、紛れもない魔術師だった。力ある言葉を操り、他者を抉り、他社を囚える魔法使い。自分達は多分その魔法に嵌つた。だが、それを分かつて尚抜け出そうという気が起こらない。何もかも、壊してしまえ。

くたばれ、世界。

「潰してやるつ…全力で…！」

皮肉にも、雷門への憎しみに支配されてやつと、佐久間は気付いたのである。もう一度と叶いようのない願いに。

自分はただ。また鬼道と一緒にサッカーがしたかった。

自分も源田も彼が大好きだったからこそ憎んでしまったのだと。もはや全ては遅いのかもしけないけれど。

最後の正氣が、一滴の涙と共に流れた。

まったく、呆気ないものだ。

不動はやや拍子抜けしつつも、上機嫌に影山の部屋をノックした。

「お前は“魔術師”としてはなかなか才能があるな」

影山は椅子に深く腰掛け、振り向く事なく言つ。さつきの一部始終は勿論チェックされていた事だろう。

「本来魔法使いとは、どこぞの空想妄想の話ではない。簞で空を飛ぶ事でも、宙から茶菓子を降らせる事でもない。力ある言葉を武器に、民衆を操り扇動する者を言つのだ」

「そりやどうも」

だったら、影山こそ悪魔も畏れぬ大魔術師ではないか。彼のカリスマは魔術的な力を發揮する。人々を畏れさせつつ魅了する力だ。自分はある目的の為に彼に近付いたわけだが。側にいると分かる。彼の言葉の“魔術”を知らなければ、きっと魅せられ、本心から平伏させられていた事だろう。

「なんか…今日は元気ありませんねえ、総帥？ひょっとして悲しんでたりします？」

あの鬼道有人が、影山が天塩にかけて育てた最高傑作だったという事は知っている。

だからこそそいつを完膚なきまでに潰してやれば、自分の力を示す絶好の機会になると思った。だから雷門と試合できる日を、心待ちにしていたというのに。

「……」その変態が鬼道を殺してくれたおかげで、計画が大きく狂ってしまった。おまけに佐久間達の洗脳は解けかけるし、雷門はしばらく東京で足止めされるっぽいし。

いやそもそも……鬼道がいなくなつても、雷門は愛媛まで来てくれるかどうか。

「……」さとなつたら手はある、と総帥は言つたが。その内容までは知らせて貰つてないわけで。

「……悲しむだと、この私がか？」

「ぐだらない、と鼻で笑う影山の声。それはいつもと何も変わりないようになつてゐる。

「いつも言つてる筈だがな。とうに捨てた駒に興味はない。終わつた過去は過去でしかない」

「そうは言つけれど。何でいつも見ないんだか、と思つ。彼が泣くとまでは思つていながら。彼が自分を見ないなど、今更と言えば今更だが。

「へいへい。すみませんね、野暮な詮索で」

不動は、納得したフリをした。それ以上考えたら思い出してしまったから。

愛に飢えて、愛されたくて愛されたくて伸ばすのに振り払われる手と。

「こちらを見て、耳を傾けて欲しいのに。遠い昔赤に消えた幻と、幻によく似たあの子供ばかり可愛がるあのの人を。

何も考へるな。

自分はただ前だけ見つめていればいい。計画は狂つた。だがジエ

ミニストームを倒して一躍有名になつた雷門と、試合をえできれば後は問題ない。

自分がスカウトしてきたチームで雷門を倒せば、きっとあの人がつて認めてくれる。自分を見てくれる。

「失礼しますよつと」

去り際。不動はチラリと影山を振り返る。

「愛なんてくだんないんですよ、影山センセイ？」

「くだらない。そう思いながら愛を求める自分を、人は矛盾と呼ぶのだろうけど。

## 【1・5・砂時計、セリセラ】

幸せとは、零れ落つ砂のようなものなのだ。僅かな時間であつと  
いう間に掌をすり抜けてしまう。なくなつてしまつ。

そしてどれだけ強く握りしめようと、掴みきる事は出来ないのだ  
——春奈は今まさにそれを実感しつつあつた。

キャラバンの中に今いるのは、春奈と木暮の二人だけ。別にキャラバンの中ではなくとも良かつたのだが、とにかく今は一人になりた  
くて此処に来た。

そしたらなんと先客がいて。そのままなんとなく一人で此処にいる。気を使うでもなく、語り合つでもなく。

口を開けば、虚しい傷の舐めあいになると感じたのかもしれない。言葉を発する為の気力すら、億劫だつたのかもしれない。それでも二人は並んで、その場所にいた。なんとなく握つた手も離さないまま。

——私、まだ夢なんじゃないかつて思つてゐる。だからうつまく、涙も  
出ない。

ずっと離れ離れになつていていた兄。兄というより、親のようにすら頼つていた唯一無二の存在。

かつてはそんな鬼道の心を疑つていた。連絡を貰えない虚しさと悲しさを、卑屈に解釈して誤解した。帝国で傲慢にすら振る舞う彼を見て失望すらした。

そして酷い言葉を投げつけて、深く深く傷つけた。

——やつと、一緒にいられるよつになつたのに。笑えるよつになつたのに…何で?

出来の悪い映画でも見ているかのよつ。ああ、映画だとしたらとんだB級だ。やつと和解できた兄妹が夢半ばで永遠の別れを - - んで。くだらなすぎて誰も感動できやしないだろひつひ。

これが現実？そんな馬鹿な。

きつと自分はまだ悪い夢を見ているのだ。パソコンに向かいすぎたのか雑用しすぎたのか - - きつと疲れたのだ。だから爆睡しそぎてまだ目が覚めていないのだ。

そうだ、そうに決まってる。早く起きなきや。こんな馬鹿げた悪夢など見ている場合じやない。マネージャーが寝坊したらみんな困るし、先輩達にも迷惑かける。

兄はきつと怒らないだろひ。でもきつと、ちょっと苦い顔で笑つて春奈を叱る。昔からそつ。自分が悪い事をした時はそつやつて道を正してくれた。大好きなお兄ちゃん。これからはずつと一緒にいられる。これからは - - 。

「おまえ」

木暮の、声。春奈は我に返り、声の主を見た。

彼は青ざめて、だけどとも胸の痛くなるような顔で - - 自分を見つめていた。どうしてそんな悲しそうな顔をするの。春奈が尋ねるより先に、木暮が言った。

「やめろよ。現実から、眼を背けるの」

一瞬。

世界が、停止した。

まさか今の考えが全て口に出ていたのか。なんてこつぱずかしい  
いや、それよりも。

「何、言つてるの。木暮君」

何だろつ。喉が、カラカラに乾く。

「これは夢でしょ。夢だと言つて何が悪いの。いいじゃない別に。意地悪しないでよ。…ああ、今の木暮君も夢の中の住人だもんね。だから木暮君にとつては現実みたいなもので…」

「いい加減にしろよつ…！」

ビクリ、と肩を震わせる春奈。絶叫に近い、怒声。木暮が本気で怒つているのが分かる。大きな瞳には、凄まじいまでの怒りが煮えださぎつっている。

「鬼道有人は！あなたの兄貴は死んだんだつ！！悲しいからつてその事実を無かつた事にすんなつ…！」

どくん、と心臓が一つ大きな音を立てた。木暮の言葉が頭の中をぐるぐる回る。

死んだ。死んだ。誰が？

アンタノ

兄貴ハ

死ンダンダ。

「…どうして」

自分が今どんな顔をしてるだろ。やつと醜い顔に違いない。

「エヘン、そんな事いつの」

じり、と一歩木暮に近づく。まるで『鎮圧されたように』木暮は後退る。

「やつと、お兄ちゃんと仲直りできたの。やつと一緒にいたられるようになったの。やつと笑って貰えるようになったの。やつと私は、『めんなれ』が言えたの。やつと、やつと、やつと…なの」…」

ぐにゃぐにゃと皿の前の景色が捲む。恵みしこ。恵みしこの『思いで出してしまつ現実。思に田わせたのは皿の前の、マイシ。』

「何でつ…何で思いで出でせるの…！…何で忘れさせてくれなこのつ…？…お兄ちゃんが死ぬ訳な…！…死んだなんて嘘つ…！…嘘嘘嘘よつ嘘に決まつてゐわつ…！」

ガシリ、と掌が華奢な肩の感覚を知つた。気付けば木暮の小さな両肩を掴んで、窓際に勢いよく押し付けていた。木暮が痛みに呻く。しかし怒りと、絶望と、気が狂い出しそうな悲しみに支配された春奈は、自らが何をしているかも分かつていなかつた。

「これは悪い夢なの…私が目覚めれば全部消えてる夢なの…お兄ちゃんがきっと私を起こしてくれる…そしたらまた楽しい現実が待つてゐ…お兄ちゃんが、お兄ちゃんが、お兄ちゃんが…」

「…ふざけ…んなよ」

ギリギリと凄まじい力で肩を掴まれる痛みに脂汗を流しながらも、木暮は鋭く春奈を睨みつける。

「誰だつて逃げたいわ…。それ自体は悪い事じやないさつ…。だけどな、あんたの兄貴は言つたぞ、待つていても都合のいいハッピーエンドなんか来ないつて…！」

『チャンスが無いなら作つてみせる。都合のいいハッピーエンドなんて、待つていても訪れない。自分で創らない限りはな』

蘇る言葉。それは漫遊寺で、鬼道が木暮に言つたものだ。あの夜、彼は確かに生きていた。そこにいた。そんな何日も前の話じゃない、なのに。

「最後に立ち上がる為の逃げなら…アリかもしね。だけど今のお前、ほんとにただ逃げてるだけじゃん！いいのかよそれで？それで現実が何か変わらのかよ…お前の兄貴、生き返るのかよ…？」

黙れ、と叫んだ筈の喉は枯れて音にならない。木暮の肩を掴む手がブルブル震える。『き、と嫌な音がして悲鳴が上がった。漸く自分で現実している事の重大さに気付く、青ざめる春奈。

その春奈に、木暮は容赦なくたたみかける。

「悲劇のヒロイン面すんなつ！悲しいのがお前だけだと思うなよつ…！…どんなに否定したつてなあ…いなくなつた大事な人は帰つて来ないんだつ…！」

大きな目についてぱいに涙をためて木暮が叫ぶ。その言葉が春奈を抉つた。

帰つて、来ない。

「う…あ…」

ずるり、と滑り落ちる手。木暮が左肩を押さえてうずくまつた。本氣で痛いそうだ。やつたのは、他でもない春奈。だが我ながら酷い事に、今は別の事を考える余裕がまるで無かつた。理解してしまつたから。ハツキリ実感してしまつたから。これは悪夢などではない。今こそが現実。紛れもない現実。鬼道は、本当に。

「あああああ…」

本当に、死んでしまつたのか。何故だ。じつしてだ。じつしてこんな事になつたのだ。

受け入れてしまつた事実はあまりに重く、眞実は残酷で。

「お兄ちやつ…お兄ちやあんつ…うわああああ…」

泣き叫ぶ春奈は、キャラバンに乗つてきた第三者の足音にすぐには気付かなかつた。足音は通路を抜け、春奈と木暮のいる座席の前でピタリと止まる。そして、言つた。

「顔を上げる、春奈」

強い口調での命令。春奈はぐしゃぐしゃの泣き顔で、その人物を見上げる。

塔子が「王立ちで、自分を睨みつけてるのが目に映つた。

裏切られた、だの。失望した、だの。  
そう感じるのはお門違いと分かっている。鬼道とて何も望んであ  
んな末路を辿ったわけではないのだから。  
それでも吹雪は思ってしまった。

・・嘘つき。

そう思つた自分を、心底恥じた。

・・でも君は、言つたじやない。自分はいなくなつたりしない……つ  
て。

雷門中のグランondsは、ほぼ葬式モードだった。一応練習時間には  
なつてゐるが・・身の入つてゐる者は誰もいない。何人かは私用や  
入院でいなくなつてゐるし、残つたメンバーも落ち込みが激しくて練  
習どころではなくなつてゐる。

吹雪もその一人に違ひなかつた。ベンチに座り、頭を垂れる。

・・ほら、見てよ鬼道君。

思い出しだか。栗松が鼻を啜る。それが壁山や田金にも伝染した。  
そのままあちこちで嗚咽が漏れ始める。

「みんな、泣いてるよ。君は雷門にとつて…本当の本当に、必要な人間だつたんだよ。」

元々帝国にいた鬼道。エイリアとの戦いが終われば帝国に戻るとも言つていたわけで。

それでも今や彼は雷門の司令塔であり、副将と言つても過言でない存在だつた。彼なしでは作戦は成り立たず、冷静に敵を分析し活路を見いだす事も出来ない。そんな存在だつたのだ。

能力のみならず。彼にはカリスマ性があり、人徳もあつた。気遣い上手な人柄も、鬼道が皆に慕われる要因だつただろう。

それがこんな形で失う事になつて。これからどうすればいいのか。戦つていけるのか、彼なしで。そんな不安がありありと伝わつくる。

「…どうして、僕を置いてみんな死んじゃうんだろう。アツヤも鬼道君も…僕なんかよりずっと必要とされていたのに。」

「これは罪なのだろうか。弱いくせに生き残つた自分への、あまりにも重たい罰。」

「…やつぱり、そつなんだ。僕が完璧じゃないから…譲れないんだ。」

「…吹雪」

緩慢な動作で顔を上げる。染岡だつた。彼は視線を泳がせて、吹雪を見る。なんて一言を選ぶべきか分からぬで困つている…そんな表情だ。

「…」めんね、染岡君

「…！」

「鬼道君とは…君の方が付き合い長いのに。辛いのに。…気遣わせ

ちやつて、『めん』

「…馬鹿野郎」

染岡は吹雪の隣に座つて、一言さう漏らした。

「どつちが辛いとか…んなの、ねーだろが。俺にどつてもお前にとつても…大事な仲間だつた事に、代わりないんだからよ」

彼なりにできる、唯一の慰めなのか。ぐしゃり、と頭を撫でられた。まるで子供扱いだが、不快じゃない。

その大きな手が思い出す。今まで自分の頭を撫でてくれた人達のことを。父に母。そして聖也。頭を撫でてくれるような存在でなくとも、大切な人はたくさんいる。白恋のみんな。雷門のみんな。だけど。大切なものが増えれば増えるほど、いつか失うその時が怖くなる。

「…人つて、簡単に死んじゃうんだね」

いなくなる。消える。

全ては砂のようすり抜ける。

『完璧じゃなくたつて…護れる物はあるさ。田舎を見ろ。あいつは完璧じゃないから負ける。だけど何回だつて立ち上がる』

鬼道はあの晩、そう言った。でも。

『…その強さは、完璧な存在よりもずっと貴い物だと思つ。…安心しろ。俺達はお前の前からいなくなつたりしない。…大事な仲間を置いていつたりはしないさ』

結局、いなくなつてしまつた。完璧じゃない自分に護れるものな

んて何も無かつた。

「みんな、いなくなつていぐ」

「んな悲しい事言つなよ！」

染岡は叫び、うなだれる。

「世話のんじやねえよ…つ畜生…」

ああ、彼も悲しいんだ。みんな悲しいんだ。  
誰も、悲しみから抜け出せないのか。

「…お前ら、いつまでもそつしてゐる氣だ」

はつとして顔を上げる一人。チームのみんなが同じ方向を見てる。  
土門と照美が、厳しい顔で立っていた。

## 【1・6・正解、不正解】

本当は、自分は春奈に嫉妬していたのかもしない。塔子は目の前の少女を見つめて、湧き上がりそうになる黒い感情を押さえ込む。彼女は鬼道の妹。たとえ長く離れ離れになつていても、当たり前のようにそこに血の絆がある。彼と同じ場所から生まれてきたという、絶対無一の証が遺伝子の中に刻まれている。

だから無条件で愛される。妹として、大事にして貰える。

本当はそんな彼女が、羨ましくて仕方が無かつた。自分と鬼道の間には確かにものなど何一つ無いのに、彼女はある。それが妬ましいとすら思えて、そう思うたび、自己嫌悪に陥つた。

春奈は自分にとつても可愛い妹のような存在で、愛すべき後輩だ

といつた。彼女を愛しく思う気持ちに、嘘は無いといつた。

何より、彼女を否定する事は、鬼道を否定する事になる。絶対にしてはならない事。不可侵の領域。その場所にだけはどうあっても他人の自分は踏み入れないし、踏み入つてもならないのだ。

「春奈。気付いてる？あんたと鬼道の間にだけ存在できる、サンクチュアリって奴に。

あるいはホーリーランド。あるいはエデン。その場所が、鬼道と離れている時間ですら、長く長く春奈を護り続けていた。つまりは、鬼道が春奈を愛し、春奈が鬼道を愛しているという血と心の絆そのものが。

だが、春奈が今していることは、自らを護つてくれていた聖域を汚し、歪ませる事に他ならない。塔子はどんなに願つてもその場所に入れないというのに。彼女は現実の兄すら追い出して、妄想に閉じこもるうとしている。

「そんな事、あたしが赦さない。」

「顔を上げろつたんだよ。聞こえなかつたのか」

春奈は涙を浮かべたまま、視線をさまよわせる。そしてまた、俯こうとする。だから一喝した。

「俯くな春奈！真正面からあたしの顔見やがれつ！！」

「- - つ！！」

びくりと身体を震わせ、また顔を歪める春奈。お門違いだと分かっているが、やはり自分は彼女が羨ましくて仕方ない。

実の妹だから。それだけで彼女は無条件に赦されるのだ。鬼道の傍にある事も。彼の死を遠慮なく泣き喚く事も。その死を否定して逃げる事も。

赦されてはならない場所まで、赦されて。それでは何も解決できやしないのに、周りの人間が現状維持する事で目を逸らしたらどうなる。

彼女はますます病んでいくだけ。壊れていくだけ。生温い赤の他人の優しさは、破滅を誘う麻薬にしかならない。

「…鬼道が一番に何を望むか、とか。あんたに何がして欲しいか、なんて。あたしには分からない。死人に口は無いからよ」

ならば自分が、無理矢理にでも引っ張り上げてやる。

鬼道を愛する自分が。春奈を愛する自分が。愛するからこそ、彼女を殴りとばして、ボコつてでも連れ戻す。

現実は残酷かもしね。しかし、その先にきっと、光があるから。

「だけどこれだけは分かるんだ」

ら。

君に届け。この想い。

「あんたがこのまま不幸になつても… 鬼道は絶対喜ばない」

天国に届け。この願い。

「俺達がこのまま立ち止まつても、あいつは絶対喜ばない」

土門は咄とんせつ、ハツキリ告げた。

「あいつと滅茶苦茶キレるな。俺がいないくらいでサボるなつて」

ぐるり、と。どこか閑散としてさえいるグラウンドを見回す。  
風丸。富坂。栗松。壁山。田金。吹雪。染岡。彼らは皆重たい空  
気を引きずつたままどこか下を向いている。それは別に恥ずべき事  
じやない。むしろチームメイトが死んだのを悲しめないようならば、  
そっちの方が恥ずべき事だ。

本当は土門とて、年甲斐もなく泣き喚きたくて仕方ない。一ノ瀬  
が死んだと聞かされた時もそうだった。悲しくて悲しくて、気が変  
になつてしまいそうで。

延々と後悔し続けた。あの時、飛び出そうとする一ノ瀬を自分が  
止めていたら。そもそもあの日、サッカーをしようとした彼と秋を誘わ  
なければ。

だけど、自分を責め続けても、現実は何も変わらなくて。

「昔な。……一ノ瀬が死んだって聞いた時。俺はサッカー、やめようとしたんだ」

その話に、初期メンバーがハツとしたように顔を上げる。彼らは一ノ瀬がかつて事故にあって瀕死になり、土門と秋がその現場を見ていた事を知っていた。一ノ瀬が死を偽装していたのも聞かされていた。

だから気付いたのだろう。土門が「大事な仲間の死に直面するのが、これで二度目だ」という事を。

「……だけど。結局サッカーをやめなかったのはさ……。俺のサッカーの中に、一ノ瀬の存在が生きてるって事に、気付いたからなんだ」

サッカーさえなければ。そう思つてボールを捨てようと思つた時も、あつた。

それが結局、できなかつたのは。してはならないと気付いたからで。

「サッカーをやめたら。俺は一ノ瀬をもう一回殺す事になる。それだけは絶対…嫌だつた」

風丸の唇が、何かを言いたげに動きかけ、また閉じられた。鬼道と付き合いの浅い宮坂を除く他のメンバーも、似たり寄つたりの顔をしている。

皆それぞれが考へているのだろう。死者は一度死ぬ。されど死者は生きる事ができるかもしない。

人は想い一つで時に魔法使いになれる。世界を変える事も、死者と歩む事も出来る。

幸せこそ、最大の魔法だと気付く事さえできたなら。

「俺は今度も、同じように考える」

『土門。雷門に入った今の俺は…帝国のキャプテンでもなければお前達の統治者でもない』

「俺は、鬼道をもう一度と死なせたくない。…鬼道だけじゃない。もう大事なチームメイトを誰一人死なせたくない」

『だから、頼みがあるんだ』

「だから…サッカーをやめない。サッカーから逃げない」

『これからは俺を…お前と対等の存在と思ってくれないか』

鬼道が雷門に来たその日。千羽山との試合の後鬼道が自分に言った言葉を思い出す。それまで自分は鬼道に対し、尊敬と畏怖からある程度壁を作っていたふしがあった。鬼道のその言葉は意外だったが、実は結構嬉しくて。

その日から土門は鬼道を“さん”付けで呼ばなくなつた。彼に敬語を使うのも、やめた。

彼に近付けた事が、彼の隣に立つ事を許されたのを、本当に幸せに思ったものだ。

「サッカーが、俺達の絆だから。そのサッカーを護る為に…鬼道の誇りを繋ぐ為に考えたい。俺達に、何ができるのかって」

「サッカーをする事で、それがあたし達の中の鬼道を生かし続ける。その為にあたし達が、あんたがするべき事はなんなんだ。あんたが一番したい事はなんだ」

「私が…するべき事…」

ぎゅっと胸の前で手を握りしめる春奈。その様子を塔子も、いつもは騒がしい木暮も真剣な眼差しで見守る。

「私……お兄ちゃんをもう、殺したくない」

握りしめた春奈の両手。その手の上を走るより零れる滴。

「あんなに…苦しい想いして、死んだんだもん。 もうお兄ちゃんを死なせたくない、よ」

でもどうすればいいの、と。涙をポロポロこぼしながら問う春奈に、塔子は静かに首を振る。

「それは、あたしが決めていい事じゃない。あんたが自分で考えなきゃいけない」

父が言いたかった事が分かった。

他人が、どうこうして欲しいと意見を押し付けるのは簡単だ。だが本当に心で道を選ぶべき時、それで満足のいく答えなど得られる筈もない。

今がその時。春奈が自らの力で未来を切り開くべき時なのだ。残酷な現実すら、乗り越えて。

「鬼道はサッカーを愛していた。だから帝国に戻るのを遅らせてでも、エイリアと戦う事を選んだんじゃないのか」

自分達は何の為に集つた？何の為に戦う？  
忘れるなかられ。自分達は史上最強のサッカーチームになる為に  
此処にいるという事を。

「諦めるな。此処であたし達が諦めたら、鬼道の大好きな絆も死んじまう  
殺されちまつんだ！」

「諦めるな。此処で俺達が諦めたら、俺達の大好きな絆も死んじまう  
んだ！」

「何の為にあたし達は此処にいるんだー！？」

「何の為に俺達は集まつたー！？」

「あなたの兄貴の愛した、あなたの大好きな世界を護る為に

「俺達を結んでくれた、サッカーを護るその為に」

「それに…」のままあたし達が、真実から逃げ出したらいつなる?」

「…」のまま俺達が俯いて真実を知らないまま終わつたら

「鬼道はまさしく犬死にだらうが!」

「それで一体誰が救われる? 幸せになれる?」

「…」そんなのあいつが望む筈ないつ…」

「だからあたしが言いたいのは一つ」

「だから俺が言いたいのは一つ」

「「諦めるな！死んでから諦めろ……。」」

だつて。自分達はまだ、生きてるのだから。

さつきより大きな泣き声が。壁山がいつにも増して大きな声で泣いている。他の皆も。富坂ですら、風丸と一緒に嗚咽を押し殺している。

その涙の流し方が、さつきまでとは違うと土門は気付いていた。土門隣に立っていた照美が一步前に進み出る。

「私達は前に進まなくちゃいけない。鬼道君だけじゃない。いなくなった全ての人の想いを繋ぐ為に、私達は此処にいるんだから」

でもね、と彼は泣きそうな笑みを浮かべる。

「その悲しみを、優しさを。忘れちゃいけないよ。絶対に」

照美もまた、愛するものを失う辛さを誰より理解している。彼は強さと引き換えに、チームメイト達を永遠に失い、自らの未来すら失つてそこに立っている。

それでも尚乗り越えて、立ち続けている。  
だから、強いのだ。

「…僕、逃げません」

涙と鼻水でぐちゃぐちゃになつた顔で。それでも一番最初に口を開いたのは田金だった。

「最後まで戦います！僕だって雷門の一員なんだ！」

そういえば。田金は一番最初の帝国の試合の時、真っ先に逃げ出してしまつたのだけ。本来けして勇敢な性格ではないのだろう。それでも逃げ出さずに、今この場にいる彼。それはきっと。

「…俺も」

田元を拭いながら、風丸が続ける。

「逃げない。逃げるわけにはいかない。だつて鬼道が言つたんだ。知らない事は罪じやないけど…知らないからで赦される事は何も無いって」

『知らない事は罪じやない。…だが、知らないからで赦される事は何もない』

神のアクアを隠し持つてゐるんじやないかと、照美に詰め寄つた風丸。その時鬼道が彼に平手を食らわせて言つた言葉を、土門は思い出していた。

本来、とても正義感の強い人だつた。だから帝国イレブンは皆その意志の強さに惹かれて集つたのだ。帝国だけではない。雷門のメンバーもきっと、その強さに支えられてきた。

今度は、自分達の番だ。

彼が暴ききれなかつた真実を。彼を殺めた者達の迷惑を。自分達が明らかにする。その為に、戦つ。

「…行けり、真帝国学園とへりく」

染岡が立ち上がった。他の皆も泣き顔ながらも次々に立ち上がる。

「君のまま引き下がつてたまるかーー。」

魂は、引き継がれる。

## 【1・7・魔法の、言葉】

瞳子は、考える。

自分が今すべき事を、何をすべきかといつ事を。

「私は、取り返しのつかない事をしてしまった。

自分の監督責任だ。自分が鬼道を止めていれば、彼が真実に近付くのを防いでいれば。

いや、それ以前に、だ。

自分が彼らを巻き込まなければ、父の凶行を止めてさえいれば。

「私には、あの子達を護る力さえ無いといつの……？」

無力感に、キリキリと心臓が痛む。鬼道有人。その主だったデーダは瞳子の手元にもあった。実力も頭脳も人徳も。優秀すぎるほど優秀な子だった。大人になればきっと、日本、いや世界のサッカー界をも背負つて立つ人材になつただろう。

それを自分が潰してしまった。自分に力が無かつたから、気付かなかつたから。それが悔しくて仕方ない。

「私は……本当にあの子達の監督でいいの……？」

そんな資格はない。あるわけない。そう思っていた……でも。

自分の前に現れた雷門夏未は言つた。瞳子に、これからも雷門を引っ張つていつて欲しいのだと。

『私も木野さんも……お見舞いに行つた先で、円堂君の強さに教えられました』

夏末の眼は真っ赤だった。相当泣いたのだろう。それでも彼女は真っ直ぐ瞳子を見据えて、告げたのだ。

『私達は… 鬼道君が命を落としたからこそ。立ち止まる事は赦されないんだって』

あとは監督が決めて下さい。

彼女はそう言い残し、瞳子の前から去つていった。

・ 立ち止まる事は、赦されない…か。

それは紛れもなく正論。そもそも自分はあらゆる逃げ道を塞いで此処にいる筈なのに。まだ心の何処かで退路を捜しているのだとすればとんだお笑い草だ。

鬼道の死は自分達全員の足を止めさせたが、同時に振り返る道を奪い去つたのだ。彼女達は瞳子よりも早くそれに気付いたのだろう。たとえこの道の先に待つのが絶望としても。自分達は進むしか無いのだと。

・ 私は…。

瞳子は、考える。

吹雪は、考える。

土門達が告げた言葉の意味を。これ以上喪わない為の百の方法を。

「サッカーは、絆。サッカーが、いなくなってしまった人をも、生かしてくれる。

ベンチに座り、ボールを抱きしめる。慣れ親しんだ優しい感触。丸いかたち。それは湿つた土の匂いがした。まるで雷門というチームが歩んできた長い道を示すかのように。

自分は、弱い人間だ。

あの雪崩の日。愛する家族をいつぺんに失つて、吹雪の世界は壊れてしまつて。彼らの死に狂う吹雪は孤独に耐えきれなかつた。たとえ愚かな幻でも、一人きりでないという夢を求めてしまつた。大事な人を・・土門もまた、一時的にとはいえ失つた事があつたのだ。けれど彼は自分のように、悲しい幻に頼る事はしなかつた。一人でも立ち上がる手段を見つけて、乗り越えたのだ。

それは照美も同じ。吹雪以上に過酷な境遇でありながら、前を向く天使。彼も土門と同じくどうに気付いていたからこそ、ファイールドに舞い戻つたのかもしれない。

愛した人は、彼らの愛したものの中で生き続ける。彼らの愛したサッカーの中に彼らは存在し続ける。

「だとしたら…僕のサッカーの中にもいるのかな。鬼道君の心も…アツヤの魂も。

頭の上に、温かな重み。

「聖也さん…？」

「よお」

いつの間にか病院から戻つてきたようだ。円堂君に逢つたの、と尋ねると、今日は遠慮しといた、と返事が返つてきた。

「土門の奴も強くなつたよな。ま、あいつもいろいろあつたしな」

ベンチメンバーとはいえ、聖也もフットボールフロンティアの頃から雷門にいる。きっと吹雪がまだ知らないメンバー達の秘密もたくさん知つてているのだろう。

今度聞いてみようかな、と思つ。特に染岡の話が聞きたい。初対面の時はあれだけ険悪だったのが、最近はやつと笑つて話ができるくらいになつたのだ。

コンビネーションもうまくいくよになつてきた。同じFWとして話も合つし、個人的には彼のようく真つ直ぐなタイプは嫌いじゃない。一緒にいると楽しいし安心するのだ。

「……昔な。俺に教えてくれた奴がいたんだ」

小さな頃と同じように。まるで幼子のように吹雪の頭を撫でてくれる聖也の手。恥ずかしいと思つ年になつてなお、彼に頭を撫でて貰うとほつとする。

自分の外見年齢も殆ど聖也に追いついてしまつた。何年経つても子供の姿のままの彼の年を、近い未来自分は追い越して大人になつてしまつだろう。

それでも彼は。自分にとつて一人目の、大好きなお父さんで。自分を救つてくれた恩人なのだ。

「人間はよ。望めば誰でも魔法使いになれるんだ。奴は言つたよ。自分にとつてサツカーは、幸せを叶えてくれる魔法なんだつて」

サツカーが、魔法。それは吹雪が考えもしなかつた、新鮮な捉え方。でも。

「素敵だね。その魔法」

サッカーをする事で、自分は幸せになれる。サッカーをする事で、誰かを幸せにできる。だとしたら。

「さうとも。俺達はこゝらでも魔法が使えるのや。それに變化えあつたなら」

のぞき込むように、吹雪の顔を見る聖也。その眼は、慈しみに満ちている。

「その魔法で、お前はどうしたい？」吹雪

吹雪は、考える。

風丸は、考える。  
もう戻らない時への償い方を。これから待っている未来への歩きだし方を。

「やつと…本当の意味で理解できたかも知れない。あの時、鬼道が俺を叱ってくれた意味。

グラウンドを吹く風は清々しい。ひんやりと頬を撫でるその冷た

さが、自らの頬を伝う涙を教える。

何もかも吹つ切るのは難しい。それに、神のアクアさえあればと願う気持ちが消えたわけでもない。でも。

もう少しだけ。もう少しだけ頑張ってみてもいいのではないか。自分自身の力でどこまでできるのか。何かを救う事が出来るのかを。諦めるのはいつでもできる。

しかし諦めない事は、きっと今しかできない。

「知らなきや、俺達は選択肢すら得られないんだ。

知らないからでは赦されない事もある。それは即ち、どんな事でも知る努力を怠るなれという彼からのメッセージ。

無論。足搔いたからといってたどり着けないものはたくさんあるだろう。願つた真実にあと一步のところで手が届かない事もある。やつと手にした真実が望んだ答えであるとも限らない。

だけど人はは、知ろうとする事ができる。

知る為に歩むか、眼を背けて立ち止まるかは、選ぶ事ができる筈だ。

「…僕…やつと理解できたかもしれません」

風丸の隣で。富坂が小さく笑む。

「どうして風丸さんが、このチームに入つたか」

「…? 勘違いだつたら悪いんだが…富坂はフットボールフロンティアの時納得してくれたんじゃないのか?俺がサッカーする事」

「ええ。納得しました」

でもそれ、違うんです。富坂は少し恥ずかしそうに俯いて言つ。

「それはあくまで…風丸さんがサッカーをする事であつて。“雷門サッカー部でやつていく事”は、僕の中でもた別問題だつたんです。

サッカーをやる風丸さんはかつこよくて応援したいと思いました。でもその一方で僕は、サッカー部の方々の事は恨んでもいました。…どんな理由であれ、風丸さんを僕達から奪つていつたのは変わりないから」「

それは意外な告白だった。まさかそんな風に思われていたなんて。申し訳なさと罪悪感に襲われる風丸。

よくよく考えれば自然な事だったかもしない。まるで陸上部を捨てるかのようにサッカー部に来てしまったのだから当然だ。むしろ今まで恨み言一つなく送り出してくれた富坂や速水には、本当に感謝しなくてはならないだろ？

「僕が此処に来たのは…風丸さんを助けたかっただけじゃなくて。風丸さんが選んだ人達を、間近で見てみたかったからなんです」

眼を閉じ、穏やかな顔で、ほっと息をつく富坂。

「来て、良かつた。…あんな風に叱ってくれて、支えてくれる仲間がいて。やつと安心できましたよ。土門さん達になら、風丸さんをお任せできます」

「富坂…」

「つて…すみません！こんな偉そうなこと…」

あわわっ、と真っ赤になつて慌てる富坂があまりに可憐らしくいので、風丸はつい吹き出してしまつた。

自分は、間違つた事をたくさんしたかもしい。これからも間違えるかもしい。」  
だけど。

「ありがとう富坂。俺…幸せ者だ」

ふと、気がついた。鬼道がああやつて風丸を気にかけてくれた理

由。それは自分と彼がどこかしら似ていたからではないかと。

風丸は陸上部からサツカー部へ。鬼道は帝国から雷門へ。過去に後ろ髪を引かれて、過去を護りながらも、新しい道を歩んでいた自分が達。

自分は彼ほど強くは生きれないけど。

「…頑張るよ。頑張つてみるから」

風丸は、考える。

そして、春奈は考える。

愛する人に恥じない生き方とは何か。大切なモノを護る千の方法を。

「…私…お兄ちゃんのいない世界で、幸せになる自信なんか、無いよ。

ずっと離れ離れた時も。本当は大丈夫なんかじゃなかつたのに、大丈夫なフリをした。いつも兄の姿を捜してしまった自分の依存症に気付いて、失望して、絶望して、それでも無理矢理歩いてきたのだ。

生きてさえいれば。いつかまた大好きな兄に再会できる日が来る筈。それが春奈にとつて最大の希望だった。

加えて音無家の両親は本当に優しくて。「ごく普通の一般家庭に小

さな家だつたが、血の繋がらない自分の事も本当に愛してくれた。二人の存在なくしては、兄がいない場所で頑張る事など出来なかつただろう。

「…」これは酔なかもしれない。…お兄ちゃんが傷ついてる時も、のうと幸せに生きてきた…私への。

そして、春奈の為に奔走してくれていた兄の愛情に気付かず、酷い言葉を投げつけた自分への。

鬼道は許してくれると言つた。だけど神様は、許してくれなかつたのかもしれない。

だとしたら兄がその酔の巻き添えを食つのは、あまりにも割が合わないのだけども。

「…お兄ちゃんは、もうこない。どんなに願つても、もう一度と逢えない。」

その事実を胸の内で呟く。それだけでじわじわと滲んで来る涙。

「…」これが夢ならどんなにいいだらう。でも優しい夢に逃げて私が狂つたら…お兄ちゃんを悲しませちゃうのかな。

分からぬ。でも兄はきっと自分を愛してくれていたから。少なくとも、喜びは、しない。

まだ、幸せになる方法は分からぬ。兄が喜んでくれる方法も分からぬ。

だけど。これ以上不幸にならない方法と。兄を少なくとも悲しませない方法なら、分かるかもしれない。

「…それはきっと…お兄ちゃんを…もう一度と死なせない方法。

涙を袖口で拭い、春奈は立ち上がった。

「…私にも、出来るかな」

いや。出来るか、ではない。きっとやらなくてはならないのだ。  
自分こそが。

「出来るかな。諦めないで、戦つ事が」

春奈は、考える。

## 【1・8・聖者の、行進】

そして決断の朝が来る。

円堂とレー・ゼも療養から戻つて来、雷門のグラウンドにはマネージャーも含めた現メンバーが全員揃つていた。

春奈はさりげなく全員の顔を見回す。

まだ眼の赤い顔が何人か。きっとそれは自分も同じ。それでも皆、逃げ出す事なくこの場所にいる。

未来を選ぶ為に。

「…私の力不足で鬼道君を死なせてしまった。それは否定しようのない事実だけど」

集まつた面々を前にして、瞳子が口を開いた。

「それでも私は…この戦い、降りるわけにはいかない。冷たいと思われても結構。私は、何があつてもエイリアを倒さなきやいけない。その為に雷門の監督になつたのだから」

鉄面皮。赤の他人から見れば、吉良瞳子という女性はそんな風に見えるのかもしれない。美人だけど、いつも感情の窺えない顔をしている。目的の為なら子供達をいとも簡単に切り捨てる非常な女だと。

春奈も。豪炎寺離脱の際など、彼女を疑わなかつたといえは嘘になる。他に方法は無かつたのか、とか。せめて配慮する気持ちくらいあつてもいいではないか、とか。

だけど。春奈は得意の高い洞察力で、それが彼女の本質でない事を見抜いていた。

レー・ゼをキヤラバンで保護したこと。話は聞いている、鬼道の遺

体を見つけた時、塔子や帝国メンバーの眼に触れさせないようになしたこと。

きっと本当はとても優しい人なのに、不器用なだけなのだろう。だからうまく言葉にできなくて、行動で語るしかなくて、本人が一番苦労しているのではなかろうか。

今だつて、自分が悪者になる事で、みんなの罪悪感を取り払おうとしているように見える。少なくとも春奈には。

鬼道もまた、そつだつたから。

「…俺は、知りたいです」

円堂が口を開く。

「今この国で、本当は何が起きてるのか。エイリアの正体は一体何なのか。鬼道は何であんな死に方をしなくちゃいけなかつたのか」

その大きな眼に宿るは、決意の焰。

彼は、強い。その強さに甘えすぎてはいけないけれど、その強さに支えられて、自分達は此処まで来る事ができた。この場所に集つた。出逢う事が、できた。

こんな時でも、いや、こんな時だからこそ自分達は実感するのである。

円堂寺という男に着いて来て、本当に良かったと。

「知つて…止めたい。これ以上悲しい事が起きないように…終わらせたい。鬼道が、俺達が、みんなが愛したサッカーをこれ以上汚されたくないんだ…！」

我らがキャプテンは叫ぶ。力強く、声高く。宣誓するよ！」

「答えはサッカーで出す。大事なのは諦めない事だ。犠牲を、歴史を、無駄にしない事なんだ！俺達が諦めない限り、俺達のサッカーの中で、絆は生きる。俺はそう、信じていますーー！」

それは、皆の心の代弁でもある。

答えはサッカーで、出す。愛する人が愛した方法で、自分達が愛する方法で。

それが故人の、生きた証。

「あたし達は愛媛に行きます、監督」

塔子が円堂の言葉を引き継ぐ。

「影山と接触すれば、何か分かるかもしない。何より…鬼道が遺してくれた想いを、あたし達が代わりにぶつけたい。過去に、決着をつけて、そして…鬼道が大切に想うチームメイトを助けたい」

そうだ。愛媛に行つたまま未だ戻つてきていない佐久間と源田。この悪夢は、彼らが行方不明になつた事から始まつてている。

鬼道は一人が失踪したのを知らなかつたから罷にかかつてしまつた。けれどもし知つていたとしても、呼び出しには応じたような気がする。

大事なチームメイトだから。彼らの存在そのものが兄にとつて、いつか帰る場所だつたから。

彼らを助けに行くと、鬼道ならそう言つ。それは確信。自分達はその願いを叶える義務と権利がある。何より。これ以上悪夢の犠牲者が出るのは御免だ。

「あたし達は逃げません。誰一人。そう決めたんです」

そうハツキリ宣言する塔子を、瞳子は眩しそうに見つめる。もしかして監督も薄々気付いていたのだろうか。塔子と鬼道がどんな関係にあつたのかを。

「私。まだ塔子さんに嫉妬してる。だつて貴女は最期の最期まで、お兄ちゃんの心を持つてつたんだもの。」

兄が死に際に打つたメール。自分の携帯には届いて、円堂へのメッセージは未送信で残されていて。その後に塔子へのメッセージが打たれたであろう事は、想像に難くない。

何故そうなつたのか。春奈は考えた。自分が何故塔子や円堂よりも最優先されたのか。

簡単だ。春奈が一番兄にとつて心配な存在だつたから。塔子や円堂の事も大事だけど、彼らの強さは鬼道もよく知つていたに違いないくて。

彼らなら。間際に想いが届かなくとも、未来を立つて歩けると考えたのではないか。けれど春奈は、自分がギリギリまで背中を押さなければならぬと思つたのではないか。

兄の性格なら、きっとそう。ギリギリの状態ならば、恋人よりも我が子を優先するのだ。春奈の存在は鬼道にとつて妹というより娘のようなものだつたと、知つてゐるから。

自分はまだ、兄にそういう意味で信頼されるほどの強さを得られていなかつた。実際自分は弱い人間だ。兄の死といつ現実から逃げて、甘い夢に浸ろうとしたくらゐに。

『春奈は優しい子だな。その優しさを、忘れないようにしなさい』

「私、優しい子なんかじゃない。でもお兄ちゃんはそう言つてくれた。私を認めてくれた。」

だからこそ。優しいだけじゃない。

兄にも両親にも天国で安心して貢えるくらい、強い子になりたい。その為に決めた。この道を選ぶことを。

「瞳子監督。… お願いがあります。いつん、監督だけじゃない… 雷門のみなさん、全員に」

一歩前に進み出て、春奈は告げる。  
自らの決意を。

「私を… 選手として、チームに迎えて欲しいんです」

誰にも話していなかつたこと。自分一人で決めた事だ。案の定、壁山や田金あたりなどは本気でビックリした様子である。公式戦でない以上、女子がチームに加わるのは問題がない。既に塔子もいる。だが春奈の、サッカーの腕を知る者はそう多くはない。監督ですら僅かに驚いた顔をしている。

「俺からもお願ひします、監督」

微妙な沈黙を破るよう。田堂が頭を下してくれた。

「音無の力は本物です。そして選手としてやる気を出してくれた… !俺、音無とも一緒にサッカーやりたいです… !」

「キヤプテン… !」

壁山の頭に乗っかっている木暮が、その後ろで小さくニッと笑うのが見えた。春奈は笑い返す。彼にも本当に感謝しなくてはなるま

い。

「私には、お兄ちゃんみたいなスゴイプレーはできないけど。お兄ちゃんが見た景色を、私も見たいんです」

春奈も頭を下げて頬み込む。

「戦わせて下さい、監督！私もみんなを、お兄ちゃんやみんなの愛するサッカーを護りたいんです！！」

その様子を、瞳子はじつと見て、やがて溜め息をついた。仕方ないわね、といつぱん。

「…好きにしなさい」

仲間達の間から歓声が上がる。春奈はもう一度、勢い良く頭を下げた。

「ありがとうございます、監督！」

これからまた迷う事があつても。一番大切な事だけは、迷いはない。

自分は戦う。知る為に、護る為に、救う為に。

落ち着け。動搖するな。デザームは自らに暗示をかける。それでも握りしめた手は震えて、どこかにこの怒りを叩きつけたくなる。鬼道有人が殺された。明らかな他殺。しかもこのタイミング。どう見ても口封じではないか。

「それはつまり…奴が言った事が正しかったという証明ではないか?」

『お前達は…本当に宇宙人なのか?』

『それでも戦うのか?たとえ…最終的に…自分達が人殺しの道具にさせられても…?その全てが、お前達の信じる人の意志ですらなくとも…か!?』

『かの人物が妙な研究を始めたのは…五年前からだろう?身元不明の妙な女が男に仕えだしたのも同じくらいの時期じゃないか?』

『下手な興味で…我らの領域に踏み込まない事だ。さもなくば命の保証はない。…あの残酷な魔女が、嬉々として貴様を喰らいに来るぞ』

『ガゼルにも忠告されたんだろうが。…やめとけ。正直二ノ宮の事は俺も嫌いだし疑ってるが…あの女の力は今はまだ必要だ』

『それに…奴は得体が知れない。下手に嗅ぎ回つてるのがバレてみろ、いくらお前でも…』

思考をフル回転させる。鬼道の言葉。ガゼルの言葉。バーンの言葉。記憶を辿り、それらを繋ぎ合わせ、答えを導く…デザームの得意分野だ。

自分は遠き星エイリアの戦士。皇帝陛下にお仕えする星の使徒。ずっとそう信じてたし、その事実を何もかも疑う事は出来ないが - - 少なくとも鬼道は、自分達が宇宙人であるかどうかから疑っていた。

それが真実であれそうでなかれ。そう考える根拠が多分あつたのだ。もしかしたら、自分達のDNAを調べた可能性もある。言われてみればおかしい点が無いわけじゃない。自分達は物心ついた時から当たり前のように日本語を話していた。地球の、小さな島国の言葉をだ。自分達が元々は人間で日本人だつたと仮定すれば、辻褄が合ってしまうのである。

- - 加えて、二ノ宮様の存在だ。

鬼道が言った“妙な女”。ガゼルとバーンの忠告にあつた“魔女”。どちらも二ノ宮蘭子の事であるのは間違いない。

鬼道は全ての黒幕が二ノ宮である事を疑っていた。ガゼルとバーンも、その二ノ宮が口封じに来る事を畏れていた。

彼女についてゲームが知っている事はさほど多くない。

ただ、自分も何度も彼女の手で生体実験を受けてるので、研究者としては優秀であろう事も、特に脳科学とスポーツ科学に秀でている事も分かつている。

彼女ならば、陛下を含めた - - エイリア学園メンバー全員の脳をいじくり、洗脳する事も可能なのではないか。

実際、ジエミニーストームのメンバーは皆、彼女の手で記憶を消されて捨てられたという話ではないか。記憶を消せるなら、書き換える事もできる気がする。

- - 考えれば考えるほど…二ノ宮様が怪しいと言わざるを得ない。

仮に - - 全てが彼女の思惑でないのだとしても。鬼道を惨死させ

たのが彼女であるならば - - 自分も黙つているわけにはいかない。彼らとは正々堂々戦いたかつた。熱く燃えるようなサッカーをして、真正面から打ち勝ちたかつた。鬼道に対しても例外ではない。それを - - あんな形で汚すだなんて。とても赦せる話ではない。そんな女のやり方に賛同できる筈もなく、大人しく従うわけにもいかない。。

- - 暴き出してやる… 真実を。

我が名はイプシロンのキャプテン、デザーム。それが誇り。それが存在証明。愛する陛下と部下達を護る為なら、命すらも懸けよう。今まで、そしてこれからも。そして身を挺して自分達に真実を知らせてくれようとした、鬼道の為にも。

## 【1・9・淀んだ空の、淀んだ大地に】

自分は負けない。負ける筈がない。

この日の為に、雷門の選手のデータは、プライベートな事に至るまで徹底的に叩き込んできた。その心理的弱点、プレイスタイルの癖、それに生まれる一瞬の死角と隙。

身体的にも精神的にも揺さぶつて、凌駕してやる。徹底的に追い詰めて、叩きのめしてやる。

求めるは甘美なる勝利。捧げるは完璧なる勝利。

「見でるよ… グラン」

フィールドの向こう。その場所に一人佇む赤髪の少年に、不動はニヤリと笑つてみせる。

「俺達は…俺は絶対勝つ。勝つてみせる。お前がご執心の雷門もここまでつてわけだ。…そこでじっくり見てろよ。俺の実力つてヤツをよお…！」

グラントは一瞬だけ、切なげに眼を細めて…またいつも無表情に戻った。相変わらず忌々しいポーカーフェイスめ、吐き気がする。だがいい気になつていられるのもそこまでだ。試合を見て、自分達の勝利の瞬間を間近で感じて焦ればいい。そして後悔すればいい

- 自分をチームに組み込まなかつた事を！

想像するだけで笑いが止まらない。不動は断続的に唇の端から嘲笑の声を漏らす。

-そうとも…本当は俺が、俺があの方のお役に立てる筈だつたんだ…

グラントよりもガゼルよりもバーンよりもテザームよりもレーゼよりも！あの方を誰より愛しているのは自分なのだ。あの方の為ならば何だつてしてきた。キツい実験も真つ先に名乗り出たし、訓練だつて怠らなかつた。なのに！

自分は計画から外された。セカンドランクのジョミニーストームにすら加えて貰え無かつた。何故。一体どうして。自分だつてエイリア学園の一員だというのに！！

実力的には劣る事など何も無い筈だ。努力だつて。あのお方が望んでくれさえするのなら今以上の努力を約束しよう、あの方さえ、あの方さえ、あの方さえ！

気が狂いそうだ。

あの方の為に働く同胞達の姿を見るたび。あの方に誰より寵愛されるグラントの姿に気付くたび！

グラント。忌々しいグラント。出来る事ならその生つ白い肌を切り裂いて、芸術的な赤に染め上げてやりたい。その不良品の心臓を抉りだして、生きたまま食らいつくしてやりたい。

憎い。憎い。殺してやりたい。苦しめてやりたい。その場所にいるべきは自分だ。あの方に愛されるべきは自分なのだ！なのに何故彼などが。当たり前のようにその席に座つているというのか。

…でも仮にグラントを殺しても、ガゼルがいる。バーンがいる。他にもあの方の愛を希うガキどもは大勢いる。キリがない。…だつたら。

認めてくれないのならば、認めさせてやる。

今まで自分は全てを、自分の実力で叶ってきた。自分の実力でねじ伏せてきた。それはこれからも変わらない。ノールールこそマイスタイル。自分は自分のやりたいようにやるだけだ。

愛してくれないのならば、愛をさせてやる。

不動は決意した。その後の行動は早い。

エイリア石の欠片をありつたけ持ち出し、その資料を読み漁つて性質を熟知し、自分の為のチームを作るべくその力を振るう事を思ついた。

影山は不動を“天性の魔術師”と言つた。それは概ね正しい。不動は力ある言葉を巧みに操り、戦いに用いる事ができる。その力は、エイリア石と非常に相性がいいのである。

さらに目を付けたのが、影山。不動は黒いサッカーボールを使い、北ヶ峰で影山の護送車が通りかかるのを待ち伏せた。そして雪崩を起こし、彼を脱走させ、取引を持ちかけたのである。

共に雷門を潰さないか - - と。影山がサッカーを憎んでいる事も、雷門に固執している事も、陛下に恩があるらしい事も知つてゐる。陛下がいすれ影山を利用するつもりでいた事も。

ならば自分が一足先にその仕事をこなしてやるうではないか。影山と共に、この真帝國学園の一員として雷門を倒す。徹底的に打ち負かす。

そうすればきっと - - あの方も自分の力を認めてくれる筈だ。

あの方は強い者が好きだから。不動が真に強い存在と分かればきっと考え方直してくれる。愛してくれる。あのグランなんかよりも。自分の独断で始めた計画だったが、どうやらあの方も認めてくれたようだ。影山脱走も自分の学園脱走も、あの方の“眼”ならばすぐ気付いたりうに。

潰すどころか、情報規制までして間接的に手助けをしてくれた。きっとあの方も期待してくれているのだ。不動は胸を踊らせた。期待を裏切つてなるものか。この計画は、絶対に成功させてみせる。試合に必ず、勝つ。どんな手を使ってでも。

不動

黙りこんでいたグランが、口を開く。腹立たしいほどよく通る声で。

「君は本当に…俺が父さんになられると思ってるの？」

そうだろうが、と言いかけて、不動はギリリと唇を噛み締めた。  
たとえ本当の事でも、グラントがあの方の寵愛を受けている事實を、  
自分の口で言いたくなかったのだ。

言えはき」と、耐えきれなくなる。さうと歯止めがきかなくなつて、グランを殺してしまつ——嫉妬のあまりに。

「…違つよ。父さんが本当に愛してるのは俺じやない。…父さんは遠い日に消えた幻を、俺の姿に重ねて見てるだけ」

俺は“グラン”なのに、と惡々しい男は咳く。

「それでも俺は構わない。父さんはあくまで幻の愛情を追ってるだけだとしても、俺がその身代わり人形としても。不動…君が…得られる筈だった本物の愛の代わりを、父さん求めているだけだとしても…」

しかしグランはそれを、軽く身を翻す事でかわしてしまった。

「俺の父さんはつ……の方だけだああつ！」

あんな。裏切られて惨めな末路を辿った男と女なんかじゃない。散々自分を振り回すだけ振り回して無様に醜く死んで、死ぬ間際まで自分を巻き込んだ奴らなんか親じやない。

どれだけ痛かつたと思つてゐる。あの時の傷が今でも苛々と疼いて仕方ないのだ。

そしてどれだけ嬉しかったと思つてゐる? あの方に必要とされた時。あのお方が迎えに来てくれた時!

「決めたぜグラン…」この試合に勝つたらお前を殺す! ハツ裂きにして、頭から足の先まで肉団子にして食つてやるよおおつ! ! ハーツハツハツハツ! !

ビシリ、とグランを指差し、宣言する。そうとも。あの方の愛さえ得られれば何も我慢する必要がなくなるのだ。

思つ存分殺してやる。何回だってぐちやぐちやに踏み潰してやる。さまあみる。

自分にはあの方さえいればいい。  
あの方には自分さえいればいい。

キャラバンは愛媛に向かう。

それぞれの決意と、絶望と、希望と、悲しみと、覚悟を載せて。それぞれの願う未来へを目指して。

一之瀬の隣では土門が寝息を立ててゐる。本当は疲れきつていた

ところを、ずっと無理していたのだろう。

そうさせた一端は自分にある。罪悪感がないと言えば嘘だ。しかしそれが必要不可欠であつたのも分かつている。

「豪炎寺…。

一之瀬は窓の外を見て、心の中で呟いた。

「あいつ今…どうしてるんだろうな。

鬼瓦刑事から聞いた話で、円堂には伝えていない事がいくつかる。正確には、伝える事が出来なかつたのだ…円堂の人柄は信頼しているが、彼はあまりに嘘が下手すぎる。

事件が事件だけに、鬼道の携帯は事件現場の遺留品として警察に回収された。ゆえにその中身を鬼瓦刑事も確認したわけだが…。

『鬼道君だが。豪炎寺君がキャラバンを降りた後も、定期的に連絡を取り合っていたみたいだな』

なんと、鬼道は豪炎寺の居所を知つていたし、メールのやり取りもしていたのである。

どうして自分達にそれを教えてくれなかつたのだろう。不思議が一之瀬に、鬼瓦は、他言無用だぞ、と前置きして話してくれた。

『…豪炎寺君の妹さんが誘拐され、エイリアの人質になつていて。我々警察が全力で捜査に乗り出しているが…妹さんを保護しなければ豪炎寺君は戦う事ができない。むしろ奴らの言いなりになるしかない』

だから自身とチームを護る為、行方をくらますしかなかつたのだ、

と。

なるほど。一ノ瀬もようやく合点がいった。豪炎寺と最後に戦つたジエミニーストーム戦が何故あんなに不調だったのか。監督に指示されたからといって何故あんなにあつさりキャラバンを降り、行方をくらましたのか。

多分、妹を拉致されて身動きのとれない状況を、仲間達に話すことをすり口止めされていたのだろう。

『メールの内容から察するに、鬼道君は自力でその豪炎寺君の状況を調べ上げて、連絡してきたみたいだな。まるで名探偵だよ』

結局、豪炎寺の居場所を聞くことは出来なかつたが（さすがにそれを今一ノ瀬が知るのはまずいだろう）、彼の無事がわかつただけでも収穫だ。

鬼道の死を、まだ豪炎寺には知らせていないと。自分から伝えておくよ、と鬼瓦が言ったので任せることにした。

我ながら無責任で酷いとは思つけれど。豪炎寺に自分から話すだけの気力が、今の一ノ瀬には無かつたのである。

――豪炎寺も…鬼道と同じようなタイプだからな。

きつと、人前ではそんな素振りは見せなくて。だけど一人になつた時、声を殺して涙を流すのだろう。

多分今まで彼はそうやって、全ての悲しみと苦しみを無理やり押し流してきたに違ひない。自分の為に。誰かの為に。

――それだけ俺達もあいつらに、寄りかかりすぎてたつて事なんだるつむ。

エイリアンと…異星からの侵略者と戦う。この世界を護る。そう

決意した時点で、この事態を予測し、せめて覚悟を決めておくべきだったのかもしれない。

そもそも連中が次々日本中の中学校破壊を始めた段階で、今まで死人が出なかつたのは奇跡的なのだ。

まったく何が“我々は野蛮な行為は望まない”だ。充分野蛮な真似を繰り返しているではないか。と、そんな文句を今のレーゼにぶつけたところで、彼にも答えようの無い事だろうが。

去る仲間。消える仲間。終わりの見えぬ悪夢。自分達に覚悟が足りていなかつた事は、否定しようがない。

もうこれ以上悲劇は繰り返さないと決めた。だが、いくらそう願つて努力しても、不確定な未来はまた自分達を裏切るかもしない。同じ事がまた起きてしまつかもしれない。

「それでも俺は…俺達は立つていなくちゃいけないんだ。

もう散々涙は流した。吹っ切れたとは言えないが、後はもう無理やりにでも進む他ない。

窓の外を流れていく車の並。やや雲の多い淀んだ空を見上げて、一之瀬はひそかに誓いを立てる。

また倒れる事があつても、何度も立ち上がる。

諦めない事こそ、自分達の最大の必殺技なのだから。

薄ぼんやりとした記憶の海に、埋没した欠片。微かながら、忌々しいほど鮮明に残っている景色。

けして思い出したい事ではない筈だ。しかし影山は今、それをえて思い出そうとした。ズキリ、と脳の片隅に鋭い痛みが走ったが、無理矢理にでもそれを無視しようとした。

『「めんなさい」「めんなさい」「めんなさい』

こつも、振り上げられる手が合図だった。それは素手であつたり、ビール瓶やらお盆やらが握られていたりと様々であつたが。

『「めんなさい」「めんなさい」「めんなさい』

謝る声。泣き叫ぶ声。許しを請う声。

それでも抵抗しなかつた。する事が出来なかつたと言つてもいい。逆らえば、痛みを伴う時間を長引かせるだけ。今よりもっと酷い目に遭うだけ。

だからじつと身体を丸めて、あらゆる苦痛に耐える。じつと我慢すればいい。そうすればいつかはこの時間も終わる。どんなに辛くても、終わると知つている。

喚きながら叫び、暴力を振るつ男が明かりを消す。それが一つ田の合図。暗闇の中で伸びる手に悲鳴を上げて、耐えろ耐えろと血りにまた言い聞かせる。

「僕が悪い子だから、いけないの。『めんなさい』。『めんなさい』。『めんなさい』。

幼い影山零治は、光の中でも闇の中でもひたすら謝罪を繰り返す。大好きな父が、いつも優しかった父がこんな真似する筈がない。目の前にいるのはきっと、悪い魔法使いに取り憑かれてしまつているだけなのだ。そう思った。そう思おうとした。

本当に傷ついているのは自分ではない。誰より傷を負つて、苦しんでいるのは父なのだ。母が病院からほとんど戻つて来ない今、父には自分だけしかいない。息子の自分だけは、父の味方にならなければ。

自分が良い子にさえなればきっと、父が悪い魔法使いに取り憑かれる事もなくなる筈なのだ。

父も自分も大好きな、父がかつて上手だと讃めてくれたサッカー。サッカーがもつともつと上手くなればきっと父は自分を見てくれる。きっと自分を愛してくれる。

きっとまた、二人で一緒に、笑つてボールを追いかける事ができる。

『サッカーはね、魔法なんだよ。大好きな人と、仲良くなる魔法。一緒に幸せになる魔法なんだ』

練習がまともに出来なかつた雨の日。偶然出逢つた一人の女性に教えた、影山の“白き魔法”。

あの頃緩やかに朽ちつつあつた世界で、それでも自分は無邪気な魔法を信じていた。信じれば、願い続ければ、努力を怠らなければ。どんな夢も叶えられると信じていた。

『だから僕はサッカーが大好き!』

サッカーが、大好きだった。サッカーは自分と父を繋ぐ唯一の絆だから。サッカーをする父を見るのが、大好きだったから。だけど。今はもう、全ては過去形でしかない。

父は自殺し、母も後を追うようにして病死。結局、影山の願いは何一つ叶わなかつた。やがて遺つたのは、大好きなサッカーが自分の全てを奪つたという事実だけ。

信じていた物全てが自分を裏切つた。影山は絶望した。次には恨んだ。自分を裏切つた全てを憎んだ。

ひび割れていく白き魔法。

真逆の色に染まる光の魔法。

激情は行き場を無くして決壊し、溢れかえる。まるで血のよう。その真っ赤な海に溺れて、息ができなくなつてしまつその前に - - 手を打たなければ、溺死は免れない。

憎まなければ。怨まなければ。きっと自分は生きて来れなかつただろう。まるで消去法のように選んだ未来。愚かな事だ。惨めな事だ。それでも一体、それ以外にどうすれば良かつたというのか。

『すまない零治…すまない、すまない、すまない…つ…』

散々自分を痛めつけた後、決まって涙を流しながら息子を抱きしめた父。耳について離れない、惨めで哀れなその声。

暴力によつてしか他人を愛せない。父をそんな風に追い込んだのもサッカー。そしてメディア。観客。あらゆる世界。

自分はけして父のようにはならない。なりたくない。少年は冷え切つた眼で世界を見つめたまま大人になつた。

理不尽な目に遭いたくないなら、力を得ろ。強くあれ。弱者に価値はない、それがこの世界なのだ。父は弱者となつたから世界に弾かれた。母は弱者であつたから生きていく事が出来なかつた。

非情？無情？それが何だ。弱い事が罪なのだ。変えたいなら全ての試合に勝てばいい、それだけの事ではないか。

- - その為なら、何だつてする。どうにこの魂は汚れきつているのだ…今更畏れる事など何も無い。

まるでファンタジーのような表現だと我ながら思つが。

岐路に立つ影山の前に、ある時一人の魔女が現れて言つ。あたしの災禍の力を貴方にも分けてあげるわ、と。

その魔女が、愉しみだけを望む存在だと、薄々ながら気付いていたが。全てを変える力の欲しかつた影山は彼女の誘いに乗つた。そして彼女のくれた“黒き魔法”で、自分は力ある魂と迷いなき心を手に入れたのだ。

さらに彼女が一度目に現れた時には、今度は“あの方”を紹介してくれた。自分と同じ黒い焰をたきらせ、世界を憎悪する魔王たる人を。

エイリア皇帝陛下。

その目的が達せられた暁には、自分の望みもきっと叶えられる事だろう。だから影山は裏でかの人に協力し、時には逆に力を借りた。神のアクアもまた、その協力の為に用いられた、一つの試作品に他ならない。

——終わらせてやろうではないか。サッカーを愛する全ての者達の、御伽噺を。

真帝国学園。掲げられた旗の下で、影山は空を見上げる。青空は未だ見えない。否、仮に晴れたのだとしても、恐らく自分はもう一度と、その青を目に映す事は無いのだろう。

あの雨の日からずっと。ずっと自分の頭上からは降り止む気配がない。

本当の意味で失う時は、いつも雨なのだ。

『総帥！』

記憶の中で響き渡る、よく通る少年の声。

どれだけ傷を負つても、歪んだ情を浴びせられても倒れなかつた  
彼の、決別の一聲。

『これが貴方のやり方ですか！』

本当は、誰より鬼道に見て欲しかつた。今の自分を。本物の力と  
いつものを。彼の綻る甘い幻が、いつか確實に彼を裏切るという事  
を。

そして自分にとっての真の最高傑作が誰かとこいつを。  
だが鬼道は - - 死んでしまつた。エイリアに近付すぎたゆえに、  
危険分子と見なされて消されてしまつた。自分に力を与えた、あの  
魔女の手によつて。

元々真帝国学園そのものが影山と不動の独断専行なのだ。文句の  
言える立場でない事は承知している。それでも。

- - きっとお前は最期まで…いや、死して尚私を恨み続けるのだろ  
うな。

埠頭に近付いて来る、イナズマキャラバン。その姿を視界におさ  
め、影山は潜水艦を浮上させるべく立ち上がる。

- - 構わないぞ。…理解など…最初から求めとはいひないのだから。

期待すれば裏切られる。信じれば必ず壊つ。ならば最初からそつ  
しなければいい。

それが自らの保身行動と氣付きながら。影山は自らの弱さを振り  
切るよつに歩き続ける。

殻を捨てるにはあまつて、影山零治は闇の深さを知りすぎていた。

愛媛に着いたはいいが。真帝國学園を探し当てるのは骨が折れた。どうにか精神状態の落ち着いた咲山達の話によれば、愛媛で起きている事件について分かつている事は大きく分けて三つ。

一つ目は、自分達も既に知っている通り、サツカーレ少年少女達の相次ぐ失踪。二つ目はその少女達の半分が、埠頭にて姿を消している事。三つ目はその埠頭にて、海坊主を見たなどという目撃情報があるといふこと。

三つ目の信憑性はかなり怪しいが。その“海坊主”が、何かを見間違えた結果である可能性はある。どちらにせよ埠頭の方へは調べに行くべきだ。

問題は、街の人たる態度があまりに非協力的だつたという事だ。サツカーレに関わる者は神隠しに遭う・・などとまるで宗教のごとく信じてしまっている人もいるほどである。

おかげで問題の“埠頭”が何処なのか、探す事からまず困難だったのだ。皆が頭を抱え始めた頃になつてようやく、“海坊主”を見たという老人を探し当てる事ができた。問題のポイントが何処であるのかも。

### 「影山の奴」

元より氣長とは言い難い染岡は、苛々と地面を踏み鳴らす。

「呼び出したのはてめえの方だつが。歓迎の用意くらへしとけや！」

「ま、まあまあ

田金と秋に両側から宥められ、フンッと鼻を鳴らす。まったく、

もし自分達が真帝国の場所を見つけられなかつたらどうするつもりだつたのか。本末転倒ではないか。

それとも - - 鬼道がいたならそれも可能だと。そんな算段であつたのかもしけない。彼の卓越した頭脳ならば、少ない情報でも自分の居場所を軽く見つけ出してみせると踏んでいたのかもしけない。あくまでそれは、鬼道の死が影山の想定外だつたとしたら - - といつ前提ではあるが。

- - 俺は影山を赦さねえ。俺達を殺そとした事も、土門にスペイなんて真似させてた事も、鬼道達を苦しめ続けてきたことも。

そして、赦せないのはそれだけじゃない。

影山はエイリアと繋がりがあつた筈なのだ。なのに奴は鬼道に、真帝国に来いと誘つていた。その前に鬼道はエイリアの口封じと思しき理由で殺害されてしまつたのに。

- - の矛盾が何を示すのか、染岡には分からぬ。そもそも自分は頭脳労働には限りなく不向きなのだ。

ただ、一つ確かなことがある。それは。

- - もし…もし鬼道を殺したのが影山の意志なら。赦さないビリロ  
じゃ、済まねえぞ。

自分と鬼道はそう長い付き合いでない。とりたてて仲が良いわけでもないし、一番最初は敵だつた事もあつて第一印象も悪かつた。最期まで拭い去れない不信感があつた事も、否定はできない。

だけど。彼がいつも陰口向問わず、チームの為に奔走してくれていた事を知つている。体調が悪い時も、精神的にきつい時でも、自分達の前ではけして弱つた姿を見せなかつた。

立ち続け、皆の支えになる事こそ自分の役目と示すように。

実際、彼の作戦立案力のみならず、存在そのものに自分達は皆救

われてきた。本当はもっと“ありがとう”を伝えるべきだったのに。素直とは程遠い口下手な自分は、まともに感謝を口にする事もできなくて。

本当は、死ぬほど後悔しているのだ。言えなかつた一言が胸にくすぶつたまま、じくじくと現在進行形で傷を抉り続ける。

彼の全てを奪つたのは誰だ。

自分達の本当の敵は誰だ。

せめてそれを知りたくて - - そりでなくば手向ける事もできなくて - - 染岡は此処にいる。

- - 俺は円堂達みたく、前向きな理由で立つてゐわけじゃねえ。 . .  
だけど。

埠頭の倉庫街。その入り口にキャラバンを停止させ、イレブンは地面に降り立つ。

ナメやがつて。染岡は口の中で悪態をついた。冗談のつもりか、嫌がらせか。鬼道の、彼らの人生をブチ壊しておきながら。

倉庫街の入り口には、“帝国学園”と書かれた看板と、見覚えのないエンブレムが掲げられていた。

## 【1-11・キメラはまだ、羽根を持たず】

まるで喧嘩を売るように掲げられた“帝国学園”的看板。蹴り飛ばしたくなるのを理性で押しとどめて、円堂は入り口をくぐる。倉庫街を抜けると、暗い海に出た。愛媛の埠頭。そしてまるで自分達を待ち構えていたかのことく、海の中からそれは姿を現したのである。

地元民が“海坊主”と勘違いしたもののが正体。それは巨大な潜水艦であった。

潜水艦が浮上してきた衝撃で大量の水しぶきが上がり、うつかり逃げ遅れた円堂はすっかり塗れ鼠に。ただでさえ斜めつて走る機嫌がさらに悪くなつた事うけあいだ。

そうかこれも嫌がらせか！地味に腹が立つぞ影山！

しかもいかにも金をかけてそうな最新設備満載の船とは。一般庶民に喧嘩売つてるとしか思えない。

重たい音と共に開いていく入口。円堂は秋から受け取ったタオルで体を吹きながら、じつとその光景を見ていた。

階段が降りてくる。まるで円堂を招待するかのじとく、丁度真正面に。

「久しいな、諸君」

その低い声に。隣に立っていた照美が小さく肩を震わせたのが分かつた。怯えているのかもしれない。円堂は迷わずその手を握った。照美の目が驚いたように見開かれる。円堂は力強く頷いてみせた。大丈夫だよ、という意味をこめて。

もう誰も、傷つけさせはしない。  
もう誰も、独りにはしない。

「お前達が来るかどうかは一種の賭だつたんだがな」

階段の真上から。自分達を蔑むかのように見下ろしてくる影山。

「やはり来た、か。逃げ出さないその勇気だけは讚えよ。ただ無謀なだけかもしれないがな」

「逃げないさ、俺達は」

円堂は男の、サングラスに隠れた瞳をひとと見据えて、ハッキリと断言した。

「俺達は逃げない。逃げ出れない。田の前にある現実からも、眞実からも」

何かを変えたいならば。

救いたいならば。

立ち向かうしか方法は無いのだから。

「俺達は知る為に来た。知つて…悪夢は終わらせてやる」

ビシリ、と。一瞬、頭に亀裂が走つたかのような痛みがはぜる。フラッシュバックする景色。散らばる茶色の柔らかそうな髪と、ぽつかりと何も移さない赤い瞳。

床に咲き誇る紅蓮の花の鮮やかさと、血の通わない素肌の青白さ。恐怖と絶望に染め上げられたその記憶に、円堂は歯を食いしばつて耐える。辛すぎる記憶。しかし、この感情を忘れてはならない。この悲しみを、そして怒りを。

未来を見る事の叶わなくなつてしまつた彼の代わりに、今自分達にできる事をする為に。どんなに痛くとも円堂は血の脳髄に刻みつける。

鬼道が生きていた証として。その死を無駄にしない為の、意志を繋ぐ為の礎として。

「お前には……聞きたい事がたくさんあるんだ、影山」

あらゆる激情を押さえ込んで、円堂は言葉を紡ぐ。

「お前の……最終的な目標は何なんだ。サッカーへを憎んでるのは知つてるさ。だけど世宇子中は敗れ、プロジェクトZは潰えた筈。その先に、お前が望むものは何だ」

もし、彼の憎しみの対象が特定の団体や個人であったなら、その復讐という底の知れない闇にも、『ゴールらしきものが見えたかもしない』。

だが、彼の恨みの対象は、サッカーというスポーツそのもの。物理的にどうこうするにはあまりに幅が広すぎる。

それとも最終的に、この地上からサッカーそのものを消し去る事が目的だとでも言つのか？

「そういえば、お前達に直接話した事は無かつたかな。まあ、君も君でいろいろ知らされてはいるようだが」

暗い笑みを浮かべて、影山。

「サッカーを誰より憎む私が、サッカー界の頂点に立ち支配する事。その為に、常に勝利し続ける最高のチームを作り上げる事……具体的な説明をするならば、そんなところだ」

ちらり、と目線を、男は照美へと映す。照美はその眼を様々な感情で揺らしながらも、口を開いた。

「……気が付いて、ました。貴方がサッカーを憎んでいる事も……私達世

宇宙の中もプロジェクトＺも…全ては駒の一つでしかない事も

影山はサングラスごしに、かつての教え子たる天使を見る。照美は切なげに、声を震わせて…しかしハツキリと告げた。

「それでも…不思議な話ですね。サッカーを憎んでいる貴方が私達に教えた破壊の手段。なのに私は…サッカーが大好きなんです。サッカーも…貴方の事も。サッカーは貴方と私達を繋ぐ、唯一の絆だったから」

サッカーが、絆。その言葉に、何人かがピクリと反応した。吹雪に、聖也に、春奈。

円堂も思い出していた。まだ鬼道が雷門に転校して来る前に。彼の家に呼ばれて、話してもらつた過去。

両親が飛行機事故で亡くなつて、春奈と一人だけ生きてきたこと。

サッカーを始めたのは、顔もあまり覚えていない父の唯一の遺品がサッカーマガジンであったからである事。

そしてサッカーが…亡き実父と自分を繋ぐ、唯一の絆だと思つていたからだと。

照美もきつと、同じなのだ。

彼がどんな経緯で影山に従う事になつたかは分からぬ。でもきっと鬼道と同じように影山を信じてきて…鬼道以上に、影山という男を慕つていたのだろう。

もしかしたら本当の父のように思つていたのかもしれない。

「何度も言います。貴方に届くまで、何度も。たとえ敗北を知つても、神でいられなくなつても、いつかこの身体ごと朽ちても…この命がフィールドで散るなら本望です。サッカーが、大好きだから

影山に付き従つた事で、その下でサッカーをした事で。仲間達を失い、自らの命すら失おうとしている照美。

しかし彼は強い心で言つ。

それでもサッカーが好きだと。それでも今の自分を後悔しないと。影山を怨みはしない、と。

「だから私は…貴方と戦う。私はサッカーで、貴方を救つてみせる」

憎しみは罪ではない。

けれど女神は知つてているのだ。

世界を、誰かを救うのは憎しみではない。愛こそが幸せを齎す、唯一にして最大の魔法であることを。

「…思い上がるな、墜ちた女神が」

やがて影山は吐き捨てるように言つた。

「かつて何度も告げただろう。私がお前に求めるのは勝利の美しさのみ。敗北は醜いぞ。墜ちて汚れた醜惡な天使など、もはや何の用もない」

照美は何も言わない。本当は傷ついたのかもしれないが…きっとその言葉すら、予想の範疇にあつたのだろう。

ぐるり、と背を向ける影山の背を、待つて…と呼び止めたのは春奈だった。

「お兄ちゃんを…お兄ちゃんを殺したのは誰…？貴方はエイリアンと繋がってるんでしょ？なのごどりして…お兄ちゃんは殺されたの？貴方が指示したの？…？」

それは多分、この場にいる全員が、最も聞きたい内容だろ？。周囲の温度がすっと冷える感覚。円堂は緊張して、春奈と影山を交互に見た。

「鬼道の妹…音無春奈か」

影山は、春奈がユニフォームを着ているのに気付き、小さく笑みをこぼした。それは失笑か嘲笑か苦笑か…それとも別の意味合いでか。

「それ以上の事を知りたぐば…試合で私のチームを倒す事だ。来るのがいい。お前達を潰したくてウズウズしている奴らがお待ちかねだ」

そのまま潜水艦の中へと消えていく。

知りたければ力づくで奪い取れ、という事か。望むところだ。どちらにせよ試合はするつもりでいる。そして負けるつもりもない。「行こう…みんな…！」

「おう…！」

円堂のかけ声と共に。一同は一斉に、潜水艦の中へ続く階段を駆け上り始めた。

実験室にて。パタン、ヒーノ宮はカルテを閉じた。

「暫く吐き気と眩暈が残るわ。多少熱も出るかもしねないし」

意識を取り戻し、寝台から降りるデザーム。よろけながらも出口に向かう彼の背中に、ヒーノ宮は声をかける。

「今日は練習も休んで頂戴。無理は禁物よ? いいわね?」

デザームは青ざめた顔で一度だけヒーノ宮を振り返るも、返事をするのもきつじのだろう。そのまま何も言わずに、部屋を出て行く。

「お大事に…ふふつ」

ヒーノ宮ははどうに氣付いていた。漫遊寺での雷門との戦いから、デザームが自らの立ち位置や記憶に疑問を抱き始めている事を。

鬼道が死んでからますます疑いを強めたようで、資料室にも頻繁に出入りしている。いずれヒーノ宮の正体にも辿り着くかもしない。彼の明晰な頭腦にはマスター・ランクの三人ですら一目置いているのだから。

「…それはそれで面白いんだけど、ね。

さすがに今すぐ、自分が黒幕である事を確信されでは困るのだ。イプシロンにはもう少しばかり働いて貰わねばなるまい。しかしイプシロンの面々は、エイリア皇帝陛下よりもデザームへの忠誠心が強い。デザームが万が一離反するような事になれば、メンバーも迷わず着いていくだろう。

それはちょっと面倒だ。イプシロンにはまだ利用価値がある。使い物にならなくなるにはまだ早い。

「気付いてるのかしらね……あの子。仲間の事は鋭いのに、自分の事となると鈍いんだから。

ゆえに一ノ宮は、デザームへの生体実験を増やし、またそのレベルも今までよりハードにした。少しでも彼の思考時間と余裕を奪う為に。

麻酔で眠らされていた彼は、自らの身体に何が埋め込まれて、どのようにいじくり回されたかも知らないだろう。今日一寸に至つては全身の痛みやらけだるさやらで、実験内容を予測する余裕もなあだらうが。

「強かで、美しい子は好きよ。……貴方はどんなに記憶をいじられても、根っここの部分では何も変わらないのね。

思い出すのは、自分が吉良の元で働き始めた頃のこと。

デザームと呼ばれるようになる前から、年長者の彼は子供達の兄貴分で、リーダー各だった。現イプシロンのメンバーは勿論、ジョミーなどの子供達にも本当に慕われていた。

特に、ゼルとレーゼが懐いていて。デザームも彼らを実の弟のように可愛がっていたようだ。

だから。レーゼが生体実験の最初の犠牲者になつた時……彼は我が身を顧みず抗議しに来て。本来はグラン率いるガイアの一員になる筈だったのに、地位を降格され、レーゼ以上に過酷な実験に晒される事になつたのだ。

「勿体無いわね。あの馬鹿な正義感かえなければ、完璧なダイヤモンドになれたのに。」

そしてまた。そのくだらない正義感のせいで、知らなくてもいい秘密に触れ、その身を滅ぼそうとしている。本当に勿体無い事だ。

「まあ、こっちも精々楽しめて貰うわ。素敵な玩具が壊れるまで…ね」

そろそろ、いい頃合いだ。

二ノ宮はモニターを操作する。エイリアの子供達の身体には盗聴機に小型カメラに放射性マーカーに至るまで、様々な仕掛けが埋め込まれている。

レーゼも、エイリア学園出身の不動も例外ではない。

「上手に踊つてみせてね…可愛いボウヤ達」

もつすぐ真帝國学園と雷門の試合が始まる。試合が終わったら自ら挨拶に出向くのも悪くはない。

愚かな魔女の謙族に見せてやるつではないか。

自らが描く、最高のシナリオを。

## 【1・12・それは悪の、召使い達】

潜水艦の、暗く狭い通路を歩く。

皆それぞれに、思うところはあるのだろう。俯き加減な者。心配顔の者。険しい顔で前を見据える者。共通しているのは皆一様に無言である事くらいだ。

風丸の隣を歩くレー・ゼは、水色のパー・カーのフードを被つて、不安げに俯いている。風丸が手を握つてやると、少し驚いたようにこちらを見てきた。

「大丈夫だよ」

何が大丈夫なのか、は分からない。でもそう言つてやりたかった。レー・ゼに対しての恨み辛みが消えたわけではないが。先日の一件以来、なんとなくほつとけない存在になってしまったのも確かである。弟ができたらこんな感じなのかもしない。

自分より少しばかり背の低い彼を見下ろして、微笑んでみせる。

「大丈夫だから」

すると、ちょっとだけ安心したようにこくんと頷くレー・ゼ。

記憶が無いからこそ、今の姿が一番彼の本質に近いような気がしてならない。本当はとても臆病で、強がりで、しかし人知れず練習するような努力家だったのではないかと。

そんな彼が、謎の体調不良に見舞われ、妙な連中に狙われている。その上、自分達の仲間の一人は殺害された。不安がるもの当然だ。

自分が、何とかしてやらなければ。

そう思つていると、レー・ゼの反対の手を、富坂が握つた。

「大丈夫ですよ、リュウさん」

緑川リュウジ、という瞳子がつけたレーゼの仮名は、富坂にも伝えてある。

富坂は明るく笑つて、レーゼに言つた。

「大丈夫！ だつて雷門イレブンは無敵ですから！ ！」

ああ、そうか。なんだかレーゼがほつとけない訳。入部した頃の、富坂に似ているのだ。

あの時の富坂は、今よりずっと自信なさげで、おどおどした様子が目立つていた。アガリ症なんです、と恥ずかしげに言つていたのを覚えている。小学校の時の大会で、ハードルで転んで、大怪我をして復帰したばかりだつたせ이다。

それが今では、人前でドギマギもしなくなつたし、陸上でも自身を持つた走りができるようになった。それは他の誰でもなく、本人が努力して身につけた結果だろう。

「 そうだ。本当は分かつてゐるんだ。力は：努力して身につけるからこそ意味があるんだって。」

自分はきっと、実力的にも精神的にも、この中の誰より弱い存在だけだ。

そんな自分だからこそ、できる事があるなら試したい。

「 諦めない事が、俺達の最大の必殺技なんだ。」

唐突に田の前が開けた。暗闇に慣れた眼には眩しくて、思わず手を翳す。

緑色に輝くフィールドにサッカーゴール。あまりにも見慣れた風

景だ。予想の範疇ではあったが、まさか本当に潜水艦の中にサッカー「ゴールを作つてあるだなんて。

影山は脱獄したばかりの筈。一体どこからそんな資金を引っ張つてきたのやら。エイリアが資金提供してくれたのだとしたら、無駄に太つ腹だ。

風丸と同じ事を栗松も思つたようで、お金かかつてゐるやんすねえ、とため息をつくのが聞こえた。

「待ちかねたぞ、雷門イレブン」

フィールドに反響する声。無人と思っていたので思わずドキリとする。

声は上斜め前方、柱の上からだつた。一本の柱の上にそれぞれ人影が見える。二つの人影はそのまま体操選手のように飛び降りて、鮮やかに着地してみせた。

「あんた達」

塔子が驚きに声を上げる。

「どうこうこと…？影山に捕まつてたんじやなかつたの…？」

目の前に降り立つたのは、佐久間と源田の二人だつた。何やら、自分の知る彼らとは様子が違う。髪型やファッショングの差もそうだが、なんだか雰囲気が異質だ。

少なくとも、影山に捕らわれて言いなりになつてゐる人間には、見えない。

「随分遅い到着だつたな。まあ、あまり早く着くのもおかしな話か。喪に服す“フリ”くらいはしなければな」

「フリつて…」

まるで雷門が鬼道の事などどうでも良いと思つてゐるみたいではないか。

怒りは勿論あつたが、それ以上に風丸は戸惑つていた。自分達を、まるで射殺すかのような一人の眼。

まるで親の敵でも見るような、眼。

だがこちちはまるつきり心当たりがない。そもそも彼らと顔を合わせたのは、精々帝国学園と試合した一回くらい。吹雪、木暮、塔子、レーゼに至つては初対面ではなかろうか。

「何故恨まれるか分からぬ。……そんな顔だな、お前ら」

佐久間が隻眼で、ギラリとした目線を向けてくる。

「俺達は……ずっと鬼道を恨んでいた。」

「……！」

「奴のせいで帝国は滅茶苦茶だ。雷門に負け、世宇子に負け……挙げ句本人は俺達を捨てて雷門に転校！お前らにも奴にも分からぬだろ？……病院のベッドの上で俺達が……どれほど悔しい想いをしたかなど……！」

鬼のような形相の佐久間。本氣で悔しいのだろう。源田は一見物静かに見えるが、全身から怒りのオーラが噴き出している。

「何言つてんだよ……！負けも転校も事実かもしれないけど、鬼道はお前達の為にも、世宇子を倒そつて……」

「黙れ裏切り者っ！……」

二人がかりで怒鳴られ、びくり、と話しかけた土門の肩が揺れる。

「裏切り者……ああそうだ、お前も裏切り者だ。帝国にいたくせに、あつさり雷門に行きやがつて……お前にだけは文句を言われる筋合いはない」

源田の声は、驚くほど冷たい。

「…俺達も最初はそうやつて納得しようとしたさ。総帥は間違つてたんだから仕方ない。鬼道が転校したのも俺達の為の筈だから仕方ないってな…でも」

血の氣が失せるほど握りしめられた源田の拳が、わなわなと震えている。

「鬼道も総帥もいなくなつて…帝国サッカー部がどんな有り様になつたと思う？退院した後も地獄だつた。俺達もレギュラーのみんなも頑張つたさ…。やめようとする一年を引き止めて、やけになる二年を抑えて…頑張つて頑張つて…でもうまいくかなくて…！」

知らなかつた。

風丸は愕然として、源田の話に耳を傾ける。確かに…帝国という学校は、雷門とは別の意味でカリスマが物を言うチームだつた。

鬼道の牽引力は今更説明するまでもなく。影山も、やり方こそ正しくなかつたかもしれないが、有無を言わさぬ威圧感とカリスマがあつたのは確かである。

その一人が、世宇子との敗北を気に両方いなくなつて。その穴を埋める為に、副将たる彼らがどれほど血の滲む苦労を重ねたか…それは彼らにしか分かるまい。

無意識に目線は宮坂へと向いていた。かつて風丸に、陸上部に戻つてくれないかと必死で頼み込んできた彼。

青ざめる。ひよつとしたら。陸上部でも、同じ事が起きていたのではないか。自分は立場上は副部長で、実質陸上部のエースだつた。その自分がサッカー部へ助つ人に行つたきり戻つて来なくなつて。

部長の速水も、他の仲間達も笑つて応援してくれたけれど。本当は…言葉にできないような苦労がたくさんあつたのかもしれない。思えば久々にトラックを走つたあの日、何人か面子が減つていた気

がする。

それでもサッカー部で戦う風丸を心配せまいと、笑顔で背中を押してくれていたとしたら。

風丸の視線の意味に気付いた富坂が、一瞬だけ、苦いような笑みを浮かべた。それが全て物語っているように思えて、風丸は罪悪感で胸が詰まった。

「……でも……結局鬼道は戻つて来なかつた。世宇子は倒したのに、戻つて来なかつた」

佐久間の空虚な咳きが、フィールドに溶けていく。

「忙しいとか、事情があるんだとか……自分を納得させようとしても、無理で。やっぱり俺達は、あの人に捨てられたんじゃいかつて思い始めた。弱い駒は必要ない。勝利できない俺達に……もう用は無いんだって」

「そんな……鬼道はそんなつもりじゃ……」

「そうじゃないって言い切れるのかよ田堂！お前は鬼道じゃないだろうが！本当にって言つたら鬼道を此処に連れてきて、土下座して謝らせろよつ……」

激昂する佐久間。それは血を吐くような叫びだった。

「できないよなあつ……？鬼道有人は死んじまつたんだからつ……殺されたんだからつ……！」

空気が音を立てて凍りつく。

鬼道有人は死んだ。殺された。

改めて形になつたその言葉が風丸の、仲間達全員の胸に突き刺さる。

「あいつはもう一度と謝らない……帝国に帰つて来ない！氣付いたん

だよ…全部、全部、全部、お前らのせいだつて！お前らが鬼道をたぶらかさなければ、総帥と決別する事も俺達が負ける事も無かつた！俺達を捨てて雷門に行く事も無かつたんだ…つ…そしてきっと…あんな惨めな死に方することだつて…！」

びしり、と佐久間の指が真つ直ぐ円堂を指差す。

「鬼道はお前らに騙された！お前らが鬼道を死に追いやつたようなもんだ…！」

佐久間と源田の理論は、滅茶苦茶だつた。正しいのは鬼道が円堂に影響されたという一点のみ。そこから先は鬼道が自ら選んできた道で…その後の結果は偶発的に生まれたものではないか。

そもそも、鬼道は帝国メンバーを捨てたわけじゃない。世宇子を倒して尚雷門に残つたのは、エイリアが襲撃してきたせいに他ならない。世界の為には、雷門の一員として戦うしかないではないか。それに彼はこの戦いが終わつたら帝国に戻るつもりでいたのだ。それが出来なくなつたのは…一度と戻れなくなつてしまつたのは。佐久間と源田を案じて一人で彼らに逢いにいったせいで…。

そうだ。怒りをぶつけたいのはこちらの方だ。あの日、帝国に鬼道を呼び出したのはお前達ではないのか。確かに佐久間の携帯から呼び出したメールが、鬼道の携帯には残されていたというのに。むしろお前達のせいで鬼道は罠にかけられたのだと言いたい。いや、そもそも本当はお前達が彼を殺したのではないのか。風丸は口を開こうとして…誰か掌に遮られた。

聖也だつた。駄目だよ、と言つように首を振られる。風丸は悔しさに歯を食いしばつた。

「…敗北の屈辱は勝利の喜びに拭うしかない。あの敗北が俺達の全てを壊した。お前らが俺達の全てを滅茶苦茶にした。絶対な赦さない。お前らを潰す為なら俺達は…悪魔にだつて魂を売つてやる」

「その為なら、影山に従つてもいいつてのかよ……！」

二人のプレッシャーに気圧されながらも、叫ぶ土門。

「鬼道は言つてたぞ！影山は間違つてる。奴の決別してやつと……俺達のサッカーができるようになつた……その最初の一歩を踏み出せたつて……！」

「“俺達のサッカー”、だつて？」

視線で人を殺せそうな、阿修羅の形相で佐久間は土門を睨みつける。

「俺達のサッカーは負けたじゃないか！――」

佐久間が絶叫する。絞り出すような声で。

ダンッ！と重たい音がした。早く重いショートが放たれると気付いたのは、土門の身体が吹っ飛ばされたのを見てからだった。

「ど、土門！」

「思い知らせてやるよ、俺達の受けた痛みを」

倒れた土門と、駆け寄る一之瀬の前に歩み寄り。佐久間は冷えきつた眼差しで彼らを見下ろした。

「惨めに這い蹲るがいい。俺達には秘策があるんでな

## 【1-13・平和への、行列】

明らかに、佐久間も源田も様子がおかしい。確かに彼らは精神的に追い詰められていたのだろう。だが、物事を随分と悪い方に悪い方に考える傾向にあり、疑心暗鬼にも陥っている。やけに多弁で、攻撃的。

そんな症状を、聖也は過去にも見た事があった。それはとても悲しい場所で、何度も。

ある時は輝ける庭と呼ばれた町の研究室で。ある時は神々の戦場で。またある時は閉鎖的な小さな村だったり、遠い異国の戦場だったり。

- その病の名を、俺達は仮性ハートレス症候群と呼んでいた。

詳しい事は未だによく分かっていない。聖也は研究者ではないし、一番最初に病を発見して研究していた科学者と弟子達は揃って感染発祥、悲惨な末路を辿ってしまったから。

治療法も原因もハツキリしていない。偶発的に完治したケースもあるが、何が要因になつたかは分からずじまいであるという。

ただハツキリしている事は。発症すると強い疑心暗鬼と妄想に捕らわれ、性格が非常に攻撃的になり、場合によつては乖離性傷害を伴うこと。末期症状にまで至つてしまつと、あとは化け物になるか廃人になるか死亡するか。

様々な世界で確認されている、非常に恐ろしい病気。発症すると、脳内麻薬を多量分泌させる為か身体能力が飛躍的向上する事もあり、暴れる患者を抑えるのすらも骨の折れる作業となる。

- 激戦地の最前線で戦う軍人ならともかく。普通に生活している一般人が発症する事は極めて稀だ。…だが。

例外が、ある。

この病を - - 人為的に発症させる事のできる物質が、ある世界には存在するのである。

ジエノバの遺伝思念。力オス因子。電子ドラッグ。その形態や形は様々で一定ではない。

聖也是鬼道に、ある物質の解析を依頼した。一つはエイリア学園の子供達の遺伝子。もう一つは神のアクア。

前者によつて分かつたのは、エイリア学園の、少なくともジエニーストームの子供達は普通の地球人である事。そして、後者は。

- - 神のアクアに含まれていた、五年前に落下した隕石の成分。それには人の潜在能力を限界まで引き出す効果があるらしい…と俺は鬼道に伝えた。

だが、実はその表現は正確ではない。隕石には、あの恐ろしい病、仮性ハートレス症候群を強制発祥させる事のできる成分が眠つていたのである。

それが改良されて神のアクアとして、照美達に使われていた。彼ら世宇子中が幻覚症状を呈して集団自殺を図つたのも、仮性ハートレス症候群のせいならばけして不自然な話ではない

そして今。おそらく神のアクアをさらに改良したと思しき“何か”がエイリア学園の子供達に使われている。このまま行けば、彼らにはおぞましい末路しか待つていいというのに。

- - 断言はできない。だが…影山がエイリアと繋がつており、神のアクアを握つていた事を考えれば…佐久間や源田にも同じものが使われていてもおかしくはない。

彼らは恐らく、神のアクアのようなものの力で強い疑心暗鬼にな

り、影山に従うよう洗脳されてしまっている。鬼道へ多少不信感を抱いていたのは確かだろう。だからこそ、そんな心の隙を影山に突かれてしまったのではないか。

このまま彼らが捕らわれていたら。辿る結末は世宇子と同じかもしないし、もと悲惨なものになってしまつかもしれない。

「いや…。もと前を辿れば影山も仮性ハートレス症候群を発症している恐れがある。

どうすればいい。どうすれば彼らを助ける事が出来るのだ。

悩んだ聖也の脳裏に、懐かしい声が蘇つた。傷つきながらも未来を信じ続けていた、小さな“白き魔術師”的声が。

『サッカーはね、魔法なんだよ。大好きな人と、仲良くなる魔法。一緒に幸せになる魔法なんだ』

「…幸せになる魔法…か。

自分にも、使えるだろうか。あの時彼が使ってくれた魔法。いつも仲間達が無意識に使い続いている、最強最大の魔法が。人を幸せにできる白き魔法が。

「…いや。使えるかどうか、じゃない。使えるって信じなきゃ、駄目なんだ。

自分一人なら絶対無理だつたけど。

自分の周りには今、こんなに素晴らしい仲間達がいる。

信じよう。信じるのだ。信じる者にこそ幸福は訪れると…ある世界の“支配の魔術師”が言ったように。

奇跡を起こす。彼らを奈落から救い出せるものがあるとしたら、

それはサッカーでしか有利得ない。その為に出来る事は、信じて全力で戦う事だ。

「…瞳子監督」

ミーティングにて。聖也は自らの考えを、口にする。

「今回の作戦…俺に任せただけませんか」

誰もが驚いた顔で聖也を見る。聖也はメモ帳とペンを取り出し、手早く文字を書き込んだ。

我ながら字が綺麗な方でない事は自覚しているが、まあ、この大きさで書けば読めないという事は無いだろ？

「これが俺の希望です」

書いた紙を見せる。そこに記したのはフォーメーションとメンバ一。

FW	染岡	照美	吹雪	
MF	風丸	春奈	一之瀬	宮坂
DF	聖也	士門	塔子	
GK	田堂			

「ちょ…随分また変則的な…」

一之瀬が明らかに戸惑った声を上げる。

「染岡、アフロディ、吹雪のスリートップはまだいいとして…。風丸がMFで、入れ違いに聖也がDFって…。それも、試合経験のない音無と宮坂を揃つて中盤起用だつて？」

「そうだ」

「いくらなんでも無茶だ！ただでさえ慣れないフォーメーションだぞ。それも壁山と栗松を外したら、防御力が一気に下がるじゃないか」

「まあ、言いたい事は分かるが。黙つて聞いてくれよ」とんとん、と紙を叩いて聖也は説明する。

「今回の試合な。どうにも嫌な予感がすんだよ。佐久間の言つてた秘策つてヤツも気にかかる。ただでさえあいつのドリブルテクは厄介なんだ。なるべく奴にボールは回したくない。…そこでだ」

今回のスタメンを、足が速くて体力のあるメンツで固めたのである。視野の広く状況判断に長ける一之瀬と春奈を中央に置き、サイドを俊足の風丸と宮坂に任せた。

仮にボールを奪われても、ボールカット率の高い彼らならば、即座に対応し攻めに転じる事ができるだろう。そして彼らの足ならば佐久間相手でも十分振り切れる筈だ。

「んでもって。俺のノーコンは周知の事実。申し訳ないがまだ克服できてねえ。だつたら客観的に見てディフェンスに集中させて、彗星シューートは前線にボールを上げる為だけに使つた方が得策だろ」

スリートップにしたのは、攻めの人数を増やして、どこにすつ飛び怪しい自分のロングシューートを拾つて貰う為。そして早めに得点して勝負を決める為だ。

フォーメーション名はワイルドパーク。野生中の得意な3・4・3の陣形。

これにも当然意味がある。スピードのある面々でのフラット3。オフサイドトラップに引っ掛け、敵の中央突破を足止めするのが狙いだ。壁山には悪いが、今回ばかりは足の遅い彼は作戦に向いて

いないのである。

それらを説明すると、イレブンも瞳子もびつにか納得したようだつた。それでも、にわかじこみのフォーメーションでびくまで戦えるか、不安は隠しきれぬ様子である。

「…」Jの作戦は、ただ勝つ為のものでもねえんだよ

聖也は最後に、このメンバーを選んだ一番の理由を示した。

「一番の狙いは…佐久間と源田と、影山の眼を覚まさせる事だ。俺はそれを…照美と、春奈と、塔子。お前らに一番に任せたい。いや…お前らにしか、出来ないと思つてゐる」

名指しされた三人は驚いたようだが、次には真剣な顔で頷いた。何故自分達なのか。彼らが一番よく分かっている筈だ。

彼らは誰より知り、理解している。影山のこと、あるいは鬼道のこと。一人は影山を救う事を願い、あの一人は鬼道の最期の願いを叶える事を望んでいる。誰よりも、誰よりも強く。

「私、やります」

春奈が強い口調で言つた。

「私には、お兄ちゃんのような作戦をたてる事も、お兄ちゃんのようないつもテクニックもありません。でも…戦う為に、今此処にいるんです」

まだ、迷いはあるだろう。兄の死から立ち直るには時間がかかるだろう。

それでも彼女は精一杯前を向こうとして此処にいる。その脚で立

つて いる。

「幸せになる方法は分からなくとも。」これ以上…自分や誰かを不幸にしない方法なら、私にもできるかもしない。お兄ちゃんなら間違いない…真っ先佐久間さん達を救いに行つた筈ですから」

その強さが。どんな深い闇さえも照らし出す、一筋の光となる。

「僕も頑張ります！」

宮坂も、ぐつと拳を握つて決意表明。

「これでも…風丸さんの役に立てるよつに、個人技なら結構練習してきたんです！それに元々僕、長距離ランナーですから。簡単にへばつたりしませんよ！！」

「頼もしいじやねえか宮坂。頼むぞ」

「はい！！」

実際見てみなければ断言できないが。多分彼のプレイスタイルは風丸とよく似たものだろう。多分攻撃より守備が向いてそうだ。ディフェンダーとして育てれば大きく化けるかもしれない。

自分も負けてられないな、と聖也は思う。サッカー歴は短いとはいえ、これでも最年長者だ。自分がチームの盾になつてやらなければ。

コントロール音痴克服と一緒に、聖也はひそかにディフェンス技も練習してきた。今回自分は守備に集中しよう。どんな技が来ても、ゴールを割らせてなるものか。

「…佐久間にボールを渡さないだけじゃなくて…徹底的にマークをつけた方がいいと思う」

やや険しい表情で考えこみ、土門が口を開く。彼は元々は帝国の

生徒。ひょっとしたら、佐久間の言う秘策にも心当たりがあるので  
るうか。

尋ねると、まあ、と苦い顔で頷く土門。

「……禁じ技つてのがさ、あつたんだ。影山が考えたシユートで。  
俺は使つた事も教わつた事もないから詳しく述べないけど……前、鬼  
道がその技を使つた佐久間に滅茶苦茶キレてたんだ。一度と使うな  
つて」

「そりやまた……何で？」

「なんか、身体にかかる負担が大きくて危ないらしい……としか。で  
も佐久間がその技を覚えてるのは間違いないんだ。もし本当に影山  
に洗脳されてるとしたら……影山に命じられて、使つちゃうかもしれ  
ない」

禁じ技。一同は顔を見合わせる。響きだけで既に嫌な感じだ。た  
だ土門の話だけでは圧倒的にデータ不足である。

「どっちにせよ、多分向こうのチームのエースストライカーは佐久  
間だろうし。あいつにマークを……そうだな、基本的に一枚つけよう  
か。一ノ瀬に吹雪、お前達が中心に頼む」

「了解」

二人は力強く頷いてくれる。

自分は鬼道のようなゲームメイク力はないけれど。彼の意志を繼  
ぐ者達が支えてくれる、その事実そのものが大きな武器となる。  
やつてやううじやないか。救つ為の戦いを、自分なりに精一杯。

「見ててくれよ……鬼道。」

天国でいるであろう彼に、恥じる事なき戦いを。稻妻の戦士達は、  
自らの平和へ向けて行列を成す。

始めよ。自分達の貴き聖戦を。

「「めんね… 木暮君」

木暮の手を引いて歩きながら、春奈は謝罪を口にした。  
「私のせいで試合… 出られなくなつちゃつて」

「…別に」

謝るなよ、と言いつつ木暮は不機嫌そうだ。彼も分かつているのである。ルー・キーとはいえ、強力なディフェンス技を誇る彼が何故今回スタメンから外されてしまったのか。

体力ならピカイチ。すばしっこさでも他メンバーではけして劣らない。本来なら今回の作戦も適任であった筈なのだ。

それができなくなつたのは、兄の死にショックを受けた春奈が、半ばハつ当たり気味に振るつた暴力のせい。おかげで木暮は左肩を痛めてしまった。これでは旋風陣が使えない。

幸い軽い捻挫であり、木暮の回復力から考えても、次かその次の試合には出れるだろうが。さすがに今回は無理がある。瞳子も聖也もそのへんはよく分かつていたのだろう。

もう一度ごめん、と咳き。春奈は木暮と共に目的地を目指す。目的… それは情報収集の為というべきか偵察と言うべきか。真帝国学園の選手について少しでも知つておきたいが為の行動であった。

潜水艦の薄暗い通路。その出口まで来た時である。

「何処行こうとしてんの、オマエ」

碧いフィールド。その光を背に、立っていた少年。モヒカン頭にフェイスペイント、ややつり上がつた紅い眼。背はさほど大きくなく、顔もどちらかといえれば童顔に分類されるだろう。

「今更逃げようつてのか？無理だぜ無理。なんたつて此処はもう海のど真ん中だからなあ？」

愉快そうに笑う少年の顔に、見覚えはない。しかし深緑色のゴーフォームは、佐久間と源田が着ていたのと同じものだった。

「…雷門中のマネージャー兼MF、音無春奈と申します。」しつちはDFの木暮君」

人に名を聞く時はまず自分から名乗るべし。一応常識だ。  
「私達は、逃げませんよ。もう逃げるのも飽き飽きしてたどりなんです。…もしかして、貴方が真帝国学園のキャプテンですか？」  
「まあね~」

肩を竦める。なんだろう。パツと見たかんじ、その変わった髪型とフェイスペイント以外は普通の子供となんら変わらないのに。少年の所作に、笑い方に、どこか歪なものを感じる。こんな違和感、影山相手にも感じた事はないというの。」

「俺、不動明王つてんの。ポジションはMFね」

不動、と名乗った少年はよろしく~と手をひらひらさせる。

「あんたさあ、あの鬼道の妹なんだって？涙涙の兄妹愛話ー・源田と佐久間から聞いてるぜ~ハハハ」

「…それが、何か？」

「何か、じゃねーだろ？ああ、あいつら言わなかつたんだ？俺には散々愚痴つてくれたのによ」

「…イ、と眼を細めて春奈の顔を覗き込むように見てくる不動。

「あいつら、お前の事もすんげー恨んでるぜ~そりやそうだよな。元はといや鬼道の奴は、お前の為だけに影山センセの虐待に耐えてきたし、恨まれる事もたくさんしてきたわけだし…。挙げ句雷門に

転校した理由の半分は、お前がいたからじゃね？って話だし…」

「どうして、それを…」

「知ってるかつて？知りたいか？知りたいかあ？だったら教えねー」  
ははは、と意地の悪い笑い声を上げる不動。わざと春奈の不快感を煽つて楽しんでいる。

異様な雰囲気に、木暮のしがみつく力が強くなつた。春奈はその木暮を、護るように側に引き寄せる。かつて兄が自分してくれていたように。

「…貴方の言う事、正しいと思ひます」

自分はずつと護られる側だつたけれど。いつも一番側で自分を護つてくれていた人は、もういないから。

「私のせいでお兄ちゃんはたくさん無茶をして…お兄ちゃんを想つてくれたたくさんの人を傷つけてしまつて。その果てがこんな結果。…本当に恨まれるべきなのも憎まれるべきなのも、私なんだつて分かつてます」

護られるだけのお姫様は、もう卒業。

これからは自分が護る番だ。木暮の事も、大好きな仲間達の事も。

「だから私は、逃げないと決めました。全ての憎しみを受け止めて、立ち向かつてみせると。そして…お兄ちゃんが護ろうとした人達を、今度は私が護る」

不動の、歪みを孕んだ眼に、真正面から向き合つ。怯えるなけれ。怯むなけれ。目を逸らすなけれ。耳を塞ぐなけれ。

立ちはだかる全てに立ち向かえ。

そうでなければ、幸福は手に入らない。

「佐久間と源田を救うつてのか？お前がかよ？」

はつと不動は鼻で笑つてみせる。

「今更何を言つたつてムダムダ。奴らは心から勝利を望んでいる。そして心からお前らの破滅を願つてはいる。鬼道を騙くらかして奪い去つたお前らをな……！」

「仮にそうだとしても」

淀んだ光。不動の眼の奥に、春奈は喜悦とは別の感情を見た気がした。

それは多分……嫉妬。

愛するものがある者への、愛してくれる人を持つ者への。そして、抱く信念のある者への。

「憎しみでは、人は幸せになれないんですよ。人を幸せにするのは、愛する事だけだから」

スツと少年の鼻先を指さす。

目を見開く不動に、春奈は堂々と宣言した。

「私達がそれを証明してみせる。そして……貴方さえも救つてみせます」

それは宣誓。

そして、宣戦布告。

「佐久間に源田だけじゃなく……この俺までも救つだつて……？思い上がつてんじやねえよ、忌々しい」

不快感も露わに、不動は言い放つ。

「いいぜ、やつてみるやお嬢ちゃんよおー」口からはハナから手加減なんざしてやるつもりサラサラないんだからなー！」

「望むところです、不動さん」

本気でぶつかり合わなければ意味がない。それは佐久間と源田だけじゃない。恐らく何かしら訳ありの事情で集められただらつ、不動達真帝国学園のメンバーにも言える事。

彼らの憎しみから逃げず、受け止める事ができたなら。自分も、自身の憎しみと悲しみを乗り越える事ができるかもしれない。H'Gでも結構。自己満足で結構。

「私達は、負けません」

春奈は自らに、誓いを立てる。

そして、試合が始まる。

ある者は再生を望み、ある者は終端を望み、ある者は愛を望み、ある者は奇跡を望む。そんな試合が。

ピッチに立つ真帝国学園。  
それに対する靈門中。

・・お前らだけは叩き潰さなきや気が済まない。

佐久間はギラつく目線で、最前線の三人・・特に照美を見る。

データでは知っていたが、いざ目の前にすると忌々しくて仕方ない。何故自分達を地獄に叩きのめした世宇子のキャプテンが雷門にいるのだ？

こいつもどいつせ、仲間を捨てたに決まっている。結局どいつもこいつも一番大事なのは我が身。欲しいのは勝利を得る力だけ。許せない。

なんなら負かすだけじゃなくて、自分達と同じように病院送りにしてやるつか。あの惨めさを味あわせてやればいい。爽快じゃないか。

ホイッスルが鳴る。

照美のキックオフ。ボールは染岡へ。

・・確かあいちはドリブル系の必殺技が無かつた筈…。

しかも、どちらかといえば自己顯示欲が強く、ストライカーとして自らの見せ場を作りたがる。パスもあまり出したがらない。また感情がにプレイに出やすく、怒りに任せてスタンドプレイに出る事すらある・・全て影山からのデータだ。

一人以上でチェックすれば潰せる可能性大。すぐ様、比得と日柄が囮みにかかる。

だが、まだ試合開始直後。さすがに冷静だったか。囮まれる前に、パスを出す染岡。その先には中盤から上がってきていた春奈がいる。

「させないわよ…」

そこに、走り込んで来たのが、真帝国学園のお姫様だ。勝ち気な女MF小鳥遊は、右足を思い切り振り上げ、突風を巻き起こす。

「アンタにだけは負けないんだから…・・サイクロン…・・」

小鳥遊の必殺技が炸裂。竜巻に巻き取られ、ボールが春奈から小鳥遊に渡る。

どうやら、小鳥遊は春奈に対抗心を抱いているらしい。そういうばあいは、この真帝国メンバーでも異質な存在だったな、と思いつ出す。もしかしたら個人的に、春奈達に対する因縁でもあるのかもしない。

そのまま持ち込む小鳥遊。まったく、女にしどくのが勿体無いくらいのボールコントロールだ。その隙に佐久間も、雷門のディフェンスエリアまで上がっていく。

「ぶつ飛ばせ、佐久間！！」

バスが来た。うまい。佐久間がフリーになるいいタイミングだ。この位置ならすぐショートに転じる事ができる。ところが。

「ピィイツ！」

「オフサイド！」

ちつ、と舌打ちする佐久間。しまった、雷門はこれも得意だった。いつの間にか、雷門、ディフェンスがセンター近くまで上がっている。

「オフサイドトラップか…！忌々しい…！」

「駄目だぜ、ちゃんと周りはよく見てなきや」

ニヤリ、と笑う塔子。安い挑発、乗る方が馬鹿だ。佐久間は落ち着け、と自らに暗示をかける。

そして冷静に状況分析。

奴らの今回のフォーメーションは、野生中の得意なワイルドパーク型と見て間違いない。このフォーメーションはフラット3が特徴。

怖いのはカウンター・アタックだ。

また今回、データとはポジションの違う人間や、初めて見る選手も混じっている。慎重に、しかし手早く決めて、流れを掴むのが得策か。

「…タイミングを図れ。あの技なら一発で流れを変える事ができる…！」

オフサイドにより、雷門、ボール。ボールは塔子から土門へ。そのまま上がろうとする土門に、向かつて行くのが不動。いい氣味だ、潰してやれ。佐久間は内心ほくそえむ。

土門飛鳥。そいつも忌々しい裏切り者だ。

「キラースライド！」

お株を奪われた形の土門が目を見開き、吹っ飛ばされる。そのまま呻いているのを見ると、そこそこダメージは受けたのかもしれない。

審判の笛は鳴らない。ボールを奪つた不動は目で佐久間に合図する。

そういう事か。倒れていようと選手は選手。土門をゴールラインギリギリに吹き飛ばしたせいで、雷門は得意のオフサイドトラップが使えない。

上がる佐久間に、パスされるボール。

「やべえっ！」

聖也がディフェンスに戻るよつと云つたが、間に合つ筈もない。

「…見せてやるよ。俺が得た力を…！」

ピコウッと口笛を吹いた。地面から列を成して現れる真っ赤なペンギン達。鬼道が操っていた青いペンギンとは違う、もっと強力にして恐るべき生物爆弾。

宙へ舞い上がるペンギン達を、何処か呆然と見守る雷門。ニヤニヤと喜悦の笑みを浮かべる不動。

振り上げた佐久間の脚に、ペンギン達の鋭い嘴が食りこついた。走る激痛に歯を食いしばり、叫ぶ。

「皇帝ペンギン……ッ」

『あの技は絶対に使うな！何があつても、絶対にだー！』

「一叩ッ！－！」

鬼道の、珍しく焦つた声を思い出す。あの一度だけだった、自分が彼に本気でひっぱたかれたのは。

『あの技は危険すぎる。サッカーができなくなるだけじゃ済まない』

…

「俺は使うよ、鬼道。あんたと同じ世界を見る為に。そして。

『命に関わるぞ、佐久間』

「あんたの仇をとる為に。」

## 【1・15・暴君の、飛べない鳥は】

雷門VS真帝国。凄まじい攻防。レーゼはマネージャー達の隣で、その全てを見ていた。

正直なところ。自分が此処にいていいのかも分からぬし、此処にいるべきかも分からぬ。

記憶の無いレーゼに、彼らは真実をはぐらかすがごとく、大切なことは何一つ語つてはくれない。あの瞳子、という女性もだ。

それはとても不安なことで。彼らに理由の分からぬ、疎ましさを孕んだような目線を向けられるたび、心臓の奥から突き上げられるような痛みが走った。

自分はきっと、彼らにとても酷いことをしたのだ。なのにそれを覚えていないから、疎んじられている。それに試合に出れない自分は、彼らにとってお荷物以外の何者でもあるまい。

だけど。

『大丈夫だよ』

握ってくれた手は、温かかった。元々記憶力は悪くないようで、キャラバンメンバーの名前は半日で全員覚えた。特に風丸、という名前の彼のことは、強く印象に残っている。

多分メンバーの中でも、自分と因縁深い関係だったのだろう。最初はレーゼがキャラバンに乗ることを一番に反対していたようだ。話の内容は聞こえなかつたが、瞳子や他の仲間と口論していたのは知っている。

きっととてもとても恨まれている。それだけのことを、自分は彼らにしたに違いない。今でも全てを納得しきつたわけじゃないだろう。だけど。

それでも手を握ってくれた。大丈夫だと、不安がるレーゼを励ま

してくれた。微笑みかけてくれた。まるで、兄のようだ。

「すつと昔…同じよつに私の手を引いてくれた人が、いた気がする。

きつと自分は、愛されて育つたのだ。だからよく似た温もりを知つていて。『えられる感情の責さが、分かる気がするのだろう。

・・思い出したい。大切な人の顔を。名前を。

ぎゅっとお守り代わりのペンダントを握りしめる。

記憶を、取り戻したい。真実を知りたい。でなければ、自分は彼らにした“酷いこと”の償いもできやしない。何より、こうしてベンチでただ見ているだけの無力さに、どうして耐えることができるだろう。

『大丈夫ですよ、リュウさん』

太陽のように笑ってくれた宮坂。

『よろしくな。何かわからんねー事あつたら遠慮なく聞けよ』

自分にも分け隔てなく接してくれた聖也。

『本当の貴方を取り戻す手伝いを、させて欲しいの』

そして、慈しむように抱きしめて・・誓つてくれた瞳子。

此処は、自分の本当の居場所ではないのかもしない。記憶を取り戻したその時、帰るべき場所はまったく違つ何処かなのかもしない。

それでも、レーゼは思つ。

憎しみさえ抱きながらも、自分をキャラバンに置くことを許してくれた。一時的にはいえ居場所をくれた。まるで田舎しをされた子供のように足取りの覚束ない自分の手を引いて歩いてくれた。この恩を、どうにかして返したい。自分にできるひとを探したい。出来ることなら。彼らと一緒に、戦いたい。

——その為には、早く記憶を取り戻さなきや。

でも、どうやつて？

「皇帝ペンギン……ッ」

レーゼが悶々と考えこんでいる間にも、試合は進んでいく。佐久間、という長い水色髪のFWにボールが渡ったようだ。

さよっとする。彼の召喚した紅いペンギン達が、彼の脇ら脛に次々の食らいついたからだ。

嫌な予感がする。それは本能的直感。あの技は——ヤバい。

「——叩ッ——」

その脚が、ボールに向けて振り下ろされ。雷門ゴールへと向かっていく。凄まじいショートに加え、生物爆弾たる紅いペンギン達が追撃する。

が、肝心の円堂は完全に反応が出遅れてしまっていた。転倒した

土門に気を取られていたせいだ。このタイミングでは、タメの長い大技は間に合わない。

「くわつ…「ツドハンド…！」

円堂が繰り出す黄金の神の手。長い間、あらゆるショートを封殺してきた伝説にも等しい技だと聞いている。

しかし、時代は変わるもの。過去の栄光もまたいはずれは塗り替えられていく。それが世の理であり、必然だ。

ピシリ、と不吉な音がして。大いなる神の手に次々と亀裂が入つていいく。皇帝ペンギン一吼と「ツドハンド」。その威力の差は歴然だつた。

「ぐああつ！」

砕け散るゴッドハンド。吹き飛ばされる円堂。鋭く笛が鳴った。

1-0。真帝國の先取点。佐久間の必殺技は、鮮やかにゴールを決めてみせたのだ。

しかし。

「あ…あああつ！」

何かが、おかしい。ショートをまともにくらった円堂以上に、何故ショートを打った佐久間が苦しんでいるのだ？自らの両肩を抱くようにしてうずくまる佐久間の顔は、苦痛から脂汗を流している。

「やつぱつ…そうだ。思い出した

土門が足首を押さえながら、どうにか立ち上がる。立てるようだが、足を痛めたのかもしれない。顔色が悪い。

「皇帝ペンギン一号… 鬼道が言つてた、絶対使っちゃいけない禁断技の一つ…」

「禁断技、だと？」

「ああ」

ふらつと土門を支えながら、聖也が聞き返す。

「自らの力を120%引き出す故、威力は充分だが… 反動が半端じやないつて。元は影山が考案したシユートなんだけど… このままじや使い物にならないからな。鬼道が独自改良して、なんとか使える技にしようとしたんだ」

塔子が円堂に駆け寄つていくのが見える。彼も大分辛そうだ。足に力が入らないのか、太ももをパンパンと叩いている。

そして佐久間は、少しは激痛の波が引いてきたようだが、まだ膝をついて荒い息をしている。その威力と代償を推し量るには充分な光景。

「そうして出来上がったのが、皇帝ペンギン一号。威力は落ちるけど、三人で打つ事で試合で使えるようにしたんだ。それでも最初のキラーパス役は、一号ほどでなくとも身体にかなり負担がかかる…。帝国戦でも一回くらいしか打たなかつただろ？」

「らしいな。つつても俺あの試合病院送りになつてたから、詳しくは知らねーんだけどよ」

「あ、悪い。聖也はそうだけ」

「そうなんですか、と隣にいた夏末に尋ねるレーザ。夏末はフイールドを険しい表情で睨みつけたまま、頷く。

「ええ… 鬼道君はあの試合の途中、豪炎寺君と接触して足を痛めたわ。その後は一回打つのが限界だつたみたいね…」

理解した。つまり、改良された一号ですら、連発するのは厳しい

技だったのである。ならば改良前の一呂はどうだけ大きな負担がかかるか - - 。

「確かに… そうだ、確かにあの技を使えるのは二回が限界。もし二回目を打つたら…」

土門はそこまで話して、一端言葉を切る。顔色が悪いのは身体的ダメージのせいだけではあるまい。

「… サッカーが、できなくなる… だけじゃ済まないかも知れない。全身の筋肉にダメージを受けるんだ… 呼吸筋や内蔵だつてどうなるか…」

想像したくもない、とその顔が言つている。いや実際、想像しようにも出来ないのだろう。鬼道がその危険度を把握していたならば、仲間にその使用を許した筈はない。

重すぎる代償を背負う事は知つていて。しかし、実際に二回使つてしまつた人間を、少なくとも土門は見た事が無いに違ひない。

そうだ。そんな技 - - 自分だったら、絶対に仲間に使わせたりしない。

… どうしても使わなければならぬ場面になつたとしたら。その時は私が使う。仲間達には、使わせるものか。

レーゼは考える。自分がチームのキャプテンだったなら。自分が率いるチームであつたなら。

たとえ自らが身代わりになつてでも、仲間達には使わせたくない。そうだ、鬼道だって同じだつたのではないか。だから改良したといえ皇帝ペンギン二号の最も負担のかかる役目を、自ら負つて出たのではないか。

何故そんな思考を辿ったかは、レー・ゼ自身にもよく分かっていない。なんせ記憶は戻っていないのだから。

確かなのはレー・ゼが、どうしようもない怒りを感じているという事だった。あんな技を平然と教え子に使わせている影山に。キャプテンでありながら、仲間のそんな姿を見て笑つてさえいる不動に。

「どうして、私はこんな場所に座ってるんだ。彼らは戦ってるのに、どうして。

どうしようもない、仕方ないで片付けたくない。瞳子は自分に、『雷門と戦ったチームにいた』事しか教えてくれなかつたが。周りの話の流れから察するに、自分はきっと『エイリア』学園とかいう場所にいたのだ。つまり本来ならば敵だつた筈。

彼らに義理立てする必要は、無いのかもしない。でも。受けた恩を返さないなんて、そんなの自分自身が赦せない。

何より。自分は真実が、知りたい。真実を知る為に、戦いたい。このまま黙つて見ているなんて、耐えられない。

「佐久間にボールを渡すな。渡つても、シュートエリアまでドリブルさせなければ、皇帝ペンギン一号を打たれずに済む」

試合は着々と進む。聖也の意見に、皆が頷く。

なるほど、あの技は脅威だが、ロングレンジのシュートでない事が唯一救いだ。こっちが前線でボールをキープできれば、佐久間にボールが渡る事があつてもすぐシユートされる事はない。

それに今の一発だけで、佐久間はだいぶダメージを負つている。強引に突破するのは難しい筈だ。

再び雷門、ボール。照美はボールを風丸へと下げる。彼らがよく練習で使う、あの戦法で行くらしい。

「彗星シユートー！」

風丸が、ロングシユートを放つた。キラキラと光を放ちながら、青い弾道を描いてボールが真帝国のゴールへ向かう。その間に上がっていく染岡、吹雪、照美のスリートップ。彗星シユートが防がれても、じぼれ球やバスボールは彼らが拾うという寸法だ。

けれど。

「秘策があるのは、佐久間だけだと思つな……」

「ヤリ、と源田が笑う。両手を広げ、シユートに構える。まさか。

「ビーストファング！」

野獣が吼えた。

獣の顎に模した源田の両手が、噛みつくようにボールに食らいつく。彗星シユートはいとも簡単に、キャッチされてしまった。

「くつ…ぐううつー！」

源田はボールを抱きかかえたまま、前のめりに膝をつぐ。痛みに呻く声。こちらからは見えないが、その顔は苦痛に歪んでいる事だらう。

「まさか…アレも禁断技か…！？」

「…ああ。ビーストファングだ」

訪ねる一之瀬に、忌々しさをもはや隠しもしない土門。

「何でだよ…！禁断技の危険度はあいつらが一番よく知ってる筈だ

「…」  
「…」

場にそぐわない、明るい笑い声が聞こえた。不動だ。

「ハーハツハツハ！ 素晴らしい…！」

そのまま喜悦に歪んだ顔で、雷門イレブンを舐めるよつて見る。  
どこかネジの外れてしまつたような、そんな瞳。

「どうしてだつて？ 決まつてるだろ、勝ちたいからさ」

勝ちたいから、何でもやるといつのか。それは本当に正しいのか。  
それで彼らは満足なのか。

レーゼと同じように、雷門の仲間達も自問自答を繰り返している  
事だつ。それでもまた笛は鳴るのだ。史上最低の試合を、続行する為に。

## 【1-16・ハンドレス、ナイトメア】

勝ちたいから。その為なら禁断の技さえ、使う。たとえその身がどうなるかとも。

「勝利を、栄光を手にしたお前らには分からなさい」

佐久間は痛みに青ざめながらも、その綺麗な顔を喜悦に歪ませた。それは、不動が浮かべる狂った表情によく似通っていた。

「世界ってそういうもんだ。力こそ全て！敗者に言い分などない！弱ければ何の意味もないんだ。その志も誇りも踏みにじられて沈むだけ……あの時の俺達のようにな……！」

風丸は黙つてその演説を聞く。聞かなければならぬ。何故だかそんな気がしていたのだ。

「力が無ければ全て失う……。皮肉にも、お前らがそれを教えてくれたんだぜ？弱かつた俺達は全部失つた。勝利も、栄光も、誇りも……鬼道もつ……！」

ズキリ、と痛む胸の奥。彼らの気持ちが分かるなんて言つ資格、雷門にいる自分には無いのだろうけど。

でも、分かる気はするのだ。弱い自分への絶望。力への渴望。それは護りたいものがあるからこそ。勝ち取りたいものがあるからこそ。

願いが、あるからこそ。

「だから俺達は力を手に入れたんだ……強くなつて……鬼道と同じ世

界を見る事ができたなら！俺達の全てを奪つたお前達から、その全てを奪い返す事ができる筈なんだ…つー！」

頬が冷たい。ああ自分は、泣いてるんだ。風丸はそれを何処か遠くで見ていた。

彼らが本当に欲しかったのは、力ではないのだ。力とはただ、そこに至るまでの手段に過ぎない。

願ったのはただ。ただ。

きっと此処にいる誰もと同じ事。そしてもう一度と叶わないと分かつている、切なくて悲しい夢。

聞こえた気がした。佐久間の、源田の、本当の声が。

「…本当はただ。もう一度。

「君達の言つ…力つて何だい？」

今まで黙つて話を聞いていた照美が、口を開く。

「禁断の技か？そんなものが真の力だとでも？…違つね。もし心からそう信じているのだとしたら…」

彼らしからぬ強い口調で。彼はハツキリと断言した。まるで射抜くように。

「君達こそが弱者だ。かつて持つていた筈の強さすら捨てた君達に、真の勝利など永遠に訪れはしない…！」

カツと佐久間の眼が見開かれる。その眼が血走り、激情でその手がわなわなと震える。

「本当の強さは…負けない事じやない。何度負けても、立ち上がる

強さを言うんだ。負けた事のない奴なんか一人もいない。逃げ出した事のない人間だつていない」

「黙れよ…」

「雷門のみんなが、負けた事が一度も無いとでも？違う。彼らは君らの何倍も負けしてきた。帝国に負け、ジヨミニーストームに負け、その他にもたくさん負けたから学んで、今此処にいる」

「黙れ…」

「なのに君達と来たらどうだ？たつた一度や二度負けただけであつさり諦めやがつて…。理不尽な現実を、彼らが嘆かなかつたとでも？敗北に、仲間の死に、彼らが立ち止まらなかつたとでも言つてもりかい！？」

「黙れって言つてるだろつ…」

「簡単に諦める奴が、真の勝者になどなれるものか！…力ずくで奪い取れば、亡くした大切な物が戻つてくるとでも？ふざけるな…！そうやつて一生眼を背けていればいい、臆病者つ…！」

「黙れえええつ…！」

制止の声が上がつたが、佐久間の耳には届かなかつたようだ。ボールを照美の胸元目掛けて思い切り蹴りつける。

「あうつ…！」

「アフローディ…！」

華奢な身体が吹つ飛ばされる。審判の笛が鳴つた。ファール。当然だらう。それでもまだ怒りが治まらず、殴りかかろうとする彼を、さすがにマズいと思ってか源田と目座が一人がかりで止めている。

風丸が駆け寄ると、照美は咳き込みながらも身体を起こす。大丈夫だらうか。ただでさえ今の照美は万全な状態ではないというのに。

「お前こそ…力を手にする為なら何でもやる卑怯者じやないか…！神のアクラを使つていたくせに…！」

絶叫に近い声で叫ぶ佐久間。その佐久間に、照美は悲しげな眼差

しを向ける。

もしかしたら、重ねているのかもしれない。過去の自分の姿を、佐久間に。佐久間の言つた事も事実ではあるのだ。照美は確かにかつて、勝利を得る為に神のアクアというドラッグに頼つていた。

今の佐久間と同じ。力を得る為に。だけど。

「…そうだ。私は神のアクアを使い、サッカーを汚した。“だから”雷門に敗れたんだ。そして…偽りの力を欲した罰を受け、たくさんの物を失つた」

今の照美は知つている。

身体は丈夫でなくなつたかもしれない。あまりな大きな代償を支払つたかもしれない。

しかし。それでも間違いないことは。

「そして…敗北から這い上がつたのさ。今私は今の君達より、そしてあの頃の私よりずっと強い…！円堂君達の強さが、私に新たな力をくれたのだから…！」

彼は強くなつた。

本当の強さを、手に入れたのだ。

「だつたら見せてみろよアフロティ…俺達に勝つてなあ…！」

「勿論だよ…！」

立ち向かうその背に。

本物の天使の翼が、見えた気がした。

「行くぞ！」

雷門ボール。春奈のスローインで、ボールは風丸に。負けない。負けるものか。

風丸はキッと真帝国イレブンを見据える。自分は戦う。今この場所にある「」の選択が正しい事を証明する為に。円堂や照美の強さこそ本物であると示す為に。

「疾風、ダッシュ！」

必殺ドリブルで、笠和と郷院を抜き去る。

「考える。考えるんだ。

佐久間にボールを渡さないのはいい。しかし、問題は源田。よりによってGKの彼が禁断技を使って来る。多分あの技も、連発すれば命に関わるシロモノだろう。

ビーストファングを使わせたくない。皇帝ペンギン一号以上に未知の技なのだ。何発が限界かも分からぬ。次使えばもうアウトかもしれないのだ。

どうすればいい。どうすれば彼に技を使わせず点を入れる事が出来るのか。

そうこうしている間に、敵ティフェンスが迫つて来る。弥谷と目座に挟まれそうになり、やむなく一ノ瀬にバスを出す。

「させるかよオ！」

「なつ！」

しまつた。読まれていた。そのボールを、空中で不動に奪われてしまう。

「佐久間にだけいいカツコさせらんないんでな……見せてやるぜ……！」

そのままドリブルしていく不動。それが必殺技発動までの助走と気づいたのは、彼と小鳥遊と弥谷が縦一列に並んで走り出したから

だ。

ボールはまず弥谷へ。弥谷は走りながら、前を行く小鳥遊に向かって思い切りボールを蹴る。さらに小鳥遊がそのボールにさらに加速をつけて、前の不動へと・・。

「まずいつロングショートだ！ティフェンス！」

塔子が素早く、ショートの軌道上へ走りよる。

不動がニヤリと笑つた。止められるもんなら止めてみる、と言いたげに。

「これが究極のロングショートだ…！くらえ、トリプルブーストオオ！！」

弥谷、小遊鳥が加速させたボールに、さらに不動がパワーを込めて蹴りつける。その威力たるや、とてもロングレンジショートとは思えない。

まるで弾丸のように強烈な必殺ショートが、雷門ゴールに襲いかかる。

「させるかよ！ザ・タワー！！」

塔子の足元から、天高く聳える塔。その塔壁に激突するボール。ビシリ、と鱗が入つていく塔。

「ぐあっ…！…！」

ショートの勢いの方が勝つていた。崩れ落ちるタワー。悲鳴を上げて地面に墜落する塔子。

それでも多少の勢いは殺げた筈だが。円堂はキャッチしようとした

て、身体に力が入らなかつたらしい。ボールを取りこぼしてしまふ。弾かれたボールは雷門「ゴールへーーー。

「「ゴール！——真帝国学園、追加点！——」」これで試合は2-0。真帝国リードを広げました！——」

こつからいたのやら、角馬が興奮氣味に実況中継する。  
「「じめんみんなーーー！シユート、止められなかつたーーー！」」

「円堂……」

円堂の手が震えている。さっきの皇帝ペンギン一号をくらつた影響だ。まだダメージが抜けきっていないらしい。  
まずい。これ以上佐久間にあのシユートを打たれたら。佐久間だけではなく円堂も立つていられなくなるかもしけない。

「「うちのシユートチャンスを増やして、なるべく前線でボールをキープし続けるしかない」

一ノ瀬が険しい顔で言つ。

「問題は肝心のシユートの仕方。源田にビーストファングを使わせないでシユートするには、どうすれば……」

「俺に任せな」

「！」

自信満々で名乗りを上げたのは吹雪。いつものオフェンスのように、口調が荒々しくなり、表情が勝ち気なものに変わつてゐる。「奴が技を出す暇もねえくらい、凄いシユートをブチかましてやる。あのビーストファングとやらはマジン・ザ・ハンド並にタメが必要みたいだからな。ある程度スピードのあるボールには対応しきれない筈だぜ」

「あ……！」

その手があつたか。風丸が思い出したのは、初めてジョミニースト

ームと戦つた試合のことだ。

あの時。円堂のマジン・ザ・ハンドは今よりずっと発動に時間がかかっていた。そのせいで奴らのノーマルショートにも反応できずに、技を出す暇もなくパカパカと点を入れられてしまったのだ。あの時ジョミーがやつたのと同じ手を使えるなら。吹雪のスピードならそれも可能かもしれない。

「俺も協力するぜ！」

染岡が吹雪の肩を叩いて、力強く拳を握る。吹雪も笑顔で頷いている。本当に、いつの間にあんなに仲良しになつたのやら。染岡なんてついこの間まで、あんなに吹雪を邪険にしていたといつのこと。

「佐久間のマークは任せろ」

一ノ瀬が決意の表情で言つ。

「サッカーが出来ない辛さは、俺が一番よく分かつて。目の前でそんな最悪な光景は見たくない」

「一ノ瀬…」

かつて事故で生死の縁をわよつた一ノ瀬。彼にしか分からぬ事もあるのだろう。

もしこのまま佐久間と源田に技を使わせたら。いや、仮に自分達がこの試合を放棄したとしても。影山の支配下に置かれている以上、彼らの結末はきっと同じ。

いずれ技の代償で、重すぎる罰を受けるだろ。一度とサッカーのできない身体になるか、死ぬか。それは幼い頃一ノ瀬が受けた痛みと、同じ。

「佐久間と、あと不動にもボールを回さないよ」とじょり。ディフェンス、頼むぞ

「おうっ！もう一点も入れさせねえ！！」

聖也がぐつと拳を掲げる。

作戦は決まった。あとはタイミングを図るのみ。

笛が鳴る。今度は染岡がキックオフ。ボールは照美へ。

「見せてあげよう…生まれ変わった私達の力を…」

さつき佐久間から受けたダメージは回復していない筈だ。しかし向かって来る比得と佐久間に、照美は気丈にも言い放つ。

「そして教えてあげるよ…本当の強さとは、何の代価もなしに得られるものではないという事を！」

そうだ。彼は言っていた。雷門の強さ努力を代価に得た本当の強さだと。

信じたい。風丸は強く強く願う。

無力さを感じる事があつても。敗北に這い蹲る事が何度あらうと。ただの力、ではない。今の自分達が得たものこそ何より尊い“強さ”であるといふ事を。

## 【1・17・君の歌、僕の祈り】

佐久間と源田の事を、塔子はよく知らない。それでも彼らの事を、どれだけ鬼道が大切に想つていたかは知つている。

話の中で。帝国メンバーの中でも特に名前の出たのがその二人。彼らの事を鬼道は懐かしそうに、そしてどこか愛おしそうに話してくれたものだ。

『佐久間のテクニックは、俺も見習うべき点が多い。あいつはいつも縁の下の力持ちに甘んじてくれるが…玄人が見れば分かる。あいつは、田の田を見ずに終わるにはあまりに惜しい素材だ』

ちょっと真面目すぎて、ストレス貯めやすいのが難点だが。彼がいなければ帝国は成り立たなかつただろうと鬼道は語る。自分が気持ちで負けそうな時、背中を押してくれるのが彼なのだと。

『源田の身長とパワーは、大きな武器になる。高校に上がつても通用するだろう。正直、GK以外のポジションも充分にこなせるんじゃないかな。奴が後ろでゴールを譲ってくれるから、俺達は振り返らず走る事ができるんだ』

やや天然すぎるのと、聖也ほどでないが方向音痴なのが困りものだけれど。みんなの相談役にもなつてくれるし、下級生にも慕われている。

本来なら彼のような人間がキャプテンを務めるべきだったのではないか、とすら鬼道は言つていた。

『一人とも、帝国の副将と言つべき、なくてはならない存在だ。本当に努力家で、皆の嫌がる仕事も進んで買って出る。仲間思いで、

そなあいつらに何度も救われたか知らない』

語る鬼道は、本当に優しい眼をしていた。ゴーグルごしでも分かる、慈しむ眼。心から大切な者を想う者の眼であった。

『あいつらがいたから。帝国のみんながいたから。塔子とも春奈とも離れていても、頑張って来れたんだと思う』

そんな鬼道を見るのはちょっとだけ寂しいけれど、でも凄く嬉しい。

大好きな人が大好きな人達に、自分もいつか会つてみたい。彼らの事も、自分の知らない鬼道の事もたくさん知りたい。塔子はそう思つたのである。

『あいつらには感謝してる。同時に…申し訳ないとも。あいつらのこと、俺の分も頑張らなきやつて…本気で苦労してると思つんだ。勝手な事をした。恨まれていても、仕方ない』

そんな事ないよ、と言いたかった。しかしそれが彼にとつて慰めにならない事は、塔子にもよく分かっている。

鬼道は頻繁に、帝国の仲間達と連絡を取り合つていたようだ。フットボールフロンティア開催時には逢う事もできたが、エイリアが攻めて来てからは難しくなつてしまつてしている。

その代わりを埋めるように、彼らへの電話やメールの数が増えていった。本当は心配でたまらなかつたのだろう。雷門の仲間達にはそんな素振りを見せせずとも。

多分、知つていたのは塔子だけ。あるいは春奈も知つていたかもしないが。

鬼道は雷門の作戦指揮に携わる傍ら、帝国の事をずっと気にかけ続けていた。

「 - なあ佐久間に源田。あんた達は確かに、すり『じく』悩んでたのか  
もしけない。」

憎しみと悲しみと、怒りと恨みと。暗い感情に支配された彼らの  
眼を見て、塔子は泣きたい気持ちになる。

「 - だけぞ… 鬼道はそんなあんた達の事、ずっと気にかけてたし、  
気付いてた。悩んでたのが自分達だけだとでも思つたのかよ?」

雷門イレブンが鬼道に影響を与えたのは事実だろ?。その結果影  
山と決別するに至り、雷門へと転校した、それも確かな事かもしれない。

だけど。鬼道が帝国を、佐久間や源田を捨てたなんて - そんな  
事絶対ない。あるわけない。捨てた存在に對して、ただの同情だけ  
であんなに心配して気遣う筈ない。

何より。

「 - 鬼道、帰ろうとしてたんだよ?」

視界が滲む。まだ泣くには早すぎるというのに。心臓がバクバク  
と煩い。眼も、耳も、胸も、焼け焦げてしまいそうなほど熱い。

「 - あんた達の元に、帰ろうとしてた。帰りたがってたんだよ。帰  
るつもりだったんだよ。」

エイリアとの戦いが終わったら、帝国に帰るつもりでいたのだ。

それなのに。

帰れなくなってしまった。愛する仲間達の元へは、もう一度と。

「なのに何でっ…何でそれが肝心のあんた達に伝わってないんだよ  
オオオツ…！」

叫ぶ声。嘆く声。灰色の空の下、フィールドに虚しく響き渡る。照美が小さく、罵る声が聞こえた気がした。塔子を、でも佐久間や源田を、でもなく。この残酷な運命を、シナリオを強いた誰かを。彼がきっと一番よく知っているのだろう。この世界に、神などいないという事を。

ドリブルで突き進む照美に、迫つていく佐久間と比得のダブルFW。照美は立ち止まり、その右手を高く掲げ、指を鳴らした。

「ヘブンズタイム…！」

女神の指先が、時間すらも操る。塔子の眼には、彼が瞬間移動したようにしか見えなかつた。啞然とする佐久間と比得の二人を背に少年は妖艶に微笑む。

次の瞬間、巻き起こつた旋風が、一人を吹き飛ばしていた。染岡と吹雪が両サイドを駆け上がりしていく。照美は弥谷と日柄を充分に引きつけてから、吹雪にバスを出した。

タイミングは完璧に見えた。だがここでまたしても立ちふさがつたのが…彼女。

「ダメダメ！ハハハツ…！」

吹雪へのパスを見事にカットして、小鳥遊が高笑う。そのまま雷門陣営を、右サイドから突破しにかかる。

この展開はよろしくない。既にヘブンズタイムのダメージから復帰した佐久間が前線に走っている。パスを通されたらそのままシュートを決められてしまう。

「此處は通しませんよ……」

その時、立ちふさがったのは意外な人物。富坂がその愛らしい顔をキリリと引き締めて、上がって来る小鳥遊を睨みつける。

「音無さん、行くよー！」

「はいっ！…」

春奈と並んで、真っ直ぐ小鳥遊に向かっていい。ジャンプする富坂、その脚を受け止める春奈。そのまま春奈は、思いっきり富坂を空への放り投げる。

「これが僕達の必殺技…！」

富坂の脚にオーラが集まる。

「シューーテイシングスターーーー！」

その如の如く。流れ星のように、小鳥遊へと墜落していく。凄まじい蹴りの一撃に、なすすべなく吹っ飛ばされる小鳥遊。

「凄え！あいつら、あんな必殺技いつの間に…！」

田堂が田をキラキラさせて叫ぶ。本当に、いつの間にあんなコンビネーション技を練習したのか。一人とも試合参加は今回初めてだといつのこと。

ボールは富坂へ。彼がこりらを向く。眼があつて、その意図を悟る。

「……いいじゃん、やつてみよひじゃないか。

涙を拭つて、キツと前を向く。富坂からのバスを受け、塔子にボ

ールが渡る。

自分の魂を、心を、祈りを。このボールに込めて放つ。

「鬼道と…あたし達の想い！あんた達にも届け…っ！」

ぐるぐると光を纏い、回転する。七色のパワーを右足にこめて、塔子は祈りのロングショートを放つた。

「レインボーループ…！」

虹の橋を描いて、ボールは真っ直ぐ敵陣へと突っ込んでいく。

「はっ…やつぱりお前ら薄情者だな！！源田がどうなつても構わないってか…！」

嘲笑する不動。彼は気付いていないようだ。塔子が何の為にレインボーループを放ったかを。

教えてやる義理もない。どうせすぐ分かる事だ。

「染岡！吹雪…！…いけええつ…！」

ロングショートには、ゴールを決める為だけでなく、ボールを前線に運ぶという役割もあるのだ。奴らは忘れていたらしい。雷門お得意の戦法がどんなものであるのかを。

レインボーループはゴールではなく、左サイドを駆け上がついた染岡の元へ向かう。

嘶くワイバー。染岡がショートを打つと、青い光を纏つた竜が大きく羽ばたいた。

「ワイバーンクラッシュか…？」

源田が両手を突き出し、ビーストファングを出せりとして・・止まる。染岡のワイバーンクラッシュユですり、『ゴールには向かつて来ない。

ボールの向かう先にいたのは、吹雪。あれはショートではなく吹雪へのバスだつたと、彼らが気付いた時にはもう遅い。吹雪のスピードは、誰もが知るところなのだから。

吹き荒れる雪嵐。吹雪と染岡、二人が同時にニヤリと笑つた。

「くらえつ！俺達一人の必殺ショート…」

「ワイバーンブリザードッ…」

雪風を纏つた飛竜の一撃。その速さとパワーに、源田は反応できない。ビーストファングを出せないまま、その顔のすぐ横にショートが突き刺さつた。

「よつしゃああつーー！」

『ゴール…』これで1・2、あと一点で追いつける。『』で前半終了の笛。攻守が田まぐるしく変わる大接戦だ。

「おいー聞こえてんだろ、影山…！」

どうせあの男は、全ての会話も映像も、奥の部屋でモニターしている筈だ。塔子はビシリ、と見つけたカメラの一つに指を突き出す。

「こつまで猿山の大将やつてる気だ？降りて来い影山…！モニター『』じじやなくて…あんたのその眼で、あたし達全員の覚悟を見届けろ。それともそんな度胸も無いほど、臆病者なのか？」

間近で見る。その眼で焼き付け。自分達の想いを。自分達の魂を。

「あなたのサッカーへの恨みは、鬼道への執着は、その程度だつていつのかよ！？」

そんな筈ない。

だつて自分は知つてゐる。鬼道は。影山は。本当はせつと。

「言つに事欠いてこの私を…臆病者呼ばわりとは…いい度胸だ、財前塔子」

かつん、と革靴が地面を叩く音がした。それは断続的に響き、こちらに近付いてくる。

悪寒を感じて、塔子は身震いした。闇の出口からゆっくりと姿を現す男。影山に対し、塔子は真正面からそのサングラスの奥を睨みつける。

本当は、逢つたらそのまま一発、顔面にお見舞いしてやりたかった。殴るだけで気が済まなくなるのは明白なので、どうにか湧き上がる怒りを押さえ込むと必死になつたが。

いや、いざれにせよ自分は殴れなかつたかもしれない。

「…この距離だつてのに…なんて威圧感だ…」この野郎。

帝国学園サッカー部の元総帥。

世宇子中サッカー部の元総帥。

中学サッカー協会の副会長。

そして…サッカーへの憎悪を糧とする、『黒き魔術師』。

「…間近で見る、と言つたな。いいだろ?」

影山は、真帝国側のベンチの前に立ち、リヤリと笑う。

「この場所から見てやつら。雷門の滅びの瞬間をな」

「はつ…残念だけども、誰も滅びやしないよ」

畏れるな。怯むな。

そのフレッシャーを前に、呑まれそうになる口を必死して、塔子は胸を張る。

「あんたの破滅のサッカーは此処までだ。あたし達が終わらせてやる。そして教えてやるよ、あんたにも、佐久間達にも…!」

誰かを憎む事は罪ではない。己の悲運を嘆く事は悪ではない。そうやって逃げた事のない人間なんて、ただ一人としていない。しかし。

「憎しみは誰も幸せになんかしない。サッカーを憎むあんた達に、サッカーを愛するあたし達が負ける筈ないつてことをね…!」

綺麗事も、貫き通せば真実となる。

自分達が証明しよう。

白き魔法は、黒き魔法に勝る事を。



## 【1-18・ルナティック、パーティー】

「とりあえずこれで… 一点は返したわけだけど」

瞳子の表情は堅い。誰もが険しい顔でその話を聞いている。

「後半は恐らく、吹雪君も染岡君も徹底的にマークされるわ。一つの攻めのパターンしか無いんじや簡単に読まれて突破される」

そりゃそうだ。春奈はため息をついた。さつきの攻撃で、染岡と吹雪の連携技がうまく決まれば、源田に技を出させず得点できるのが分かった。だが、それは向こうも同じ。

あの攻撃は、吹雪と染岡が両方フリーになつて初めて使える技と言える。徹底的にマークされたら、技を仕えても発動スピードが落ちるだろう。

それではまったく意味がない。源田にビーストファーナグを使われてしまう。

「どうにかして探すしかない… 奴らから得点するもつ一つの方法を！」

「ああ」

円堂の言葉に皆が頷く。

こんな時、兄が生きていたら。雷門の頭脳とも言つべき鬼道有人がこの場にいたら。きっと何か、有効な手を考えてくれただろうに。

「…駄目だ。お兄ちゃんにもつ頼らないって… 強くなるって決めたじゃない！」

弱気になりそうになる思考を、首を振つて振り払う。自分がこんなんだから、いつも兄に心配かけて、死ぬ間際まで安心させてあげ

られなくて。

「…考える。考えるんだ、音無春奈。

此処にはもう、鬼道はいない。ならば妹の自分が彼の代わりに、作戦を考えるのだ。兄ならどうするか、じゃない。自分ならどうするか。

それが出来ないようでは自分に、ピッチに立つ資格など、ない。

「佐久間と不動にボールを渡さない。かつ源田に技を出せない。…なんだこの厄介な状況。まったくもー」

めんどくせーーーと頭を搔く土門。その彼はさつき、不動のキラースライドをまともにくらつていたが、脚は大丈夫だらうか。

とにかく、もうじきハーフタイムが終わってしまう。何も思ついてないがやるしかない。

あつちは、こちらが佐久間と源田の身体を氣遣つて満足に戦えないでいる事に、とつくに氣付いている筈だ。

もし自分が不動達ならどんな作戦を立てるだらう。どんな風に攻めて来るだらう。それを予測できれば隙はある筈。

「…多分…油断する筈。どうせショートコースが空いても、吹雪さん達以外なら打つて来ないだらう…って。

そしてこれは確実な事だが、こちらは佐久間と不動にマークを集中させる分、他選手の突破を許しやすくなるだらう。特にあの小鳥遊忍というMFが厄介だ。彼女の動きにはキレがあるし、ディフェンス能力も高い。

けれど不動と佐久間以外にマンマークをつける余裕は、ハツキリ言つて無い。ただでさえ吹雪を攻撃に割けば、佐久間のマークが甘

くなるのだ。

「ここはディフェンス陣営を信じるしかない。塔子達ならきっと敵の中央突破を防いでくれる筈だ。

「向こうは必ず、こちの守備の手薄になつた場所を突いて、かつ最後は佐久間さんのショートで決めたがる筈。…だつたら。

「行くぞみんな、後半だ！」

「おう！」

後半、開始。向こうのキックオフからスタートだ。攻め上がる比得を、照美が止めにかかる。

「ヒッヒッヒ…！」

ピエロのような比得の顔が、凶悪な笑みの形に歪む。まるでパスをするかのように、ボールを照美の胸元へ飛ばした。そして驚く照美に向けて、ボールの上から強烈なキックを見舞う。

「ジャッジスルー！！」

悲鳴を上げて弾き飛ばされる照美。

「ちょ…いいのかよあんな技！？」

風丸が抗議の声を上げるが、審判の笛は鳴らない。そのまま持ち込む比得。危機感を覚え、春奈と一ノ瀬は一人がかりで止めに行くが、易々と困まれてはくれない。一ノ瀬がフレームダンスの構えをとるより先に、ボールはフリーで上がつてきていた小鳥遊にパスされてしまう。

「行かせるかっ！！」

今度は土門が止めに行く。けれど土門が技を出すより先に、小鳥遊がモーションに入っていた。両手を広げて走り込む彼女の周りに、まがまがしい紫色の霧が噴き出す。

「ヤバいっ…逃げる、土門！」

塔子が叫ぶが、遅かった。必殺技、毒霧の術。猛毒の霧にまかれ、土門が激しく咳き込み、倒れる。そこを悠々と走り抜けていく小鳥遊。

しまった。既にシユートの射程圏 - - !

「吹っ飛びなつ！バツクトルネード！…」

小鳥遊はくるくる回転しながら、天高く跳躍する。木戸川清修の、宗方三兄弟が得意だったのと同じ必殺技だ。

豪炎寺のファイアトルネードとは逆回転。青白い炎を纏うシートが、一気に雷門、ゴールへと向かう。

「悪いが、もう一点もやらせねえぜ！…」

そこへ聖也が走り込んで来た。彼は勢いよく両の掌を地面に叩きつける。すると、彼の周りに紅い魔法陣のようなものが浮かび上がった。

何だ、あれは。今まで見た事もない、必殺技だ。

聖也はそのまま大きく跳躍する。そして掲げた両手を一気に振り下ろした。

「アポカリップス！…」

魔法陣から紅い光の柱が立ち上り、小鳥遊のバックトルネードの軌道を塞いだ。ショートは光の柱に阻まれる。

ショートブロック成功。聖也の力によつて弾き飛ばされたボールは、一ノ瀬の方へ。

ところが。

「ハハハッ！ 残念だつたなあ！？」

いつの間に、不動がピッタリと一ノ瀬をマークしていた。バスは不動にカットされてしまう。

「お前ら、ワンパターンだぜえ？ 流れを変えたい時、好手を切り替える時…高い確率で一ノ瀬にボールを集めろ。バレバレなんだよ！」

気付いていなかつた盲点。春奈は愕然とする。言われてみれば、確かに。雷門の誰もが、新しい戦法で行くと決めたタイミングで、一ノ瀬か - - 鬼道の名前を呼びがちだ。

鬼道がいなない今。攻守ともに主軸は一ノ瀬となつていて。パターンを読まれてしまうのも必然だ。

そして最悪な事には。先程の小鳥遊のショートと不動に気を取られたせいで - - 肝心の、佐久間のマークが一時的に甘くなつてしまつたのである。

「し、しまつた！」

不動のパスが、フリーで佐久間に渡つてしまつた。佐久間がニヤリ、と笑みを浮かべる。

「皇帝ペンギン…」

飛び立つ紅い色のペンギン達。それが再び佐久間の脹ら脛に鋭くかじりつぐ。

「一咄ッ！！」

強烈なショートが、雷門ゴールへの走つていぐ。

「危ないつ！！」

「円堂君、逃げてつ！！」

マネージャー達の悲鳴が上がる。当たりどころが悪ければ円堂も命に関わる・・そんな一撃。しかし円堂は怯む事なく、マジン・ザ・ハンドの体勢をとる。

しかし、果たしてマジンだけで止めきれるのか・・。

「行かせるかよつ！！」

「もう点はやらねえつ！！」

そこに・・なんと最前線にいた筈の吹雪と染岡が滑り込んできた。ギリギリのタイミングだったが、彼らは一人がかりでボールに向けて脚を突き出す。

「おおおおつ！！」

みしり、と嫌な音がした。吹雪と染岡の顔が苦痛に歪み・・次の瞬間、派手に吹き飛ばされていた。

一人がかりでも止められないなんて、なんて馬鹿げた威力なのか。やや勢いの弱まつたボールに、円堂がその手を力強く突き出す。

「マジン・ザ・ハンドオオ！！」

吼える魔神。巨大にして強大な魔神の腕が、がっしりとボールをキヤッチしていた。

三人がかりとなつてしまつたが、どうにか皇帝ペンギン一号を止められたようだ。しかしその代償は大きい。深刻な怪我には至らなかつたようだが、円堂も吹雪も染岡も息が上がつている。さらに、彼らよりもダメージが大きいのは - - 。

「つ、次はつ…決める…つ…！」

膝をつき、ゼエゼエと喘ぐ佐久間。呼吸音もおかしくなつてきている。もう限界が近いのは明白。一発ですら酷い負荷のかかるあの技を、もう一発も打つてしまつたのだ。

あと一発。あと一発打つてしまつたら彼は - - 。

「…どうすればいいの…? どうすれば…つ…！」

もう嫌だ。これ以上、誰かが死ぬのを見るのは、誰かが傷つくなるのはもう、たくさんだ！

疲労をおして、吹雪と染岡が前線に戻つていいく。時計は止まつていない。円堂のパス。ボールは塔子へと。

「もう誰も…死なせるもんかっ！」

スライディングに来た日柄を、ジャンプでかわす塔子。さらに不動と比得を十分に引きつけた上で、バス。うまい。

ボールを受け取つた風丸が攻め上がつていいく。このままシユートを決めるわけにはいかない - - 彼も分かつていて、考えている筈だ。考え方つくまで時間を稼ぐしかない事も。

しかしもつ、無駄に時間をかけている余裕が無いのも確かで。

「疾風ダッシュ…！」

DFの帶屋を、その身軽さでかわす風丸。

「スピードで…負けるものかっ！…」

彼が叫んだ、その言葉を聞いた時だつた。春奈は思わず、あつと叫んでいた。

スピード。疾風。かわす。

「…そうか…その手があつた！」

ショート可能エリアに入った。しかし風丸は、身体は身軽でも吹雪や染岡のような弾丸ショートは打てない。つまり、源田にビーストファングを使わせてしまつ。

それを見越してか、不動はピンチにも関わらず余裕の表情だ。どうせ打てやしないと夕力をくくり、わざと挑発してショートコースを空けさせる。とことんイヤミな奴だ。

いいだろう。その余裕、後悔させてやる「うじやないか。

「風丸先輩！一端ボールを外へ出して下さい！」

「えつ！？」

風丸が驚いてこちらを見る。春奈は続ける。

「時計を止めて欲しいんです！お願いします！…」

さらに頼みこむ。訳があるのを悟つたのだろう。風丸は戸惑いながらも、ボールをタツチラインの外へ出した。審判の笛が鳴る。チャンスだつたのに何故わざわざ真帝国ボールにしたのか。ヤケになつたか、と鼻で笑う不動と小鳥遊を、春奈は横目で見る。

まだ分かつてないらしい。自分達雷門が、世界一諦めの悪い集団だといふことが。そつやつて自分達は勝ち抜いてきたという事が。

「直つ通りにしたぞ、音無」

さあ訳を聞かせてもらおうか、といつ顔の風丸。他のメンバーも戸惑い顔で春奈を見ている。

「源田さんから、技を使わせず点をとるもつひとつ的方法…見つけました」

「何だつて…？」

「でも、シユートを決めるのは私ではありません。私に出来るのは、真帝国学園からボールを奪つて、前線に繋ぐ事だけです」「これは、自分では無理なのだ。

いや。誰か一人の力では、けして無理なこと。

「これは、全員の力なくしては成功しない作戦です。どうか私に、力を貸して下さい！」

自分は、鬼道有人にはなれない。

自分は、音無春奈にしかなれない。

だからこそ、自分は自分のやり方でチームを護る。

「お兄ちゃん、私、頑張るよ。

「分かった。信じるよ、音無」

「キヤブテン…」

円堂の言葉に、みんなが頷いてくれた。春奈はまた涙が滲みそうになつて、慌てて堪える。

泣き虫は、卒業だ。自分は音無春奈。雷門のMF。

「そして、鬼道有人の妹！」

その誇りを胸に、少女はフィールドで戦士になる。



## 【1-19・吹き荒れし、神風の讃】

目の前の佐久間が、あからさまに驚いた顔をした。

そりやそうだろうな、と宮坂は思つ。だが苦笑するだけの余裕は無かつた。なんせ今、自分と風丸は最もセンターに近い場所 - - 2トップの位置に立つてゐるのだから。

『フォーメーションを変えます。ワイルドパークから、デスゾーンへ』

春奈はメモに書きながら、自分達に説明した。デスゾーン。それは帝国学園が得意としていたフォーメーションだといつ。

『メンバーとポジションも大幅変更です。でないと対応できませんから』

彼女が提案したのは以下のメンバーとフォーメーション。

FW	風丸	宮坂
MF	吹雪	一ノ瀬
	緑川	染岡
DF	春奈	照美
	塔子	聖也

この陣型には誰もが度肝を抜かれた。

DFの風丸と宮坂をツートップに起用。攻撃が本領である筈の吹雪と染岡と照美をMFの位置まで下げる。さらに春奈はディフェンスの最後方へ。

いや、最大の問題はそれ以上に。

『緑川……つてお前、レーぜを試合に出す気かよ！？』

『はい』

『はいって……』

外された土門が、明らかに困惑した顔で春奈に問う。一番驚いているのはレーぜ本人のようだが。

そのレーぜの前に春奈は立ち、静かに言った。

『私、気付いてました。貴方がずっと…一人で練習してた事。悔しそうな顔でフィールドを見てた事。貴方なりに…真実を取り戻そうと頑張ってる事』

試合では、レーぜの顔を隠すパーカーは来ていいない。その代わりにと春奈が差し出したのは…-鬼道の身につけていた、予備の青いマントだった。

『レイさん。どうか私達に…力を貸して下さい。貴方の力が、必要なんですね』

兄の形見を、かつての敵に貸す。それがどれほどの覚悟であり決意であったか。きっとレーぜにもそれが伝わったのだろう。彼はほんの少しだけ俯いて…やがて顔を上げた。

『…私は…何も覚えてないけど。貴方達の敵だった。そうなのだろう？』

なのに、構わないのか、と。暗にそう問うレーぜに、円堂が笑いかけた。

何を遠慮する必要があるんだ、と言いたげに。

『約束しただろ！一緒にサッカーやろうって…！…今のお前は悪い奴

なんかじゃない。田を見れば分かる。昨日の敵は今日の味方だ！』

その言葉に。レーゼは切なげに眼を細めて、小さく、ありがとう、と言つた。

『私にも…ピッチに立つ資格があるといつのなら』

春奈が差し出したマントに、少年の白い腕が伸びた。

『私は…貴方達の力になりたい』

その眼は嘘を言つていない。心からの決意は、誰にも偽れない。誰かの力になる為に、決意した戦う意志。富坂には分かる気がした。自分もまた護りたいものがあつて此処に、いる。

春奈は作戦を続ける。

フォーメーションを変えた理由の一つは、土門の負つたダメージの大きさ見越しての事だった。守りの要である彼を代えるのは正直手痛いが、このまま無理をさせる方がもつと怖い。

そして土門を下げると、フラット3を機能させるのが難しくなつてくる。ワイルドパークのまま続けるのはリスクの方がデカい。またFW陣営の中でも、体調の思わしくない照美の疲労は大きい。よつてやや前線から遠ざけた。それにこの作戦では、ウイングに置いた方が彼のスピードを生かせる。

実はレーゼを起用したのも、彼の俊足が必要だからだと言つ。

『吹雪さん染岡さんは前半と同じく、向こうのマークの隙を突けそ  
うならまたワイヤーバーンブリザードを狙つて下さー』

でも向こうも、二人のマークは徹底するだろ？。もう一度チャン  
スが来るかは怪しい、と彼女は続ける。

『裏を返せば… その分風丸さんと富坂さんへの注意は緩慢になる筈です。お一人がFW向き選手でない事は不動さんもよくご存知でしょうから』

風丸も富坂も、FWにはあまり向いてない。一人とも必殺ショットが無いわけではないが、片や彗星ショートで片やクロスドライブ。ビーストファングを打ち破るにはあまりに心もとない。

しかし春奈はそれを分かった上で、今回彼らをツートップに起用したのだ。それは真帝国学園を油断させる為だけでは、無い。

『お一人の最大の武器はシュートではなく、雷門一のスピードですから』

それは、秘策。聞いた富坂も納得はした。理解もした。が…ただでさえ自分は初試合で、テクニックに不安があるのだ。できるだろうか、自分にも。

…いや、できるか、じゃない。やるんだ…！

自分だって雷門イレブンだ。

…雷門の誇りは、僕が護る…！

ホイッスル。郷院のスローイン。ボールは小鳥遊へ。そのまま彼女はドリブルで上がっていく。

春奈に闘争心を燃やしているというのには本当のようで、まるで挑発するかのように、彼女の真正面から突っ込んでいく。

「あたしからボールを奪つてみなさいな、お嬢ちゃん！！」

「勿論ですっ！…」

春奈と富坂の距離は遠い。此処からならざ、シューティングスターが来ないと踏んで油断しているのだろう。確かに、この位置からあの連携技はできない。

でも。

「スピニングカット！…」

残念無念。

春奈のディフェンスはそんな甘いものじやない。水色のオーラを纏つた彼女の脚が弧を描き、地面から青い焰が噴き出す。

「なつ…何つ！？」

驚愕の表情を貼り付けて、小鳥遊が焰の壁に足止められる。その隙に春奈は彼女から、見事にボールを奪つてみせた。

「レイさんっ！…」

そして春奈はレーぜにバスを出す。

鬼道の青いマントを着て、フードを被つたその表情は見えない。本当に戦えるのだろうか。たとえ本人にやる気はあつても、記憶は戻つていないのである。果たしてどれだけ感覚が戻つているか。

そこに佐久間が走つて来る。憤怒と憎悪に染まりきつた顔で。

「何処の誰だか知らないが…嫌味のつもりか！？鬼道さんとそつくりな格好しやがつて…つ…！潰してやる！…」

鬼の形相でタックルに来る佐久間。レーゼは一瞬ビクリと肩を震わせたが、しかしそこから、逃げる事は無かつた。

「私は、負けない……！」

宮坂も、雷門も目を見開く。レーゼが掲げた右手に集まる、紫の光。その光をまるで盾にするかのように、自分の前方へ突き出すレーゼ。

「ワープドライブ……！」

あれは、ジョンニー・ストームの。記憶は戻っていない筈なのに、必殺技を使えるだなんて。

いや。分かる気もする。心の記憶は消えても、身体に染み付いた記憶は消えないもの。彼らが日頃サッカーによる訓練を重ねていた戦士ならば……。

短いワープゾーンを作り、疾走する少年。驚愕に凍り付く佐久間を、ワープによって遙か後ろに抜き去っていく。

吹雪が染岡へのバス。予想通りそう見越して、素早く弥谷と笠和が吹雪と染岡をマークする。その為、風丸と宮坂は共にフリーになっていた。

いや、たとえマークされっていても、彼らのスピードには真帝国学園メンバーとはいえそう簡単にはついて来れまい。

「風丸！」

レーゼのパス。風丸は鮮やかに受け取った。そのまま宮坂と併走して真帝国ゴールへ切り込んでいく。

「馬鹿め！」

嘲り笑う不動の声。

「大した必殺シユートも持たないそいつらに、何ができるー…？血迷つたか雷門ー！」

馬鹿はそつちだ、と富坂は思う。まさか此処まで来てまだ気付かないなんて。

何のために自分達二人を春奈がツートップ起用したか。よく考えればその狙いなど一つしかないだろうに。

「疾風ダッシュ！！」

風丸がDF、郷院を軽やかにかわす。もうゴールは目前だ。源田が技を出そうと身構える。ところが - - いつまで立つても風丸がシートを打つ気配がない。

そして、ゴールエリアに一步踏み入って、源田を充分ひきつけたところだ。

「富坂！」

来た。源田が目を見開く。富坂はバスを受け取り、そのまま - - なんとゴールエリアでドリブル。源田が慌てて戻ろうとするが間に合つ筈もない。

富坂は源田を抜き去り - - ちょこん、と軽くボールを蹴った。文字通り「ロロロロ」とボールは「ゴール」へ。

「う…ゴール…！2 - 0 - -」

自称、雷門専属実況の角馬が叫ぶ。

「な、なんと！…富坂、シュートではなくドリブルで源田を抜き去つてゴールを決めたああ！…これは奇策だ！…」

そう。だから自分達一人がツートップ。雷門で最も脚が速いから。シュートを決めれば、源田も技を出せてしまう。しかしドリブルで抜き去られたら成す術がない。それが出来るのは自分と風丸の疾風ディフェンスコンビだけ。

「やつたな富坂！追いついたぞ！…」

「はいっ！風丸さんのおかげです！…」

二人でハイタッチ。風丸の嬉しそうな顔を見ていると、富坂も嬉しくて仕方ない。

風丸のおかげ。そして春奈のおかげだ。彼女が作戦を思いついてくれなかつたら、得点する事はできなかつただろう。

・・血は争えないって事かな。

鬼道の妹は伊達じやない。

富坂は思い出していた。風丸がサッカー部の助つ人に駆り出されて、初めて雷門が帝国と戦つた日の事を。富坂もまたあの試合の一部始終を見ていた。帝国を率いる鬼道の手腕には畏怖すら抱いたものだ。

春奈と田が合う。彼女がにっこり笑つてピースしてきたので、富坂も返した。ショーティングスターを練習した時にも思ったが。なんだか彼女とはいコンビになれる気がする。

「お前ら…いい気になつてんじゃねえぞ」

ぞくり。

富坂ははつとして振り返る。

「ちよつと遊んでやるうつかと思つてたけど……もつ我慢ならねえ。—— 体誰を怒らせたか、思い知らせてやる

鬼のような形相で、不動がこちらを睨みつけていた。低い低い、ドスの効いた声。富坂の背中に冷たいものが走る。

「知つてつか？ああ、陸上部から入つたばつかのお前は知らねえか。サッカーツて結構命懸けのスポーツなんだぜ？反則？あるにはあるよ、でも抜け道つてのも何処にでもあるんだなあ」

「——、と彼の口元がつり上がる。左目は見開き、右目は細められ——左右非対称な歪な笑み。その異様な雰囲気に、富坂は思わず後ろに後ずさつた。

そして富坂が一步下がると、逆に一步近付いてくる不動。

「分かる？俺ずーっと我慢してたの。いつもそう。相手を蹴つ飛ばす時さあ……もつちよつと力入れたら肋骨くらいイケんのになあつて……。いい音すんぜ、気持ちいいくらい」

ケタケタ、ケタケタ。

耳障りな笑い声と、脚を凍り付かせるような言葉。

何なんだ。何なんだこいつは。

明らかに正気じやない。気が狂つた、猛毒の言葉を吐く黒き魔術師がそこにいる。

「俺は負けるわけにはいかねえんだよ」

その言葉は闇の魔法。

死を抱く、魔術師のぐびき。

「フィールドで死にたいか、お前？」

笑い声が遠ざかる感覚。自分を呼ぶ風丸の声すらも遠くに聞こえた。

富坂は気付かされた。脚が竦んでいる。自分は今、間違いなく怯えた。

不動の悪しき魔法にかけられてしまったのだと。

「どうにかこれで、同点。流れはけして悪くない。だが染岡は、どこか胸騒ぎを覚えていた。それは後半の時間がもう残り少ないからなどではなくて。

「あの不動つて野郎…一体何なんだ。

彼が真帝国のキャプテンらしい、といつとは分かる。テクニックも実力も申し分ない事も。だが。

「イカれてやがる…」

他にどう表現すればいい？

染岡も、先程の不動の言葉は聞いていた。彼の表情までは見えなかつたが、それでも…彼の秘めた狂気を窺うには、充分だつた。挑発、なのだろう。そして警句、脅迫。サッカーをまだあまり知らない宮坂へ、精神的ダメージを与えるようと搔きぶつけてきたのだ。それ 자체は珍しい事じやない。相手を怒らせる、あるいはビビらせて動きを鈍らせるのは、スポーツの常套手段だろう。しかし。不動の言葉は…何かが違うのだ。

こんな時、自分のボキャブラリーの無さが恨めしい。この違和感を、戦慄を、どう表現すればいいのか分からない。

確かなのはその異様な空氣に、自分が恐怖を抱いたという、その事実だけ。

「…くそつ…ビビつてんじやねえぞ俺！」

パン！と両頬を叩いてカツを入れる染岡。

「…ビビッたら負けだ負け。流れはこっちにあるんだ、このまま逆転すりやいい！！

「染岡！」

ととと、と吹雪が駆けてくる。普段の穏やかな彼とは違う、好戦的な目つきの少年。

彼は二重人格なのではないか。染岡も薄々それに気付いていた。実は彼は、途方もなく重たいものを背負っているのではないか、と。

けれど。どんな吹雪でも、吹雪なのだ。最初はその二面性も、どちらの吹雪も嫌いだつた。今は…そんな彼のいい所も、たくさん見えるようになってきている。いいコンビになれるかも知れない、とすら。

『豪炎寺にならうとするなよ…お前は染岡竜吾だ…』

かつて。豪炎寺との実力差に悩んでいた染岡に、円堂が言つてくれた言葉を思い出す。自分は自分。豪炎寺の真似じやない。染岡には染岡のサッカーがある、と。

それなのに自分は最初吹雪に、豪炎寺のサッカーを求めてしまつていたのだから酷い話だ。

豪炎寺にあつて吹雪には無いものは確かにある。だけど同時に、吹雪には吹雪にしかない物がたくさんあるといつのに。

「あと一点で勝ち越しだ。へマすんじやねえぞ！」

どうやら、彼なりに励ましてくれているらしく。

攻撃的になつてゐる吹雪は、言葉が荒っぽい。だが、結構気がきて他人を気遣うとこりとか、子供っぽい走り方とかは、普段の彼と何も変わらない。

多分、本当は凄く纖細で優しい子供なんだらう、と思つ。FWバージョン吹雪はちょっと染岡にも似てるかもしない。不器用で、ついついつづけんどんな態度をとつてしまつ所とか、シンデレラをかい所とかが。

「はつ… テメー じやミスつたら承知しねえぞ」

そうだ。何も畏れる必要は無い。自分は独りで戦つてゐるわけではないのだから。

吹雪がいる。円堂がいる。みんながいる。鬼道もきつと、側にいてくれている。それが自分達の誇るべき、強さ。

ホイツスルが鳴る。試合再開。さつきの宮坂＆風丸コンビを警戒してか、真帝国は彼らにもマークをつける事にしたようだ。が、そうなれば当然、今度は染岡と吹雪のマークが甘くなるわけだ。

「もう一発決めよっぜ吹雪、ワイヤーブリザードだ…！」

「おつり…」

一人でフィールドを駆け上つていく。この調子なら行ける、染岡がそう思つた時だった。

「そおーはさせません！ヒヤッハハハア…！」

背筋を突き抜ける寒さ。真っ黒な威圧感を全身で感じ、一瞬頭が真っ白になる。

不動がいた。狂氣的に笑いながら、一いつひらく猛スピードで突つ込んで来る。

おかしい。こつはおかしい。おかしい、おかしい、おかしい、

おかしい。

怖い！！

「キラースライドオオ！！」

金縛りが溶けた時には、不動の顔が目の前にあつて。足首に重たい衝撃。気付いた瞬間はもう、染岡の景色は逆さまになっていた。必殺技をくらつた。派手に吹っ飛ばされた。それを理解したのは、芝生に叩きつけられた後。蹴り飛ばされた右足を中心に、熱気のような痛みが全身を駆け巡る。

喉の奥から掠れた悲鳴がほじほじつた。痛い！！

「そ、染岡っ！」

吹雪がぎょっとして立ち止まるのが見えた。その隙に、不動がボールを保持したまま吹雪にわざと向かっていくのも。よせ。やめる。そいつに手を出すな！

叫ぼうとした声は、痛みに呻くばかりで音になってくれず。

「ジャッジスルー2ーー！」

不動の凶悪な眼がギラリと光った。

吹雪の腹にボールを当て、その上から何度も何度も蹴りつける。彼の肋骨から嫌な音がした。そして最後は地面に叩きつけるようにして突き飛ばす。

「ぐああっーー！」

「吹雪ーーッー！」

明らかに敵選手を潰す為の技。質が悪いどころじゃない。自らの身体を押さえるようにしてつづくまる吹雪。小柄は身体がダメージから小刻みに震えている。

笛が鳴つた。不動にイエローカードが出たのだ。  
そりやそうだろう。むしろあれで何でレッドカードじゃないのか  
が疑問だ。明らか恣意的な攻撃だつたではないか。

「染岡つ！吹雪つ！」

風丸や一ノ瀬が慌てて駆け寄つて来る。

「俺は…大丈夫だ。それより、吹雪は…」

一ノ瀬に支えられ、どうにか立ち上がる。ズキズキと足は痛みを訴えているが、立てないほどじゃない。残り時間も僅か。気にしてなどいられない。

吹雪の事が心配で仕方ない。自分はガタイもあるし、丈夫さが取り柄のようなもの。だが吹雪は、あんな酷い技を、小さな身体でもろにくらつてしまつたのだ。

「だ…大丈夫だよ、染岡君…。大した事、ない」

いつの間にか、普段の大人しい吹雪に戻つている。お世辞にも顔色がいいとは言えない。ひょつとしたら、肋骨に鱗でも入つたんじゃないだろうか。

「畜生つ…不動の奴…！」

これ以上吹雪に負担をかけるわけにはいかない。他のメンバーも疲れてきている。自分がなんとかしなければ。

痛む脚に鞭打つて、染岡はフィールドに戻る。

「負ける訳に行かねーのは…こつちも同じなんだよ…！」

雷門も選手層が薄い。あれだけこいつびどくやられた吹雪と染岡をまだファイールドに残すだなんて。小鳥遊は呆れたように、雷門の選手達を見た。

- -まあ、どうでもいいけどね。アンタ達が潰れようと何しようと、あたしの知ったこっちゃないし。

小鳥遊忍。真帝国学園の紅一点。実は小鳥遊は、他の真帝国メンバーとは明らかに違う点が一つある。

それは小鳥遊が、自分の意志でこの場所にいるという事。  
愛媛で頻発している、サッカーをする少年少女達の誘拐事件。それは不動がスカウトした子供達をある力で洗脳し、エージェント達を使って次々と拉致した為に起きたものだった。

佐久間と源田も例外にあらず。彼らは影山の周りをかぎまわっていた為、邪魔者を始末するついでに引き込まれたといった方が正しいようだが。

- -あたしは、女だからって理由でずっとサッカーさせて貰えなかつた。

いや、理由はそれだけではない。

小鳥遊の兄は、愛媛で名の知れたサッカー選手で、U14の代表にも選ばれていた。それが、試合中の怪我が元で死亡。両親は以来、

妹にもサッカーを禁じたのである。

- - だけどあたしはサッカーがしたかった。だってサッカーは…兄貴とあたしを繋ぐ、たつた一つの絆だったから。

思い悩んでいたその時だ。不動が自分の目の前に現れたのは。よからぬ企みなのは明白。言つ通りにしなければ無理矢理拉致していくと宣言したくらいなのだ。しかし小鳥遊には、断る理由が無かつたのである。

サッカーが出来るなら何処でもいい。喜んでついていってやる。だから小鳥遊だけは、洗脳を受けていないのだ。そんな物、必要なかつたから。

- - あたしには、この学園が必要なんだ。此処がなくなつたら、あたしはまたサッカーを奪われてしまう。

忌々しい雷門イレブン。佐久間達のような憎悪こそ無かれど、小鳥遊にとつても邪魔な存在である事に間違いはない。彼らは小鳥遊の唯一のフィールドを奪おうとしているのだから。させるものか。自分のたつた一つの居場所なのだ。絶対に譲る。彼らなどに渡してなるものか。

- - 音無春奈。あんたには絶対、負けない。

偶然にも。春奈と小鳥遊はよく似た境遇にあつた。二人とも大好きな兄を喪つてゐる。その絆を、サッカーに求めてゐる。

違があるとするなら。春奈はこの試合に負けたところで、精々佐久間と源田を取り戻せなくなる程度だが。自分達は負けたら後が無いという事。

影山に、過剰な忠誠心など持ち合はせていないが。恩があるのは

確かに。そしてその影山は敗者をけして赦さない。弱い事は罪だと信じている。

負けたら自分も不動も、間違いなく切り捨てられるだろう。

- - 不動も不動で、あたしとは別に負けられない理由があるみたいだし。

イカレたキャプテンだが、その腕は買つている。それにある意味自分も同じような狂気を抱えて此処にいるのだ。

即ち己のサッカーの為ならば、どんな卑怯も厭わないという、狂気を。そういう意味じや共感が持てるし、仲良くしてやろうという気にもなる。

- - 後半も残り僅か。一点だ。一点入れば勝負はキメられる。

雷門ボールで試合は再会。ボールは富坂から風丸へ。

吹雪と染岡はピッチにこそ戻つたが、ダメージは大きいようで動きが鈍い。あちらもそれはよく理解しているのだろう。となればワ

イバーンブリザードをもう一度狙つて来る率は低い。

となれば風丸と富坂を押さえてしまえば、雷門は手詰まりだ。予想通り上がつていく一人に、真帝国メンバーは守りを固める。

「メガクエイク!!」

勢いよくジャンプする郷院。風丸がその俊足で避けようとするが間に合わない。轟音とともに郷院が着地すると、大地に激しい衝撃が伝わり、ひび割れていく。

悲鳴と共に吹つ飛ばされる風丸。そのまま郷院はボールを不動へパスする。

「風丸さんっ…くそっ…」

駆け寄ってきた富坂を、不動はギラリと睨みつけた。

「邪魔すんじゃねえぞ、ガキがあつ…！」

ひつ、と息を飲んで足を止める富坂。不動の狂気に、彼の紡ぐ黒い言葉にあてられて完全に呑まれたようだ。

これぞ、黒き魔術師たる不動明王の真骨頂。小鳥遊はニヤリと笑う。これであいつはもう怖くない。

そのままトリプルブーストを放つつもりか。不動を見ると、彼は

愉しげにアイコンタクトしてきた。それの意味する所は。

「まつたく、アンタも趣味が悪いねえ。

最後の一発は佐久間に決めさせるつもりらしい。彼がどうなるか、無論分かっているだろうに。

「いいや。付き合つてやるよ、アンタのカー二バルに

悪魔と言われようが構わない。

自分は自分の為に。己の信じるサッカーを貫く。それだけだ。

## 【1-21・そして彼らは、溺死して】

雷門は強い。それは分かつていた。なんせあの鬼道が惚れ込むほどのチームなのだ。けれど自分達には、禁断と称されたほどの技がある。

皇帝ペンギン一馬とビーストファンングがあれば。かつて鬼道が見ていたのと同じ世界を見る事ができる。彼を、追い越し、憎たらしい雷門を叩きのめす事ができる。

その筈だったのに。

- - 互角だと? そんな事... 有り得ないつ - -

佐久間はギリリと奥歯を噛み締める。全身を苛む痛みより、悔しさの方が勝つっていた。

理不尽? 不条理? ああ、なんて表現すればいい。自分達は勝つ為だけに、莫大な代価を払ってきた。それは帝国にいた時から変わつていいない。

スポットライトが当たるのはいつも鬼道で。自分はいつでも日陰の花だった。だけど、それでもチームに貢献できるならと。努力して努力して努力して、努力し続けてきたというのに。

それに加えて今は。命を削ってでも禁断の力を手に入れた。使いこなす為に血反吐を吐くまで訓練した。それなのに、まだ何かが足りないとでも? まだ雷門の方が勝るとでも?

- - 有り得ない... あつていい筈がないんだつ - -

ふざけるな。

ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなつ - -

奴らなんかより何倍も自分達は頑張ってきた。奴らなんかよりず

つとサッカーを愛してきた。奴らなんかよりずっと努力してきた。

そして奴らなんかよりずっと。

ずっと鬼道と、彼と同じ夢を、想つてきたところに。

何故その全てを、横からしゃりしゃり出て来た連中にかつたらわれなければならない？何故自分は愛した全てを、理不尽に奪われなくてはならない？

何がいけなかつたというのか。自分達に何の罪があつた？此処までの罰を受けなければならない程の事をしたとでも？

そんな筈ない。有り得ない！！

思考は最終的全て、同じ場所へと帰結する。

「お前らだけは…絶対に赦さない…！…」

赦さない。赦さない。赦さない。

だから、殺す。鬼道が愛したサッカーで、奴らの誇りも魂も、このフィールドで叩き潰してやる。

「俺達の方が上だ！！お前らなんかより上なんだ！！叩き潰して…  
証明してやる…！」

そうだ。自分達こそ勝者にして強者。鬼道は騙されたのだという事を、彼は自分達と共に在るべきだったといつ事を、この場で思い知らせてやるのだ。

春奈、とかいう名前の女が、まるで哀れむような眼を向けてくる。同情か、蔑みか。抉り出したい眼だと思つた。こんな女の為に、鬼道はずつと苦しんできたと思うと、激情が溢れて止まらない。

憎い。そんな言葉では言い表せないほど、憎い。

鬼道は死んでしまったのに、その妹が平然とピッチに立つてゐる、事実そのものが恨めしくて仕方ない。

「潰れてしまえ……つ……消えてしまえ……つ……」

佐久間の声に呼応するかのよつに、不動から小鳥遊へとボールが渡り、彼女はまた毒霧の術で不調の照美を抜き去つた。

バスが出る。ボールは佐久間に来た。佐久間は真つ直ぐ、春奈に向けて突っ込んでいく。その憐れむよつな眼を消し去る爲に。鬼道を縛り続けた忌々しい女を潰す爲に。

春奈の眼が驚愕と、恐怖に見開かれる。その身体にボールをブチ当てるべく、佐久間は脚を振り上げた。

積もり積もつた、あらゆる憎悪を叩きつけるよつ。

「くたばれつ……音無春奈ああつ……」

『……ピッちて、なんだよ……』

ドクン。

その時。佐久間の脳裏に、まるで硝子の欠片の如く、断片的なシーンが、蘇つた。

帝国学園の、薄暗い廊下で。自分と源田の二人は、鬼道に詰め寄つていた。あれはそう・・雷門と初めて戦うより、ずっと前の事。鬼道は憔悴しきつた顔だった。顔や腕、見える場所の傷は少ない。だから自分達は、彼の身に起きている悲劇にすぐには気付けなかつたのだ。どうして彼が自分達と同じロッカーで着替えたがらないのかも。

ユニフォームとマントの下は、包帯でぐるぐる巻きだつた。その下にどんな凄惨な傷があるかなど想像もつかない。彼が影山に、どんな暴行を受け続けてきたのかも。

ただ確かなのはそれが事実である事と、その虐待により鬼道の心は常に擦り切れ続けているという事だけ。

『何で鬼道が…鬼道だけがそんな目に遭わなければならんんだ？』

怒りをぶつける相手を間違えている。

それでも佐久間は言わずにはいられなかつた。悲しくて仕方がなかつたから。あまりにも不条理な運命が、それでも立ち上がる鬼道の強さが、何も出来ない己の弱さが。

『何でそうまでして…総帥に従うんだ…？どうして…どうして…！』

みつともなくも、自分は涙を流した。源田も泣いていたような気がする。

そんな自分達に・・鬼道は疲れ切つた顔で、それでも笑つて言った。自分には今はまだ、総帥の力が必要なんだ、と。

『護りたいものがあるんだ。護りたい約束が、護りたい人が』

鬼道は、幼い頃に生き別れになつた妹と約束したのだといつ。彼女は自分が護ると。そしていつか必ず迎えに行くと。

その為には - - フットボールフロンティアで三連覇を成し遂げなくてはならず。影山の教えと力なくしては難しいのだという。

『命に代えても、護りたい。その為なら何だってするさ』

小さな身体を精一杯張つて、運命を変えようとしていた少年。その力を、破壊ではなく救う為に使おうとしていた天才ゲームメーカー。

『大丈夫だ。俺は壊れたりしない』

源田と二人、抱き寄せられた温もり。鬼道はまだ14歳の子供だつたが、大人よりも親の愛を理解していた。

皆の“親”として、愛する事を知っていた。そうやつてずっと妹を想つて来たのだから。

『だつて…お前達がいてくれる。お前達は俺が辛い時、いつも背負つてくれる。その優しさが俺を救つてくれる』

自分は優しくなんかない。

だけど、思つた。それでも自分にも、鬼道を救うただ一つの魔法が使えるのなら。

『ありがとう』

優しい子になろう。

強さ以上に、優しい子になろうつて - - そう決めたんだ。

「 - - ツ ! !

全身から汗が噴き出す。目の前にいる少女が。鬼道が心から愛する存在であった事を。その鬼道の為に自分が自らに誓つた事を - - 思い出してしまつた。

回想した一瞬。ほんの一瞬、佐久間は動きを止めていた。その僅かな間が、目の前の状況を変える。

「 音無つ ! !

どんづ、と一之瀬が春奈を庇うようにして突き飛ばす。佐久間の打つたボールは、一之瀬の胸元に直撃していた。

「 ぐあつ ! !

「 い... 一之瀬先輩 ! !

一之瀬の身体が転がる。その一之瀬に駆け寄る春奈。佐久間は、自分でも驚くほど動搖していた。胸の中がぐぢやぐぢやにかき回されるかのよう。

自分は今、破壊の為にサッカーをしていた。護る為じゃない、壊す為のサッカー。鬼道の愛する物とはかけ離れたサッカーを。

そして彼が命懸けで護ろうとした妹に、殺意をこめてボールをぶつけようとした。

「 う... 」

だけど。

だけどもつ、今更なのだ。

「うわあああああつーーー！」

今更気付いたところで、何になる。もう何もかもが遅すぎる。  
後戻りなんて、出来る筈もない。

それは憐れむ眼では無かつた。  
悲しむ眼だつた。——  
一体、何を?

『あの技は絶対に使うな！何があつても、絶対にだ！』

「姉妹ペッシャンハシ」

『あの技は危険すぎる。サッカーができなくなるだけじゃ済まない  
：命に関わるぞ、佐久間』

「一  
号  
ツ  
！  
！」

『そんな事になつたり……俺せひやつさればいい。お前はそんなに俺を泣かせたいのか』

ああ、自分は、悲しませてる？

貴方を今、泣かせてしまっているの？

「ああああああっ！－！」

全身の肉を引きちぎられたかのような激痛が走った。三回目の皇帝ペンギン一号。限界を、超えた。喉から引き絞るような絶叫が突き抜けていく。

自分はただ、力が欲しかった。鬼道と同じ世界を見たかった。でもそれは壊す為じやない。誰かを追い抜かして、優越感に浸りたかった訳でもない。

護りたかったからだ。傷だらけで孤独に戦う、の人を。どうして忘れてしまっていたのだろう。本当に成りたかったのは、彼を救えるような、優しい戦士の姿だったのに。

佐久間の絶叫をBGMにして、ボールはゴールへと向かつて来る。円堂はとっさに動けなかつた。目の前の悲劇に、身体が硬直してしまっていた。

・・どうしてこんな事になる？

さつき一瞬。春奈を攻撃しようとして、動きを止めた佐久間。円堂は見逃さなかつた。佐久間の表情が、身体のダメージとは別の痛みに歪んだ事を。

・・どうしてこんな事になつた？

三回目の皇帝ペンギンは放たれてしまつた。佐久間の身体はズタズタになり、その痛みはショック死レベルに達しているのだろう。突き刺さるような悲鳴が全て物語つていて。

佐久間も源田も、鬼道とすれ違い、雷門を憎み、あの影山に従つて此処にいる。しかしその感情、それ自体は罪ではないのだ。円堂の中にも、誰かを憎む暗い気持ちは絶えず渦巻いているのだから。それに。

分かるような気がするのである。彼らが一番に望んでいる物が何だつたのか。彼らが一番取り戻したがつてている物が何なのか。何を悔いて立つてているのか。

そして彼らが、その望みが一度と叶わない事にも、気付いているのだろうという事も。

・・だからその虚しさを、何かにぶつけるしか無かつたんだ、きっと。

それを利用されてしまつただけ。なのに何故彼らがこんな目に遭わなければならない？自分達は鬼道になんと謝ればいい？自分達には、救えないのか？どんなに願つても、望んでも。だとしたらこれは、誰への罰？

「円堂っ……」

その時視界に移り込む影があつて……円堂は漸く我に返った。染岡だ。全速力で走つて来た彼が今、円堂に直撃する筈だつた皇帝ペンギン一号の軌道上に……。

「もつ誰も……奪わせはしねえぞ……ツ……」

バカリ。

染岡が突き出した脚に、ボールが食らいついた。染岡が歯を食いしばる。重く響いた、骨の碎ける音。それでも彼は耐えた……その身体が吹つ飛ばされるまで。

「染岡君……ツ……！」

吹雪の絶叫。円堂は唇を、血が出るほど噛み締めた。勢いはかなり死んだとはいえ、まだシートは生きている。

視界が滲む。目の奥が痛い。それでも円堂は悲鳴のよつに叫んで、技を出した。

「マジン・ザ・ハンドオオ……！」

怒りと、それを飲み込む悲しみを吐き出して。魔神の手が、佐久間の命懸けのシートを止めていた。

ボールをキャッチした円堂のグローブに、ポタポタと雪が落ちる。ホイッスルと実況の角馬が叫ぶ声が聞こえた。

「佐久間の皇帝ペンギン一号決まりずー試合終了ー2-2、引き分けだああつ……！」



## 【1・22・桜散る、涙散る】

至上最低最悪の試合。ひょっとしたら誰もがそんな風にこのゲームを評するのかもしれない。こんなのはサッカーじゃない、潰し合いで殺し合いではないか、と。

その考え方は正しくもあり、間違いでもあると源田は思う。

フィールドのあちこちで、怪我をして倒れ伏す選手達。ああなるほど、これは健全なスポーツと呼ぶにはあまりに暴力的な事だろう。しかしそんな光景を、既に自分達は嫌というほど見慣れているのだ。本気にならなかつた試合なんて、今まで一度もない。

自分達はいつだつてサッカーに命をかけてきた。大袈裟ではなく、このフィールドは自分達にとって殺し合いにも等しい戦場だつたのだ。

勝つ事は誇り。強い事が存在証明。自分達もまた少なからず影山の思想に影響されていたのだろう。弱ければ全てを失うと、無意識に怯えていたのかもしれない。

でもそれ以上に。勝ちたいと願つた理由が、あつたのだ。

「俺は少しでも…少しでも長く、みんなとサッカーがしたかった。

今やつと、思い出したのだ。当たり前だつた筈なのに、気付けば当たり前でなくなつてしまつていた事。

自分は、サッカーが大好きだつたのだ。

でもそれはただサッカーをする事じやない。愛していたのは、大好きな仲間達とやるサッカー。勝ち続ければ、勝ち続けた分、皆とプレイできる時間が長くなる。笑つていられる。

そうだ。だから、勝ちたくて。負けたくなくて。  
それなのに…勝てなくて。

「… なあ… 何が、いけなかつたんだ？」

するり、と。もはや痛いのか熱いのかも分からぬ脚を引きずつて、一步一歩前へと進んでいく源田。

フィールドは、こんなにも広がつたのだと思い知らされる。自分はＧＫだから見えてなかつた。仲間達はこんな広い場所を、死に物狂いでいつも走り回つていたのだと。

「俺達… 何処で間違つたんだ？」

自分達が間違えたのか。他の誰かが間違えたのか。  
自分達が罪人だつたのか。他の誰かが罪人だつたのか。  
あるいはその全てに、咎があつたのか。

「… こうなるかもしけないつて… 分かつてて。このピッチに立つた筈なのに。」

禁断の技を使うと決めたその瞬間に。この未来もまた高い確率で存在していた筈だ。自分はそれを予想していた。予想していたのに突き進んだ。要は、確信犯ではないか。

それなのに理不尽さを感じるなんて、どうかしている。

それとも、自分は心の何処かで気付いていたのか。禁術に頼るのが過ちである事を。それともまだ誰かに止めて貰いたがつていた？ どつちにせよ愚かとしか言いようがない。

「… でも俺は… 死にたかつたわけじゃない。死んで貰いたかつた訳でもない… 佐久間にも… 鬼道にも。」

全身は、まるで悲鳴を上げるがごとく痛みを伝える。一歩踏み出すたび、何処かが壊れる音がする。

このまま歩き続けたら、脚の指の先から粉々に砕けて、源田幸次郎という人間は塵のように消えてしまうのだろうか。

それでも歩みを止めないのは、たった一人、同じ痛みを共有した仲間の元へ辿り着く為だった。

フィールドに仰向けに倒れたまま、佐久間の身体がビクビクと痙攣している。皇帝ペンギン一号を三度打つた代償。その激痛たるや、死んだ方がマシといったレベルなのだろう。

立ち上がるどころか腕を持ち上げる力も残されていない親友。自分が側にいなければと思った。そうしなければ一生後悔する気がした。

源田は知っている。佐久間次郎という人間の脆さを。不動のスルウトはきつかけに過ぎない。本当はもつとずつと前から彼が、狂いそうなほどの愛憎を胸に抱いていた事に、自分だけは気付いていたのだ。

だけど、自分では鬼道の代わりにはなれない。同時に源田にしても、佐久間では鬼道の代わりにはなり得ないのだ。

その喪失を埋めるように寄り添つて、同じ赤信号を並んで渡つても。結局、ゴールなど見える筈もない。そして自分達が信号無視を繰り返している間に、本当にかの人は世界からいなくなってしまった。雷門が憎い。音無春奈が憎い。世界が憎い。運命が憎い。

それでも自分と佐久間の間には、決定的な違いがあつたような気がしてならない。何故なら源田は、まだ正気を残していたのだから。思いの外頑丈だった己の心は、狂気に墮ちる事すら赦してくれなかつた。雷門を潰しても鬼道は帰つて来ない。喪われた日々は戻らない。ただ虚しいだけと知つていた。

それなのに、佐久間を止める事もゲームを降りる事も出来なかつたのは。ひとえに自分もまた、このやり場の無い激情をぶつける相手が欲しかつたからに他ならない。

八つ当たりだ。誰より分かっている。分かっていても、ぶつけなければ耐えられなかつた。このあまりに過酷すぎる、現実に。

「佐久間…さく…ま…」

痛い。でも本当に痛いのは。折れた肋骨でも傷めた腱や筋でもなく、捻った関節でもなく。

「佐久間…俺…思い出したんだ」

胸の奥の奥。

魂に繋がる場所が、痛い。

「帰つて来るつて」

『源田。佐久間。…本当にすまない。俺の勝手な行動で、迷惑ばかりかけて。…でも』

「帰つて来たいつて」

『俺の…帰る場所は、帝国にある。俺はそり、思つてゐる。だから…もし、お前達が赦してくれるなら…』

「やつ言つてたじやないか…鬼道は」

『エイリアを倒した後…もう一度、同じペッチに立つてもいいか?』

忙しくて忙しくて仕方ない鬼道が。それでも合間をぬつて何度も電話をくれて。たつた一度だけ、お見舞いに来た時。確かに、そう言つてくれたのだ。

帝国こそ帰るべき場所だと。自分は帰るつもりだと。

鬼道は、自分達を捨てたわけじやなかつた。雷門に誑かされたわけでもなかつた。本当は、自分達はとつぐに知つていたのだ。

それだけじやない。世宇子に負けて。病院のベッドの上で悔しさを噛み締めていた自分達に。鬼道は頼みがあると言つた。自分に、時間をくれないかと。

雷門に行く、と初めて自分達に告げたあの日だ。彼は戻る事を約束してくれていたではないか。その彼を信じて背中を押したのは他でもなく…。

「俺達も、言つたんだ。鬼道に…頼んだぞつて…」

『頼んだぞ、鬼道。俺達の仇をとつてくれ!』

「やうやつ……やうやつ雷門に鬼道を送り出したのは、俺達だつたじゃないか……！」

ああ、そうなのか。

自分達こそが - - 最たる悪だつたのか。

なんて身勝手なのだろう。

鬼道は約束してくれていた。自分達は約束を信じて彼の背中を押した。なのに。

自分達は都合のいい事をまるまる忘れたフリして、勝手に裏切られたの。騙されたのだ。

いや - - それも本当は、違う。

自分達は全部分かつていた。だけど鬼道が裏切つたと、雷門に騙されたと思う事で紛らわそうとしただけなのだ。

惨めに負けてしまつた己の弱さと。鬼道と同じ場所に行けなかつた無力さ。そして。

鬼道が死んでしまつたという、あまりに大きな悲しみから。

「源…田……」

痛む身体に鞭打つて。膝をつき、佐久間の上半身を抱える源田に。

佐久間は荒い息の下、自分の名を呼んだ。

「どうじよつ……泣いて、るんだ

もう指先一つ満足に動かせない少年。その眼に、みるみる涙が溜まつていぐ。

「鬼道が、泣いてる……。いつも、涙なんか見せなかつたあいつが泣いて……どうしよう……どうしよう……お、れ……」

泣いてるのはお前だ、と言いたかった。佐久間の頬をポロポロと涙の雫が零れ落ちていく。源田の頬も、また。もしかしたら本当に、鬼道も今泣いてるかもしれない。

鬼道にとつて何が幸せだつたかなんて、今となつては分からぬけど。

自分達のこんな姿を見て、彼が笑ってくれる筈が、ない。

「どうして……俺はただ……ただ……つ」

佐久間の腕は動かない。それでも源田には見える気がした。救いを求めるように空へと伸びる、彼の手が。

「鬼道と、もう一回サッカー……やりたかつただけ、なのに……」

その掠れた声が。言葉が。源田の胸を突き刺す。

そうだ。自分達はただもう一度、胸を張つて帝国サッカー部を立て直して……鬼道とサッカーがしたかった。それだけだつたのだ。なのに、その願いは一度と叶わない。鬼道は、殺されてしまったから。

「鬼道、鬼道、きじひー、きじー、ビーハー、ビーハー、ビーハー……」

かくん。

讐言のように紡がれていた佐久間の言葉が、不自然に途切れた。首が完全に力をなくして垂れ、源田の腕の中の重みが増す。

「さく…ま？」

真っ青な顔で、瞼を閉じ、動かなくなってしまった佐久間。さあ、と源田の全身から血の気が引いていく。

そうだ。佐久間の身体は今、ボロボロで。もし全身の筋肉に損傷が及んでいるとしたら…。

「さ、佐久間！…佐久間っ！…しつかりしほ、佐久間あつ…！」

まだ辛うじて息はある。しかし意識を失つたとなるともう危ない。早く病院に連れて行かなければ、サッカーができなくなるぞ」さじや済まない。

彼を抱えて立ち上がろうとして、源田は己の身体がまるで思うように動かない事に気付いた。そうだ、忘れていたが、自分も怪我をしていたのだった。

だが、そんなの構つていられない。このままでは佐久間が死んでしまう。状況に気づいてか、雷門の何人かがこちらに駆け寄つて来るのが見える。でも、彼らの手は出来る限り借りたくなかつた。これは自分達が撒いた種なのだから。

何より後ろめたすぎる。自分達は彼らを散々痛めつけ、罵つてきたのだから。

痛みに歯を食いしばつてもう一度立ち上がろうとする。体の中から嫌な音がした。立ち上がるどころか、膝を持ち上げる事すらできない。

「…俺は最後の最後まで無力か…つ…！」

悔しい。その感情だけで死んでしまえそうなほど。

「何がキング・オブ・ゴールキーパーだ…守護神だ…！結局俺は何も…何一つ…！」

「面白い余興、見させて貰つたわ」

ドクン。

その声が背中から降つた途端。源田の全身から、嫌な汗が噴き出した。

この場に似合わぬ、カツン、といつヒールが地面を叩く足音。

「ま、こんなもんかしらね。貸し与えたエイリア石も純度の低いものだつたし」

甲高い、粘着質な女の声。

知らない声だ。その筈なのに。

「期待して無かつた割には、収穫もあつたし。恩に着るわ、影山センセイに不動クン？」

なのに何故、自分はこんなにも恐怖を感じる？ビリしてその声だけで - - 悪夢めいた何かを思い出しそうになる？

源田は顔面蒼白になりながら、振り向いた。振り向いて、しまつた。

「貴方の役目も、ここまでね。源田クン？」

血のような紅い眼。ニイ、と不動とは違う種類の喜悦に満んだ女の顔がそこにあって。

思い出した。その名前だけだけでも。

「二ノ宮、蘭子……！」

返事の代わりに、女は笑みを深くした。

## 【1・23・災禍の魔女、降臨】

試合は、終わった。しかしこの場所の状況はといえばまさしく死屍累々。脚を完全にやられてしまつた染岡は立つ事もままならず、吹雪、一之瀬も満身創痍。他のメンバーも疲労困憊といった様子だ。照美自身も、何度もラフプレイを受けたせいで、全身傷だらけである。何より元々体調が思わしくないのだ。体力は限界に来ていた。だが最も怪我が誰かと言えば語るまでもない。這うように佐久間の元へ辿り着いた源田はそこで気力体力を使い果たし、佐久間はといえば源田に抱きすくめられたままピクリとも動かない。このまま放置すれば命が危ないのは明白だった。

「やつと彼らは…大事な事を思い出せたのに。」

照美は全て見ていたし聞いていた。源田の叫びも、佐久間の涙も。彼らは雷門と春奈の強さに触れ、やつと悪夢から醒める事ができたのだ。自分と同じように。でも。

醒めた先もまた悪夢だなんて、悲しすぎる。

「駄目だよ。君達は…死んじゃ駄目なんだ。」

『完璧じゃなくたつて…護れる物はあるや』

思い出すのは、あの晩の鬼道の言葉。思えば自分に、立ち上がる事こそ強さだと最初に教えてくれたのも、彼だつた。

「大切な物があるなら、生き抜かなきや。」

彼らは知る由も無い事だが、鬼道は佐久間達とだけでなく、自分

と吹雪との約束も破つていった。それは無論本人の意志でも彼の咎でもないけれど。

彼は自分達を必死で護ろうとしてくれたのに。命を落とした事が契機で佐久間と源田を護る事ができなかつた。誰が悪いわけでもない、それは結果論であるとしても。

護りたいモノがあるなら、どんなに辛くとも生きるしかない。生きる事が死ぬ事より遙かに辛いとしても。それは照美が誰より今痛感している。

ようけながら立ち上がり、彼らの元へ向かう。視界の端で、瞳子が電話しているのが見えた。おそらく救助を呼んでいるのだろう。自分に出来る事は精々、一人を助け起こす手伝いをする程度だろうが。何かをせずにはいられなかつた。見殺しになんて、出来る筈もないのだから。

- もうこれ以上、誰かが死ぬのは見たくない。

断片的な記憶。世宇子の仲間達の最期の笑顔と、繋いだ手の感触。宙に放り出された時の、潮風の冷たさと、水底でもがくいくつもの手。

そして鬼道が死んだと聞かされた時の、胸を抉るような痛み。

- そしてもうこれ以上、あのを、人殺しにしたくない…。

もしこのまま佐久間と源田が死んだなら。それは間接的にとはいえ、影山が殺した事にもなる。

過ちを繰り返したのはお互い様で、今の自分にそんな事を言う資格は無いのかもしれないけれど。

の人を、救いたい。影山にもうこれ以上、罪を重ねて欲しくない。

「 - だつてあの人は私にとつて、たつた一人の…」

その時だつた。

突然、空氣の密度が上がつたかのような - - 奇妙な感覚。暗い色の霧が立ち込めて、空間がぐにやりと歪んで - - ああそつだ、まるでエイリアが現れた時のような。

違うのは、歪んだ空間の隙間に、黒い蝶が舞踊りだした事。その蝶が集まり、やがて人の形を成した事だ。

「面白い余興、見させて貰つたわ」

カツン、と真つ赤なヒールが鳴つた。

「ま、こんなもんかしらね。貸し与えたエイリア石も純度の低いものだつたし。期待して無かつた割には、収穫もあつたし。恩に着るわ、影山センセイに不動クン?」

それは、真つ赤なドレスに、真つ赤なルージュをひいた一人の女だつた。

焦げ茶のおかっぱ頭に、血のように紅い眼。年は二十代後半くらいか。背の高い妖艶な美女、と言つてもいい。だがその美しさは見る者に恐怖と、不快感すら与えるもの。

この場に似つかわぬ、喜悦に満ちた笑みがそう思わせるのか。あるいはその鼻につく甲高い声のせいか。

女は影山を見、不動を見る。なんとあの二人が、驚愕に凍りついているではないか。一体何者なのか。いや、そもそも今、一体どうやつて現れた?

その場違いすぎるドレス姿といい、その様はまるで - - 。

「貴方の役目も、ここまでね。源田クン?」

源田に向けて、麗しく微笑んでみせる女。源田は佐久間を抱きしめて振り向き、真っ青な顔で女を見ている。

役目? どういう事だ。源田は彼女の事を知っているのか? やがて戦慄くように、源田の脣が開かれる。

「一ノ宮、蘭子……！」

掠れた声だったが、ハツキリと聞こえた。

一ノ宮? 一ノ宮と言つたか?

『下手な興味で……我らの領域に踏み込まない事だ。そもそもば命の保証はない。……あの残酷な魔女が、嬉々として貴様を喰らひに来るぞ』

『そいつは一ノ宮様の貴重な実験体だ。我々に引き渡して貰おう。逆らつた場合、命の保証はない』

魔女。一ノ宮。

カゼルの言葉と、洗脳されていた真帝國学園の子供達の言葉が、照美の脳裏に蘇る。

まさか、この女が?

「お前が……エイリア学園の一ノ宮つて奴か……!？」

風丸がハツとして声を上げる。そのすぐ隣では、源田と同じく顔

面蒼白になり、宮坂に支えられているレー・ゼの姿が。

女・二ノ宮は、その風丸に笑いかける。無邪気に、しかし何処かネジの外れた笑みを。

「可愛い子ね。あたしのお気に入りの玩具と並ぶと映えるわね。：いいわ、自コ紹介してあげる」

玩具つてレー・ゼの事か？その言葉だけで一気に皆の不快感を最高レベルに押し上げておきながら、女は平然と話を進める。

「あたしの名前は二ノ宮蘭子。エイリア皇帝陛下の側近の一人よ。陛下直属の親衛隊の隊長をやらせて貰つてるわ」

その二ノ宮に向けて、真っ青な顔で叫んだ人物がいた。

不動だつた。

「ちょっと…ちょっと待つてくれよ二ノ宮様…！何で此処にアンタが来るんだ…？それに期待してなかつたつて…そんな…」

「あら、本当に何も気付いて無かつたの？意外～」

二ノ宮は目を丸くして、嘲りに満ちた声を出す。

「貴方は独断で影山センセイを脱獄させて、エイリア石を持ち出して…計画を進めたつもりみたいだけど、違うのよ？貴方が先走るよう仕向けたのは全部あたし達。貴方の目の届く所に資料を並べてあげたり…力の弱くなってきたエイリア石の欠片を盗み出しやすくしてあげたり」

「な…何だと…？」

「嫌よね、あれだけお膳立てしてあげたのに分かつてないなんて…！期待されてるとでも思つたの？ジエミニーストームから外された…失敗作でしかない貴方が…きやはははつお笑いだわ、傑作だわあ…！」

「な…あ…つ…？」

不動の顔が紙のように白くなる。耳障りな「ノ宮の嘲笑。それは自分達に向けられたものでもないのに - - どうしてこんなに嫌な気持ちになるのだろう。

今のは会話だけで、何となく理解した。不動はエイリア学園の人間であり、元々はジエミニーストームのメンバーだった事。独断で影山を脱獄させ、真帝国を築いたつもりでいたが - - 違っていた事。

「貴方なんて最初から捨て駒よ。あたし達の掌で無様に踊つてただけなのよ!だからこそ色々協力してあげたわけ。そこの佐久間クン源田クンを引っ張つてくる時だつて…ねえ?」

がくん、と膝をつく不動。

「俺が…俺が失敗作?捨て駒?あの方がそう言つたのか…?あの方が…?あ…あああああつ…!」

絶叫し、頭をかきむしる。壊れた、胸を抉る声で泣き叫ぶ。自分達には詳しい事など何も分からぬ。ただ、彼が“あの方”的に何かを成そうとしていて、しかしたつた今その全てを失つたのだと - - それだけは理解する事が出来た。

「不動クンは、素質はあるけどまだまだダメ。これで分かつたでしそう?魔術師の端くれといえど、真の魔女と魔法の前には無力だつて事が」

魔術師に、真の魔女に、魔法。この女の言つ事はまったく訳が分からぬ。

- - いや、今はそれ以上に気になるワードがある。佐久間と源田を引き入れるのに彼女が協力した - - という言葉。そのせいだろうか。あの凜々しく冷静だった源田が、あんなにも怯えているのは。

「名前だけでも思い出せるだなんて… さすが、貴方はモノが違うわね。そっちの玩具とは大違い」

一步、源田に近付く二ノ宮。本当は後退りたいのだろう。しかしもはや身体はボロボロな上、瀕死の佐久間を抱きしめている源田は動けない。

「ね… それ以上も思い出して頂戴。あたし達が初めて逢つたのは、何処だつたかしら?」

「い… 嫌…」

ガタガタと、幼い子供のように震えている源田は、絞り出すようにそれだけを紡ぐ。

「嫌… 嫌だ… つ。思い出したくない… ！」

その様子に。二ノ宮は機嫌を損ねるどころか、ますます悦びに満ちた笑みを浮かべる。怯える少年の頬に指を這わせ、その指がすっと下の方に降りていく。

真っ赤なネイルの指が、厭らしい仕草で彼のきめ細やかな肌を這う。だが不快感より恐怖の方が圧倒的に勝るのか、少年は震えて硬直するばかり。

首筋をなぞり、やがては源田の胸の中心をまっすぐ指差して止まる。

「…雷門の子達は、優しいわね。教えてくれなかつたのねえ… 鬼道クンが殺された日、佐久間クンの携帯から呼び出されてたつて事」

源田の眼がさらに大きく見開かれる。

駄目だ、と照美は思った。本能的にだ。それ以上言つた。それ以上語るな。

それ以上は、聞いてはならない。

「あああ、思い出してもご覧なさい……貴方達の身体を貫いた、その傷を」

女が謡つように紡いだその瞬間。源田の背中から突然、真っ赤な血が噴き出した。マネージャー達から悲鳴が上がる。その血は照美の頬にまで飛んできた。

「げ、源田君……っ……？」

がくん、と力を失い、源田の身体が横倒しに崩れ落ちる。ひゅーひゅーと木枯らしのような息が聞こえる為、まだ彼が生きている事こそ確かだが……。

グラウンドに、みるみる紅い海が広がっていく。見れば佐久間の胸や頭からも、じわじわと紅が染み出してきている。

何だ！？一体何が起こったのだ！？

「さあや、思い出してご覧なさい……」

指についた源田の鮮血を美味しそうに舐め上げて、一ノ宮はさらに残酷な言葉を続ける。

“あの日”、愛媛で何が起きたのかしら？“その後”、東京で貴方達は何をしたのかしら？そして帝国で……何を見たかしら？

心臓がまた、雷鳴の如く大きな音を立てた。

愛媛。東京。帝国。

鬼道を呼び出した佐久間の携帯電話。確かに自分達はそれを、知っていた。だが偽メールを送る方法が無いわけではなく、鬼道と直接

佐久間や源田が話したわけでもない。

だから照美も考えなかつた。否、考へないよつて、してゐた。彼らが本当に、あの事件に関わつてゐるだなんて。

「さあさ思ひ出しへ…思ひ出しへ」覧なさいよおつーーー。」

二ノ宮の顔に、醜悪に歪んだ笑みが浮かんだ。

「貴方達の大好きな大好きな鬼道クンを殺したのは… 一体だあれ！」

バキリ、と空間に罈が入つたかのよつな錯覚。瀕死の源田がカツと目を見開いたまま - - 絶叫した。  
魂を引き裂くよつな、声で。

## 【1・24・眞実は、刃の如く】

話は - - 十日以上前まで遡る。

源田はその日、佐久間と共に愛媛に調査に来ていた。脱獄したといつ影山の真意を探り、その野望を食い止める為。そしてこれ以上鬼道に負担をかけない為に。

埠頭に何かがある。そこまで調べたものの、それ以上辿り着くより先に影山の手の者達に見つかってしまった。即ち影山の手下達と、不動率いる真帝国学園の生徒達にだ。

持ち前の体力を生かして、逃げ回る一人。しかし、向こうは数で攻めて来る。市街地まで逃げ切るより前に - - 。

『見つけた』

不動に、発見され。あつといつ間にエージェントと真帝国の子供達に包囲されてしまった。手首を捕まれ、口を塞がれては悲鳴も上げられない。

自分達はこのまま捕まってしまうのか。また影山の奴隸にされてしまうのか。

源田の脳裏をよぎったのは、最悪の想像。自分達を手の内に収めた影山が次、どんな行動に出るかは容易く知れた。

影山は異常なほど鬼道に執着している。きっと自分達を人質に鬼道を脅迫するだろう。そしてまた、鬼道が影山の支配下に置かれるような事が起きたら - - 。

- - 駄目だ…絶対に駄目だ、そんな事… - - !

また同じ悲劇が、繰り返されてしまう。

思い出すのは、影山の虐待と圧力に耐え、ボロボロになつていつ

た鬼道の姿。自分達はいつもそんな彼を見ているだけで、何も出来ずにして。

彼の力になりたくて此処にいる筈なのに、これではまた鬼道の足を引っ張ってしまう。やつと影山から解放されて、前を向いて歩けるようになった彼の。

それだけは避けなくてはならない。そう思ったのは源田だけではなかつたようだ。この命に代えても、影山に囚われるのだけは避けなくてはならない - - と。

「ぐあっ - - 」

悲鳴が二つ上がつた。佐久間に手を噛まれた男と、源田に思い切りタックルをくらつた男の。

「に、逃がすかっ - - 」

暴れに暴れる二人に、伸びてくる幾つもの手。大人の手に子供の手。それを必死で振り払わんと抵抗を続ける源田達。がむしやらに暴れて、やつとその群集から抜け出して - - 走り出そうとした、その時だった。

ガンツ - - !

源田のふらついた体が、勢いよく何かにぶつかる。それは倉庫街に積まれた、鉄骨や角材。本当はしつかり縛つて置いておくべきところを、責任者がいい加減だつたのか乱雑に積み上げられていただけだつた。

それが災いした。

ぶつかつた拍子にバランスが崩れ - - それらが源田の上に、土砂崩れのよう落ちてきたのである。

「源田あつーー！」

ドンッ！と背中にタックルをくらって、源田は転がった。轟音。衝撃。激痛。ああその時のショックをどう説明すればいい。手を縛られていたせいで受け身をとる事も叶わず、その少年は悲劇に成すがままだった。

「うぐ…！」

背中と胸が、焼け付くように痛い。それでもビックリとか少しだけ身体の向きを変えて、後ろを振り返った。

そこには滅茶苦茶に崩れ落ちた鉄骨と角材の山が。酷い有様だ。多分真帝国の奴らは逃げ出したのだろう。いなくなっている。立ち上がろうとして、脚がおかしい事に気付いた。

「…ッ！」

右の脇ら脛まで、角材の山に埋もれている。いや、それだけじゃない。源田は見た。自らの頭から、身体から、勢いよく滴る紅い滴を。

そして理解した。背中に何本も、細い鉄骨が突き刺さっている事を。

ひきつれた悲鳴が喉から絞り出される。押し寄せる激痛の波の中、どうにか佐久間の事を思い出す。自分のすぐ側にいた彼は何処に。

「あ…」

いた。見つけた。

「ああ…あああ…」

見つけて、しまった。

「ああああああああああああ...」

重たい角材の一番下から。褐色のほつそりとした腕と、水色の髪が覗いている事を。

その下からじわじわと真っ赤な海が広がっていく事をまさか、さっきの体当たりは。佐久間は自分を庇つて、あの下敷

あわてては、

何でだ 何でだああつ！！

叫ぶ事は出来なかつた。源田はガハツ、と大量の血を吐いた。急速に身体から力が抜けていく。源田の周囲も血の海だつた。その中に、ダイブするように沈みこむ身体。

どうしてこんな事になってしまったのだろう。自分達は何を間違えたのか。こんな所で。こんな惨めな死に方をしなければならない？

ただ、鬼道の役に立ちたかっただけなのに。ただ、普通に、当たり前のサッカーをしたくて……ただそれだけで。

鬼道はいつも俺達の前じや涙なんか見せなかつたけど。

緩やかに霞みがかつていく意識の中、源田は思つ。痛みすら薄れつつあるとなると、これはいよいよマズいのだ。真帝国の奴ら

が救急車を呼んでくれるとは到底思えない。  
このまま自分達が死んだら。そしてそれを鬼道が知つたなら。

「泣かせてしまつだらうか。そんなの……嫌、だな。

嫌だけれど、もはやどうしようもない。源田の思考が諦めに落ちようとした、その時だつた。

災禍の魔女が、現れたのは。

「お生憎様ねえ。数ある運命の中から、最も残酷な道を選んでしまうだなんて。これも必然かしらね？」

源田の視点からは、真つ赤なヒールを履いた足首までしか見えなかつたが。

女が目の前に立つてゐる事だけは、分かつた。

「……誰……？」

血に塗れた唇で、どうにかそれだけを絞り出す。掠れた小さな声だつたが、女の耳には届いたようだ。

「あたしは魔女。最も残酷にして偉大な、災禍の魔女よ。この世界での名前は、二ノ宮蘭子」

ぐすくす。女は笑つてゐるらしい。

「ねえ貴方、望みはある？あたしは魔女だから、叶えてあげられるかもしけなくつてよ。代価はきつちり貰うけどね」

魔女。その言葉を馬鹿らしいと笑つ氣力など、源田には残されていなかつた。魔女だらうと悪魔だらうと人間だらうと、何でもいい。

望みを、叶える。その言葉に源田は縋ってしまった。それこそ、藁をも掴むような心地で。

「助け……て……」

助けて。お願い、助けて。

「さくま、を……たすけて……」

自分のせいで、彼が死ぬような事があつてはならない。自分のせいで誰かが傷つくのを見るのはもうたくさんだ。

自分が生きたくなかったわけじゃないが。源田が何より最初に願つたのは、それだった。

魔女に助けを求める事が、どれほど危ない賭かも知らないで。

「……いいわ。助けてあげる。佐久間君も……貴方もね」

急速に視界から光が失われていく。ブラックアウトの寸前、最後に拾つたのはこんな言葉だつた。

「ただし……貴方達は今日からあたしの玩具にして駒よ。あたしの為に働いて貰うわ……壊れるまでね」

「げ……源田と佐久間が……死んでいただつて！？それも鬼道より先に

！？」「

土門の驚きの声を、どこか遠い場所で聞く。

源田はガタガタと震えながら、両手で自らの肩を抱いていた。

そうだ・・・“思い出した”。

この背中の傷は、あの時降つてきた鉄骨によつて負つたもの。自分はあの場所で命を落とした筈だ。佐久間と、一緒に。

「どういう事…？」一人が死んだなら、今此処にいる源田君達は何だつていうの…！？」

ベンチから、夏末が叫ぶ。二ノ宮は飄々と、そしてあつさり言い放つた。

「生き返らせたのよ。私の魔法でね」

「ば…馬鹿な…！…そんな事あるわけ…」

「無いって言い切れるの？証拠は？」

「…つ…！」

言葉に詰まる夏末。そうだ、自分も佐久間も魔法など信じて無かつたのだ・・・そんなモノ有るわけがない、と。

あの日実際に、自分達が生き返るまでは。

あれだけの傷。仮に生き延びても、相当長い間治療が必要だつた筈。ところが源田と佐久間が目覚めたのはその翌日で、負つた筈の怪我は綺麗さっぱりなくなつていたのだ。

「悪魔の証明…か」

一之瀬が苦い顔で呟く。

「悪魔が“いる”事を証明したければ、実際に悪魔を連れて来れば済む。だが悪魔が“いない”事を証明するのは遙かに難しい…」

「頭がいいのねボウヤ。その通りよ。悪魔の証明は、魔法にも当て

はめる事が出来るのよね。尤も、人間は頭が堅いイキモノだから… 実際に魔法を見ても、簡単には信じようとしないのだけど 少なくともこの場で魔法が“存在しない”事を証明するのは不可能に近い。そういう事だ。

「」の世に“有り得ない”事は“有り得ない”の。覚えておきなさい

二ノ宮はにっこりと笑う。衝撃的な話を語るにはあまりに不似合いな笑顔で。

源田の心を、あまりにも重たい恐怖が塗り潰していく。自分達は死んだ。それなのに生き返った。

だが本当の問題は - - ここから先なのだ。消されていた記憶の恐ろしさに、言葉も出ない。そうだ、自分は全て見ていた筈なのに、忘れさせられていた。

あの魔女の手によつて。

「…さて大事なのは此処から先。佐久間クン源田クンをスカウトするように不動クンに命じたのはあたし。でも不動クンは、大事な大事な人材を殺してしまい、あたしの手を煩わせたわ」

ビクリ、と膝をついた不動の肩が震える。

「まあその時点で…お役御免にされても仕方なかつたんだけど? あたしつてば優しいから、ちょっとだけ挽回のチャンスをあげたのよ」

二ノ宮はポケットから何かを取り出して掲げる。それは携帯電話だった。ベージュ色の、auの最新機種 - - 源田には見覚えがあるものだった。

「「コレ、佐久間クンの携帯電話。不動クンに、盗んでくれよつて」命令したの。何に使うかまでは教えてあげなかつたけどね」

「そうだ。佐久間の携帯。買い換えて半年程度しか経つていらないのに、真帝国学園に来てすぐ紛失したと大騒ぎになつたのだ。  
まさか。二ノ宮が不動に盗ませていたとは。

「もう分かるわよお、あたし。あたしがあの田帝国学園に、鬼道クンを呼び出したの」

悲鳴にならない悲鳴が、あちこちから上がつた。  
鬼道を、あの倉庫に呼び出した携帯を、二ノ宮が持つていた。それはつまり……。

「あたしは最後にトドメを刺しただけ。でもずーっと見てた。見てたのよ……教えてあげましようか？」

「いや、ど。まるで口裂け女のように……真つ赤なルージュが凶悪につり上がる。狂氣と、快樂と、喜悦を最悪の組み合わせで掛け合わせたような……そんな笑みの形に。」

「ずーっと見てたわ。

待ち伏せに気付いたあの子の驚愕に染まつた力オも。  
いきなり蹴り飛ばされて、軽く吹っ飛ばされちゃつたところも。  
腕を叩き折られて悲鳴をあげるところも。  
肋骨を一本ずつ叩き折られていくところも。

男達に滅茶苦茶されて、涙を必死に堪えるところも……」

やめて。

もうやめてくれ。

それ以上、言わないでくれ。

「その中に大好きな仲間の顔を見つけて、その顔を絶望に染め上げるのもね……！」

源田は頭を搔き鳴り、絶叫した。

そうだ。そうだ。そうだ。  
望んでなどいなかつたのに。

自分達が、鬼道を殺した。

## 【1・25・噛み千切る、理性】

不慮の事故により、死んだ筈の自分達は、一ノ宮の“魔法”により、生き返る事となる。

目覚めた源田は、既に黒い感情に支配されていた。即ち、自分達を捨てて雷門に行ってしまった、鬼道への憎しみに。それは佐久間も同じ。

『悦びなさい。恨みを晴らさせあげるわ』

一ノ宮はそう言って、自分達を甘く誘つた。気付いた時、愛媛にいた筈の自分達は一瞬にして東京の - - 帝国学園にいたのである。これも彼女の魔法なのか。何かをおかしいと感じる心すら、その時の源田には失われていた。

自分達の他に、一ノ宮は男を三人連れていた。黒服姿の、ガツチリした体格の男達だ。彼女の直属の部下だらうか。

一ノ宮と男達と、自分と佐久間。六人で、例の体育倉庫で待つていた。電気もつけずただじっと息を殺して。

鬼道が扉を開けて入つて来るやいなや - - 男達が素早く彼を中心に引きずりこんだ。鬼道には抵抗する間も悲鳴を上げる間も無かつただろう。大人と子供の腕力差体格差は決定的な上、元々鬼道は華奢な部類に入るのだ。

扉は重たい音と共に閉じられ、鍵がかけられる。鬼道が男達に押さえつけられたところで、電気がつけられた。

『佐久間…？源田…？これは、一体…！？』

『久しぶりだな、鬼道』

戸惑いを隠せない様子の鬼道に、佐久間が淡々と言つ。

戸惑い - - そう、あの時の彼は驚愕より戸惑いが大きかつた。この見知らぬ男達と女は一体誰なんだ、とか。何故自分はこんな風に

拘束されるんだろう、とか。

自分がこれから酷い目に遭わされるとは思つてもいない。源田を、佐久間を、信じきっている人間の - - 眼。

それが、酷く苛ついて。

『俺達が何で怒つてるかも：分からぬのか？鬼道』

じり、と源田は彼の田の前に立ち、ゴーグルをやや乱暴に外した。切れ尾の、ルビーの瞳が露わになる。

『うつ……』

田元に僅かに走つた痛みと、突然瞳を襲つた眩しい光に、鬼道は顔をしかめる。

何故彼がゴーグルをつけるようになったか。それは己の表情を隠す為と - - もう一つ。健常者よりも、光に弱く、ある一定以上の明るさの下では視界が真つ白になつてしまふからだと聞いている。彼がそうなつたのは身体的な事ではなく - - 影山の虐待によつて後天的に、精神的なものが原因だという事も。

『全部お前が悪いんだよ』

かつて、その瞳の色が綺麗だと思った。宝石のようだ、隠すなんて勿体無い - - と。

だが、今はその色すらも忌々しい。

込み上げる激情に任せて、源田は彼の腹を蹴り飛ばしていた。

『がはつ……！』

スパイクが、柔らかい腹と堅い肋の感触を知る。そのタイミング

で男達が手を離すものだから、瘦せつぱつちの鬼道の身体は壁の方まで吹っ飛ばされた。

激しく咳き込みながら、転がる鬼道。その前に佐久間がつかつかと歩み寄り、胸を蹴りつける。

『……俺達はずつとずつとお前に近くして来たんだ。なのに……』

普段よりずっと低い声で咳く佐久間。背を向けた彼の表情は、源田の方からは見えなかつたが。

みるみる驚愕に染まる鬼道の顔が、その全てを物語つている。

『お前はあつさり俺達を捨てて雷門に行つた！仇討ち？誰がそんな事してくれつて頼んだよ、ええ？お前は強い奴らの仲間になつて勝ちたかつただけじゃねえか。その程度なんだよなあ、お前にとつて仲間なんて……！』

鬼道の胸倉を掴み、持ち上げる佐久間。佐久間の方が鬼道よりも背が高いので、目線を合わせようとすると鬼道の踵が浮く形になる。憤りに憎悪。暗い感情で震えている佐久間の背中。

『ふざけんな……！これほど敬い、近くしてきた俺達をお前は否定したんだ……つ。この裏切り者がああつ……』

叫び、彼は思い切り鬼道の身体を地面に叩きつけた。肩口から落下した鬼道に、更に何度も蹴りを食らわせる。

そのたびに上がる呻き声。だが、源田は気付いた。鬼道がまるで抵抗らしい抵抗をしていない事に。

頭にすっかり血が上っている佐久間を押さえこみ、源田は一步前に出た。

『鬼道。……どうして抵抗しない?』

まだ、少なくとも足は無事な筈。逃げようと思えば逃げる体力はある筈だ。なのに、何故。

暴力から僅かばかり解放され、咳き込みながら。掠れた息で、鬼道は言った。

『…………すまなかつた』

紅い眼は、朧気にしか自分達を映していないだろうが。しかしハツキリと眼があったのを源田は感じ取った。

『すまなかつた。俺の勝手で…お前達を傷つけてしまって。自分の都合だけで行動して…本当に、すまない』

命乞いではなかつた。心からの謝罪だつたと後になつてみれば分かる。

『俺はお前達にずっと感謝していた。お前達がいたから、どんな場所でもずっと戦つて来れたんだ。その恩に報いるつもりが…あだで返す結果になつて…謝つても、謝りきれない』

でもそんなしおりしき態度すら。

『俺にぶつける事で…お前達の気が済むなら…それでいい。全部、ぶつけてくれ』

苛立ちを増す要素にしか - - ならなくて。

『だつたら…望み通りにしてやるよ…』

鬼道は、理解していない。天才ゲームメーカーとして、フィールドの上で周りの動きを読むのは得意中の得意なのに、自分に向かわれる好意に対してもあまりに鈍感すぎる。

自分はどんな状況にいても、他者に惜しみなく愛情を注ぐのに、自分に注がれている愛情にはまるで気付けない。

それは幼くして両親を失い、“自分が守らなければ”という切迫感の中で妹を護り続けてきた事。そして父にも等しい存在である箸の影山から、暴力による歪んだ愛を受け続けてきたせいなのだろう。己に愛される資格など無いとすら、思っているのかもしれない。だから、見えない。自分がどれほど周りに想われているのかも、自分がどれほど周りに影響しているのかも。

鬼道は謝った。確かに、謝った。

でもそれは、『自分達を置いて雷門へ行つた事』であつて。『自分達の愛情にあまりにも鈍かつた事』への謝罪ではないのだ。

『お前は何も分かつちゃいない…分かつてない分かつてないつ…』

横たわる鬼道の身体を、佐久間と一人がかりで何度も何度も殴り、蹴つた。

悔しくて仕方ない。どうして解らない？どうして気付かない？自分達がどれほど鬼道を信じてきたか。どれほど想つてきたか。

『お前のせいで何もかも滅茶苦茶だ…！帝国も…俺達のサッカーもつ…！』

嫌な音が複数回。多分、肋骨や鎖骨がイカれたのだろう。手首をスパイクで思い切り踏みにじつてやつたら、脚の下に鈍い感触があった。手首も碎けたのか。それでも鬼道はずつと、悲鳴を

喉の奥で殺していた。

『…それで氣は済んだかしら?』

やがて。ずっとニヤニヤしながらコンチを見ていた二ノ宮が口を開く。

氣が済んだ?済んだ筈がない。殴れば殴るほど、胸の奥のドス黒い炎は増すばかりだ。

『貴方達、やる事が大人しすぎるわ。まあそれはそれで一興なんだけど。どうせなら…その子が一番苦しむ事をやつておあげなさいな』

一番苦しむ事?

戸惑う源田をよそに、女は証明の一部を落とした。薄暗くなる室内。もうまともに動けない状態の鬼道を、二人の男達が左右から押さえつける。

眼が暗さに慣れない。それでもチカチカする景色の中、源田は確かに見た。

先程まで僅かに苦痛の色を滲ませるばかりだった鬼道の顔が…恐怖に彩られたのを。

『あ…ああ…』

男の太い指が、少年の髪を乱暴に掴む。髪留めがちぎれ、ドレッドヘア-がほどけた。もう一人の男の手には…ナイフ。

『お前が悪い子だからいけないんだよ』

三人目の男が、鬼道の耳元で囁く。

『だからこれは、お仕置きなんだ』

何故この男を二ノ宮が選んだか、気がついた。声が似ているのだ  
・・あの人には・・影山に。

鬼道の頬を、涙が伝つた。そして、言つた。

『「めんなさい…』

流石に、ぞつとする。今まで見た事もない、怯えた子供の顔。鬼道はまるで壊れた機械のように言葉を紡ぐ。

『「めんなさい…」「めんなさい」「めんなさい」「めんなさい…』

鬼道の心に深く刻まれた心の傷を。二ノ宮は嬉々として抉つてみせたのだ。影山に虐待されていた時とよく似た状況を作り出す事によつて。

今、鬼道には男の姿が影山に見えている。フラッシュバックに、現実が見えなくなつてゐるのだ。

『おやりなさいな』

二ノ宮が高らかに命じた。男の手に持つたナイフが振り下ろされる。何度も、何度も。肌を切り裂く音。上がる悲鳴。しかし男達に押さえつけられている鬼道は逃げられない。

精神的な苦痛と肉体的な苦痛で、錯乱状態になつてゐる筈だ。

血の匂いが強くなる。肌と一緒にビリビリに引き裂かれて、赤黒く染まつたマントが地面に落ちた。さらに暴力は別の方向へも向かう。まさしく鬼道が今まで影山にされてきた全てを再現するよう。じりん、と鬼道の折れた足首から運動靴が脱げ落ちた。靴下もどうビリビリで本来の用途を果たしていない。

色の白に素足を、血が何本も筋を引いて伝い落ちていく。

『ま、ひもつともつと泣き叫びなさいなーー！あたしを楽しませて頂戴ーー』

二ノ富が囁う。囁う。囁う。源田も佐久間も動けないまま、ただ目の前の凄惨な現場を見ていた。

ボロボロにされていく自分達の元リーダーから、目を離す事が出来ない。

『ち……違つ……』

みしり、と胸の奥から鳴った音。ずっと気付きながら無視していた音。

歯車が噛み合わずに擦り切れていく、音。

『こんな……こんな事したかつたわけじゃ……』

源田の咳きに、二ノ富が振り返る。心底蔑むような眼で。

『あら、今更何言つてるの。貴方達、鬼道クンが憎くてたまらないんでしょう？鬼道クンに復讐してやりたかつたんでしょう？』

『でも……ここまでやる必要はつ……』

『散々殴つたんだから、貴方達もとっくに共犯。今更被害者、ふらないで頂戴』

男達に代わる代わるのしかかられる鬼道と、眼があつた。源田の顔を映したせいか、少しだけ正気の色が見えて。

『すまな、かつた……』

消え入りそうな声。彼はまだ、自分達へ謝り続けていた。こんな

悲惨な目に遭わされているの。』

『あつが、とつ…』

どうして。

本当に裏切ったのは鬼道じやない。自分達の方だと叫ぶの。

どれくらい時間が経つたか。男達がまるで「ゴミ」のようになり、鬼道の身体を投げ捨てた。全身を血で真っ赤に染め上げ、ビリビリの服が僅かに肌に纏わりついているだけの、ボロ雜巾のような姿。それでもまだ、生きている。虚ろな眼で宙を見ながら。

『ああ…アドメを刺しなさい』

二ノ宮にナイフを握らされた。鬼道の血がべつたりついた、ナイフを。

『いや…嫌だ…』

こんな筈じやなかつた。

ただ鬼道が気付いてくれればそれで良かったのに。

『うわあああつ…』

ナイフを投げ捨て。そこで源田は、ショックで氣を失つたのだった。

## 【1・26・終末の、ラプソディア】

嗚咽が響く。源田が泣いている。血の海の中、佐久間を抱きしめたまま、瀕死の体で弱々しく涙を流している。

他の者達は、涙さえ流す事が出来ない。あまりにも衝撃的な話に。あまりにも惨たらしい真実に。

「愉しかつたわあ。あそこでこの子が殺つてくれたら最高の作品だつたのに。まさかあの程度でクラッシュするなんて…おかげで記憶は消さなきやいけないし、一度手間だつたわ」

二ノ宮の笑う声を、塔子はただ呆然と聞く。脳がまだ、事実を受け付けてくれずフリーズしているのだ。

「で、仕方ないから、あたしが情けをかけてあげたわけ。気持ち良かつたわよ…刃が肉に食い込んでいく感触！直に伝わる、弱々しい鼓動！…あれは何回繰り返してもクセになりそう…つ…！」

女は醜悪な笑みを浮かべて、嬉々として自らの殺人を語る。この女が、全てを壊した。

源田と佐久間の死の原因を作り、影山を煽り、源田達の意志をねじ曲げて弄び、彼らを惨劇に無理矢理荷担させて。彼らから、自分達から。

鬼道を永遠に奪い去った。

「…ツ…！」

怒りと憎しみで、一気に目の前が真っ赤になる。この女が全ての元凶。この女がこの女がこの女がこの女がこの女が…！

「これほどの激情を、十四年の人生で味わった事があつただろうか。

「やつぱり…全ては貴様の仕業だつたのか…」

しかし。

塔子が持つていた銃を抜くより先に。

「ブッ殺してやるッ、アルルネシアアアアアア - - - - -」

誰よりも冷静に見えた、聖也が。

絶叫と共に、二ノ宮に踊りかかっていた。

ガキインッ!!

聖也がどこからともなく取り出した、鍵のような形の、赤と青一本の剣。それは二ノ宮の寸前で、見えない壁のようなものに阻まれた。

「殺してやる…殺してやる殺してやる殺してやる殺してやるッ…!  
てめえだけは赦さねえ…一度殺すだけでも飽き足らねえつ…!」

修羅の形相で、力任せに剣を震う。行き場の無い殺意を叩きつけ

るよつ」。

しかし一ノ宮は涼しい顔だ。

「生きたまま腸引きずり出して食ひてやるつ……死んだらまた生き返らせて、何万回だつて殺して……無間地獄に叩き落としてやるつ……」

聖也の怒声と雰囲気の恐ろしさに、誰もが声をなくしていた。飛びかかる寸前だつた塔子ですら。

いつもおちやらけて、お馬鹿で、鬼道が死んだと聞いた時も冷静に皆を慰めていた彼が……こんな姿を見せるだなんて。

それに……アルルネシア？

二ノ宮の事だらうか。

「その名前を知つてゐるつて事は……なるほど、貴方キー・シクスね。あまりにも力を感じないから気付かなかつたわ」

小馬鹿にしたよつた顔で言つて一ノ宮。

「無様ねえ……かの終焉の魔女、キー・シクス卿ともあらう人物が、そんな惨めな姿になつちゃつて。あたしを追つて來たのかしら？干渉値を護る為に、ガチガチに能力を制限した貴方なんか……怖くもなんともないわよ？」

「黙れメス豚があつ……！」

聖也が吼える。憎悪に満ちた凄まじい形相で。

「何故だつ……何故あいつらを巻き込んだ！？何故鬼道を殺したつ！……あの子はやつと……やつと自由になれたんだぞ……つ。やつと願いを叶えてやつと……影山と決着をつけようとしてたのに……仲間の元へ帰ろうとしたのに……つ」

そうだ。

鬼道には帰る場所があったのだ。  
帰りを待つ仲間達がいたのだ。  
それなのに。

「返せよ……つ鬼道を返せ！人殺し……」

その言葉に、一ノ宮が弾けたように笑う。蔑みきつた声で。

「貴方がそれを言うの？今まで何万もの世界を滅ぼしてきた魔女の貴方が……お笑いねつ……くだらない情に振り回されるから何の望みも叶わない！……誰も護れない！……だから愉しいのよ……貴方みたいな人を喚かせるのは……！」

「黙れええつ……！」

聖也は叫び、刃を高々と振り上げた。しかし。

「やめて聖也さん……！」

その動きは中途半端に止められる。

「闇に呑まれちゃ駄目……そんな人の言葉に耳を傾けちゃ駄目……だつて貴方は……白き魔法使いなんだ……！」

吹雪が、後ろから聖也に抱きついていた。涙を流しながら。

「ふふ……さ……」

聖也の眼から急速に、黒い焰が消える。不思議だった。あれだけ空間を満たしていた恐ろしいまでの威圧感が、吹雪の言葉と共に消失したのだから。

「貴方は誰かを不幸にする魔女なんかじゃない……！その人とは違う

…違つんだよ…」

聖也の手から、剣が滑り落ちる。鍵の剣は地面に落ちると同時に、溶けるようにして消えてしまった。

「吹雪…じめん。情けない姿…見せちまつて

泣き出しそうな、子供の顔。普段の聖也に戻っていた。いつもの彼からは予測もつかないほど自信なさげで、弱々しかつたが。

「なーによそのハートフルドラマ。つまんないわねっ

二ノ富は子供のよひ口を尖らせる。誰もがキッと彼女を睨みつけた。

聖也に鼻を挫かれる形となつたものの、皆の気持ちは同じなのだ。彼女が自分達の大切な仲間を奪つた。

間違いない。誰もが直感しただらう。

この女こそ自分達が倒すべき真の敵にして、黒幕なのだと。

「つまんないから…さつさと終わらせちゃいましょ。さあ、何人が生き残れるかしら？」

「何をする『氣』!？」

秋が叫ぶ。魔女はニヤリと笑つて、パチンと指を鳴らした。

「ファイガ」

その瞬間。潜水艦を、轟音が襲つた。爆発音。塔子はハッとして辺りを見回し、気付いた。向こうからモクモクと黒煙が上がつている事に。

まさか機関部を爆破したのか!?

「まだどこかで逢いましょう、可愛い坊や達。生きてたら、の話だ

けどね

「待てつアルルネシア！」

## 「一機嫌よう」

二ノ宮の周りを、黒い霧が取り囲んでいく。聖也が憤怒の表情で低く唸つた。

「覚えとけ……めえは必ずオレが殺す。鬼道や佐久間達の痛み……何千倍にして返してやる……！」

ひらりひらりと舞う黒い蝶の群。その中に埋もれていく中、二ノ宮は最後まで歎らしい笑みを浮かべていた。

「やれやれとなりやつてみなせー、ふふふ… あやせせせせせ…」

やがてその身体は全て蝶に覆われ、消えてしまった。後には、目の前の急展開とファンタジーに呆然とするイレブンが残される。再び爆音。フィールドの向こう側には、ちらちらと火の手が上がりつつある。

急いで逃げなければ。しかし - - どうやつて？

「佐久間ッ！ 源田！ しつかりしろーー！」

土門がぐつたりと意識を失っている佐久間達に、必死で声をかけている。まだ息はあるようだが、あの出血量は危ない。元より禁断の技のせいで、一人の身体は限界だつたのだ。

そして彼らだけではない  
雷門の方にも怪我人に縛り出している  
普通に走るのも厳しそうな者もいる。

いざれにせよ此処は海の上。そのままでは逃げ場がない。救命ボートを探して脱出しなければ - - しかし間に合つか? それにこの船の乗務員は?

「総帥ッ！」

照美の声。塔子はハツした。さきほどまで試合を見ていた筈の影山が、いつの間にかいなくなっている。

「総帥ッ 何処ですか？ 総帥・・・ッ！」

「あ、アフロディ！ 待てつ危険だ！」

影山の名を呼びながら船内へと入つていく照美。あまりにも危険すぎる。それに彼の身体もボロボロな筈だ。

塔子は慌ててその背中を追いかけた。

これが報いか。

影山は一人、高台で空を見ていた。鈍色の空は重く、湿つた潮風を吹かせている。いつそ雨が降ればいい。嵐のような大雨で全て洗い流してしまえばいい。

人の罪は結局・・・どう足搔いても清める事はできないのだから。

・・・罰を受けるべきだったのは…鬼道ではなかつた。それなのに。

下方からは、断続的に爆発音が響いている。いずれこの船は沈むだろう。たくさん悲しみと、憎悪を、暗い海の底に呑み込むに違いない。

それが自分の運命なら、受け入れよう。そもそもこの年まで生き長らえたのが奇跡のようなものだ。本当なら自分は幼い頃、父の手

で殺されていた筈なのだから。

今、影山は考える。

何の為の生だったか、そして何の為の死だったかを。

父が死に母が死に。憎悪に身を焦がしながら耐えていた自分。そこに現れたのがあの魔女だった。魔女は甘く囁いた - - お前の心は復讐でしか晴れない、と。

幼い影山は魔女に誘われるまま雷門の敷居を跨ぎ、復讐の為に円堂大介の率いるチームに入つた。

そして起きる、イナズマイレブンの悲劇。しかし実のところそれは、影山が直接の原因ではない。バスに細工したのも、影山の名をかたつて出場を辞退したのも、あの魔女の仕業だったのだから。

厚意でした事だと、二ノ宮は告げた。しかしその真意が今なら分かる。彼女はただ自分が愉しみかつただけだと。事態を引っ搔き回し、チームメイトから恨みを買うように仕向け、影山の逃げ道を塞ぎ。

そうやって影山が壊れていく様を見て笑つていただけなのだ。

鬼道の事についてもそう。彼女はエイリアン皇帝陛下を護る為に手を回したと言つていたが、実際はただ鬼道を玩具のように弄びたかっただけ。あの話を聞いて漸く理解した。

自分は従うべき人間を、縋るべき存在を誤つた。自分は間違つていたのだ、と。

- - 父を追い詰めたサッカーが憎い。その原因を作つた円堂大介が憎い。

その黒い焰は今でも消えていない。  
でも。

・・本当の意味で私を不幸にしたのは他の誰でもない…私自身だった。

憎しみでするサッカーは、楽しいものではなかつた。圧倒的な力を持つ駒で、弱者を踏み潰した瞬間は、確かに喜悦を伴うもの。しかしどれほど強い駒を集めても満たされなかつた。勝利の次の瞬間、胸の奥に穴のあいたような虚しさが込み上げ…それを振り払つようこ、また次の勝利を求めてきたのだ。

まるで薬物中毒者のように。

・・常に勝利し続ける最高のチームを作り上げれば…満たされると思つていた。でも。

そんなモノは存在しなかつた。そして自分にとつて最高傑作と呼べた戦士は、勝利だけを自分に提供する存在ではなかつたのだ。敗北を知り、絶望を知り、その上で立ち上がり続けた鬼道有人。彼と、彼の愛する仲間達こそ、最高に限りなく近い強さを持つていたのだ。

彼らのサッカーは影山に教えた。負けて立ち上がる強さに勝るモノは無いのだと。

・・お前を失つてから、氣付くだなんてな。

『そうすい』

たどたどしい言葉で自分を呼び、小さな手でこの手を握り。施設から引き取つたばかりのあの子を思い出す。

彼はきっと自分を最期まで憎みながら死んでいったのだろう。けれど、自分は。

ドォン!!

一際大きな振動が来た。バランスを崩し、影山は高台の下へと放り投げられる。

「…」今まで、か。

自分は間違いなく、鬼道と同じ場所には行けないだろうけど。

「…出来る事なら、もう一度だけ。

もう一度だけ、あの子の顔を見たかった。  
影山がそう願った時だった。

「零治ッ!!」

影山の手を、掴む手があつた。

## 【1・27・しあわせな、ゆめ】

影山は呆然とその姿を見ていた。

自分はあらゆるモノを利用し、裏切り、捨て去つて此処にいるのだ。今更誰かの助けなど期待していないし、助けるようなお人好しに心当たりも無い。

なのに。

今自分の手を握り、引き上げようとする手がある。一体、どうして？

「じめん。…本当にじめんね。こんなに…遅くなつてしまつて」

影山の手を握る少年…聖也はやうに言つて、はいはりと涙を零した。

「四十年も、かかつちやつた。でもやつと…やつとまた、君に辿り着けた。この手を握れた」

温かな雨が、風に舞つて影山の手に落ちる。四十年…何の事だろつ。影山は少年の顔に、全くといつていいほど見覚えがない。そもそも目の前の彼は、四十年前に生きていた存在には、とても見えないのだが。

「思い出しつ。君が俺に、教えてくれたんだよ。人を幸せにする、とつておきの力を」

聖也は涙をいっぱいに浮かべて、切なげに笑つた。

「サツカーは大好きな人と仲良くなる魔法。一緒に幸せになる魔法… そりゃうう？」

『サツカーはね、魔法なんだよ。大好きな人と、仲良くなる魔法。一緒に幸せになる魔法なんだ』

「…………」

それは、影山が幼い頃信じていた魔法。大事に大事に抱きしめ、しかし家族の離散と同時に捨て去った魔法。それを知っているとは…まさか。

「お前… キーシクス… なのか？」

青みがかつた黒髪。切れ尾の、群青の瞳。整った顔立ち。それらには確かに…あの頃影山が共にサツカーをしていた、女性の面影があつた。

「俺は魔女だから。持っている姿は一つじゃないし、君よりもずっと長い時間を生きてきたよ」

よくよく聞いてみれば声も似ている気がする。女性にしては低めで、青年よりは少し高い、そんな中性的な声。信じられない。いや、しかし実際に魔女は存在したのだ。二ノ宮が魔女ならば、他にも魔女がいても、おかしくはない。

「でもね。君は俺が知るどんな魔法より素敵な魔法をくれたんだ。何十年経つても…君の事を忘れた口なんて、無かつた」

聖也の、影山の手を握る力が強くなる。その温もりが教えた。これは夢でも幻でもない現実であると。そして。

「助けに来たよ、零治。今度こそ、君を助ける。あの時出来なかつた分まで、君を護る」

彼は本気で、自分を助けたいと願つてゐる事を。

「……何故だ」

声が震えた。情けないくらいに。プライドが山のよつに高い影山からすれば、許せる筈もない事。

しかし今は、羞恥を感じる余裕すら無かつた。ただ何故、という疑問だけが脳髄に満ちていた。

「私は君と仲間達を殺しかけたんだぞ。地区大会の…あの試合で」

地区大会決勝。帝国と雷門の一度目の戦いで、影山は雷門のフィールドに鉄骨を降らせるという暴挙に出た。それこそ、雷門イレブンを皆殺しにするくらいのつもりで。

しかし、事前に罠を察知した鬼道が円堂に、イレブンをディフェンスラインまで下がさせたせいで、誰一人落下の下敷きにはならなかつた。

地面に突き刺さつた鉄骨が、豪炎寺田掛けて倒れてきた時は、聖也が彼を庇つた。結果聖也は脚を粉碎骨折する重傷を負い、以降のフットボールフロンティアの試合に全く出られなくなつてしまつた

のである。

恨まれていない筈がない。そう思っていたのに。

「でも、結局誰も死んでない。俺が豪炎寺を底つたのは、豪炎寺を助ける為だけじゃなかった。俺なら下敷きになつても、死なないと思つたからなのさ」

少年の眼に、憎悪の焰は無かつた。少なくとも影山に向けられるよつた暗い感情は、何も。

「君にこれ以上…手を汚して欲しくなかつたから。全てはそんな、俺のエゴ」

何を馬鹿な事を。

もうとつぐに自分の手は血に染まつてゐる。この身体も、魂も、心も、どうしようもない程醜く汚れきつてゐるのだ。なのに今更何を！

そう笑い飛ばそうとしたのに、出来なかつた。聖也の身勝手さを嘲る事が、どうしても出来なかつた。

この感情の名前も知らないのに。

「私は…鬼道を追い詰めた。毎日毎日、暴力を奮つて傷つけた」

今でも恐ろしいほどハッキリ蘇る。暗い部屋。泣き叫ぶ声。謝る声。自分の怒声。もがく小さな手足。血の匂い。身体を濡らす朱。その日々のせいで、鬼道は一生消えない心の傷を負つて。アルルネシアにそのトラウマにつけ込まれ、苦しんで苦しんで死んでいった。

「私が鬼道を殺したも同然だ。誰かに赦される資格など、ない。」

影山はハツキリと悟っていた。自分こそが鬼道のあらゆる苦しみの根源であり、鎖だったのだと。

自分さえいなければ。自分にさえ出逢わなければ - - もつとあの子は。

「…君は確かに鬼道を苦しめた。…でもね」

鬼道、気付いてたよ、ヒ。聖也の顔が悲しげに歪む。

「本当は同じだけ、零治が苦しんでたって事も。零治が本当は… 我が子のように鬼道を愛してたって事も… 全部全部、分かつてたんだよ」

息を呑む。

それを聖也が知っていた事も驚いたし、鬼道が気付いていた事にも驚かされた。

「君は…お父さんに、普通の愛し方をして貰えなかつたから。同じ事を、鬼道にしてしまつてたんだね。…愛する事と傷つける事を、同じにしてしまつたんだ」

「…そうだ。そうなのだ - - 自分は。

「…そうだ」

影山の視界が緩やかに滲んでいく。

「私は…鬼道を愛していた。本当の息子のよひに

自分は、当たり前のよつに、普通の父親にならなくてはと思った。しかし、虐待されて育つた子供は、虐待する親になってしまったのだ。

愛すれば愛するほど手が出た。歪んだ愛は暴力に変わった。躰と称して、恐ろしい事もおぞましい事もして。駄目だ駄目だと分かっているのに繰り返してしまつ。

自分が父にされてきたのと、まったく同じ事を。

「…しかし結局、私はあの子の父親にはなれなかつた。あの子を傷つけるだけ傷つけて、むざむざ死なせてしまつた」

あの子をエイリアに関わらせたくない。鬼道の愛するモノに少しでも報いたくて、帝国学園だけは破壊しないよう上層部に進言した。

でも結局その程度なのだ。自分が彼の為にできた事なんて。

「あの子だけじゃない。私は関わる者に不幸ばかり振りまいてきた。私を信じたばかりに世宇子の子供達はみんな死に、佐久間や源田も…。馬鹿馬鹿しい。何が幸せの魔法だ」

自分は結局生まれてから死ぬまで、誰かを幸せにするサッカーなど出来はしなかつた。

願つても願つても、想いの届かなかつた父。救えなかつた現実に絶望して、全てを諦めたのだ。

そう、自分の復讐の本当の目的は、世界を呪つての事じゃない。サッカーを憎いと思い込む事で、全てを諦めようとしたに過ぎないのだ。

「そんな事、ない！－」

ハツとする。もつ一つ。聖也よりも華奢で白い手が、影山の手を掴んだ。

「貴方は私に…人を愛する事を教えてくれた!…独りぼっちの私に居場所をくれた…世界をくれた!!…たくさんの絆をくれ、未来をくれた…!!」

照美だつた。荒れ狂う潮風に金糸を靡かせ、本当の女神のように、

彼はその手を差し出していた。

彼を捨てた筈の、影山に。

「間違つていた事は、たくさんあつたかもしれない。でも何回だつて言います。私は、貴方が教えてくれたサッカーが大好きです…!貴方だつて本当はサッカーが大好きだつた筈です…!」

『だから僕はサッカーが大好き!』

そうだ。

結局叶わない魔法だつたけど。幻になつてしまつた魔法だつたけれど。

自分はサッカーが大好きだつた。

彼らと、同じように。

「アフロディイ、お前は…今でも尚サッカーが好きなのか。私に手を差し出すというのか…」

どうして、なんて聞くだけ野暮かもしれない。

憎しみより愛を選ぶ。愛の女神の名に相応しく。

ああ彼はここに来て本当の神になつたのかもしれない。偽りの、形だけの神ではなく。人間として、最高の神に。

「恩人を助けたい。そしてサッカーが好きだ。…それ以上に何の理由が必要なんですか」

誰かを救いたいと願う気持ち。  
何かを、誰かを愛する気持ち。

ずっと忘れてきた、やつと想い出せた気持ちが、そこにある。

「…そうだよ、影山」

「…！」

照美の後ろから、意外な人物が顔を出した。

財前塔子。財前総理の一人娘にして、雷門ディフェンスの要。そしてデータにはあつた - - 鬼道とは、幼なじみにして特別な関係にある可能性が高い、と。

「あんたは、あんたが思っているほど恨まれちゃいない。あんたが犯した罪が消えるわけじゃないとしても…間違った事、たくさんやつてそこにいるんだとしても」

何故彼女が自分を助けようとするのか。鬼道を傷つけ続けてきた自分を、誰より恨んでいて然るべきなのに。

どうしてそんな - - 泣き出しそうな顔で自分を見るのだろう。  
「少なくともあたし…知ってるんだ。鬼道はあんたを赦してなかつたけど、でも本気で恨んでたわけじゃなかつた。今の自分があるのがあんたのお陰だつて事も…あんたのおかげでエイリアに帝国が潰されずに済んだつて事も…気付いてたよ」

「…！」

「鬼道は…あんたを赦したがつてた。だからあんたと決着をつけたくて…此処に来たくて…でも来れなくて…」  
少女の眼に、みるみる涙が溜まっていく。

「生きるよ、影山。あたしは…あんたを恨んでるけど。鬼道の恩人で、あいつに…サッカーを教えてくれた人に、死んで欲しくない！」

影山のサングラスが外れ、風に飛ばされていった。黒いブラインドごしにしか見えていなかつた世界が、突然クリアになる。

自分の手を必死で握る一人の少年がいた。自分で見て涙を流す少女がいた。

「…私は…とうに自分はこの世界に必要ない存在と、そう思つてきた。だから反発して、足掻いてやるうとしたのかもしねない」

やつと氣付けた。

でも全てはあまりに…遅すぎた。

「私にはもはや救われる価値もない。…それでも君達は救いに来てくれる、鬼道もそれを望んでくれたというなら…それだけで、充分だ」

影山が何をしようとしているか分かつたのだろう。三人の顔に絶望の色が走る。

「ありがとう。そして…すまなかつた」

自分は鬼道と同じ場所には行けないだろう。最期の最期まで教え子達を苦しめるなんて、酷い大人だ。

それでも。これが自分に出来る最期の償いで、けじめ。

「君達が、生きてくれ。…これ以上、誰かを悲しませる事が無いよ  
「元ひ

悪夢は。

悲しい夢はどうか、自分達で終わりに。

「零治・・・ひ・・・」

突風と共に、影山は聖也と照美の手を思い切り振り払っていた。  
彼らの明日を、途切れさせない事を願つて。

悲しい夢に、さよならを。

落下しながら影山零治は静かに眼を閉じた。  
次に巡る世界が、訪れる未来が。  
彼らにとって幸せな夢である事を祈りながら。

## 【1・28・汝、己が心の眼を信じよ】

照美を追つて、潜水艦の内部に入つていつてしまつた塔子。いつの間にかいなくなつていた聖也に影山。

吹雪の視界の端、そんな彼らを探しに行こうとした円堂が瞳子に止められるのが見えた。

「駄目よ円堂君！火の回りが早い…危険すぎるわ…！」

「でも監督つ…！塔子達がつ…！」

その時、一際大きな揺れがフィールドを襲つた。メンバーの誰もが立ち上がる事も出来ず膝をつく。爆発音…さつきよりも大きい。このままでは沈没は免れまい。

そして自分達も。

「うつ…！」

「そ、染岡君つ…！」

足を押されて、真っ青な顔になつてつづくまる染岡。応急処置では追いつかない怪我なのは明白だつた。多分骨が折れている。この振動だけでも辛い筈だ。

「俺は…大丈夫だ」

脂汗を流しながらも、吹雪を氣遣う彼。見ていて辛かつた。自分はまた、護られようとしている。護られる事しか、出来ない。

「俺の事より自分の心配しやがれ。お前だつて怪我してんだろうが

優しすぎるよ、君は。

言いかけた言葉を、口の中で殺す。

北海道で初めて逢つた時。明らかに吹雪に対して彼は喧嘩ごしだつた。何故そんなに嫌われてしまうのだろう。心当たりの無い自分

は戸惑つてばかりいて。

その理由を、皆からそれとなく聞いた。豪炎寺という、染岡が唯一認めたストライカーがいた事。彼が理不尽な形でチームを離れさせられた事。

その豪炎寺の居場所を。吹雪に奪われてしまうのではないかと、畏れていた事。

……でも君は優しいから。少なくともそれを直接、僕に言つ事は無かつた。

本当にはブチ撒けたい怒りで溢れんばかりだつただろうに。不満と不安に喚き散らしたかつただろうに。

溜め込むしかなくて、でも隠すにはあまりに不器用で。

それが分かつたせいか。どんなに険悪な態度をとられても、少なくとも吹雪が染岡を嫌う事は無かつた。彼の憤りも理解できないわけじゃない。

それに……今まで自分が晒されてきた悪意のない興味と比べたら、可愛い悪戯のようなものだ。

……言つても、良かつたんだよ。豪炎寺君の居場所は豪炎寺君だけのものだもの。僕に奪う権利なんか、ないから。

自分がイナズマキャラバンに参加した理由は、他の皆のような正義感じやない。ただ自分は自分の小さな世界を護りたかつたに過ぎず、その手段を目の前に提示されたから従つた、それだけの事なんだ。

必要とされないならば、自分が此処にいる意味などない。

そもそも自分は、弟の命と引き換えに、半ば彼の居場所を奪い去るようにしてストライカーになつたのだ。これ以上誰かの大事な物を奪うような人間には、なりたく無かつた。

でも。染岡は今まで吹雪に本当の意味で罵りの言葉を浴びせる事はなく。段々と吹雪を豪炎寺とは別の存在として認めてくれるよつになつた。

吹雪は豪炎寺の椅子を奪う事を望んでないし、周りは誰一人そんな解釈はしていない。そう気付いてか、いつしか仲間の一人として受け入れてくれるようになつた。

彼は優しい。優しくて不器用だ。

男らしくて、思いやり深くて、強くて。友達というよりお兄さん のよう。吹雪は彼に友情と尊厳を同じくら抱いた。彼のようになれたら、と。

「僕は、疫病神だから。僕が弱いから。みんなみんな、僕の前からいなくなつてしまふ。誰一人、護れない。」

完璧な存在にならなくては。自分が完璧じゃないから、大事なものはみなこの手をすり抜けていつてしまふ。

父も。  
母も。  
アツヤも。  
鬼道も。

「僕は…平氣。大した怪我じゃないから。…でも」

怖い。怖くて仕方ない。

「やだよ。…染岡君までいなくなつちゃつたら…僕は…つー…」

これ以上、大切な誰かを喪うなんて耐えられない。

そんな事になつたら、きっと自分は壊れてしまふ。粉々に、硝子細工のよう碎け散つてしまふ。

失いたく、ない。

「怯えるなよ」

ポン、と頭の上に大きな手。

「…俺はお前が…本当は何に怯えてんのかは分からねえ。でも…怯えんなよ。信じろよ。…永遠な事なんて無いとしても…一つか必ず終わりは来るとして」

その手の温かさに、その優しい声に、優しかった父を思い出す。痛みに顔を歪めながらも、染岡は吹雪を安心させようと笑ってくれている。不覚にも、涙が滲みそうになる。

「少なくともそれは今じゃねえ。例え離れる時が来てもいなくなる訳じゃねえ。少なくとも、俺は」

「染岡君…」

きっと彼は、豪炎寺の事を思い出してくるのだろう。永遠なんてない。全ては変わりゆく。出会いと別れを繰り返して、人は今日を生きていく。その中には理不尽な事もたくさんある。それでも。

離れても絆は消えない。縁が無かつた事にはならない。染岡はそう信じる事で、試練を乗り越えたのだろう。

「君は…強いね」

そこにある、吹雪にはない本当の強さ。それが眩しくて、羨ましくて。

「僕も君みたいに…強くなりたいよ」

また一つ、大きな爆発音がした。衝撃に煽られ、一人してファイルドに倒れ込む。断続的な振動。地面にしがみつくよつて、上半身を起こすので精一杯だった。

それでも染岡の手だけは離さない。

もう失う事の無いように、強くその手を握りしめる。

どうすればいい。こんな状態では救命ボートを探しに行くどころではない。瞳子が海上保安庁に連絡したようだが、その助けめ間に呑うかどうか - - 。

「まだ早いぞ、雷門イレブン」

低い、落ち着きのある声が降る。覚えのある、しかし予想だにしなかった声が。

「え...？」

吹雪は顔を上げる。振動の波が一時的に収まった。またすぐ爆発が起きるのは明白だったが、それでもその人物を見上げる為に体を起こすには充分だった。

「まだ早い。お前達に、こんな場所で死なれては困る

どうして。どうして彼が此処に。

「デザーム……！」

吹雪が名を呼ぶと、黒髪の青年は小さく笑みを浮かべてみせた。前に逢つた時より、顔色が悪いように見えるのは気のせいだろうか。

「何でお前……？」

染岡が口を開きかけ、あつと声を上げた。デザームが傍らに、黒いサッカーボールを抱えていたからだ。

あの黒いサッカーボールにはどんな手品か、何人もの人間を空間転移させる力がある。あれでエイリアは日本中を自由自在に飛び回る事ができるのだ。

デザームはわざわざその力で、沈没寸前のこの船にワープしてきたというのか。しかし何の為に。

「グラム様の御命令を……ひいては私自身の意志を遂行しに来ただけだ」

「グラム……様？」

また新しい名前が出て来た。彼の上司の一人だらうか。ガゼルヨリ上の立場か下の立場か……いや、そもそも彼らの階級は一体幾つあるのだろう。

「グラム様は事情により、まだ表舞台には上がれない。ゆえに私が代わりに来たまで……」ノ富様の命令違反ゆえ、他のメンバーは連れて来れなかつたがな」

「そういえば、この場所にいるのはデザーム一人。イプシロンのメンバーは見当たらぬ。」

それに……ノ富。その名前にズキリと胸の内が痛くなる。倒れて動かない佐久間と源田を見た。鬼道を殺し、不動と影山を利用し、佐久間と源田を追い詰めた魔女。

彼女の命令違反な事を、"グラン様"とやらは『ザームに命じた  
というのか？

「助けに来てやつたと言つていいのだ」

その言葉に、誰もが目を見開いた。

「二ノ宮様は、お前達が生きようが死のうが構わないと思つて  
いるらしいが。私は困る。我タイプシロンはまだお前達と本氣の勝負を  
していない。こんな形で潰されるのは不本意なのだ」

そしてザームは吹雪の方を見る。黒目がちの瞳に見据えられ、  
吹雪は戸惑う。

自分の中のアツヤが言つた。あいつは初めて、エターナルブリザ  
ードを止めた相手。奴を倒さなければ完璧になどなればしない、と。  
士郎としての自分も、あの瞬間感じ取つていたのだ。ライバルら  
しいライバルもいなかつた白恋中のサッカーから、イナズマキャラ  
バンで日本中を巡る旅へ。

仲間達と出会い。イプシロンと戦い。久々に本氣の悔しさを思  
出した。自分の力の及ばない領域がまだまだあるのだという事を。

「吹雪士郎。貴様との決着もまだついてはいない。… そうだらう」

ドキリとする。まるで胸の内を見透かされたかのようだ。

「し…信じられませんよ、そんなの！貴方はエイリアで… 本当なら、  
僕らが消えた方が、侵略には都合がいい筈でしょう…？」

ベンチにしがみついたまま目金が言つた。それも間違いなく正論だ  
った。実際、彼ら宇宙人は侵略者。雷門はそれを阻止しようとして

いる。

このまま自分達が海の藻屑になつてくれれば、これ以上都合のいい事はない。 - その筈なのに。

「信じるか信じまいかは好きにすればいい。だが…」

そしてデザームの方も、至極最もな事を言つ。

「確かにのは、このままなら全員御陀仏といつ事だ」

そうだ。もし罷だとしても。今の自分達は、デザームの力を借りない限り、この潜水艦から生還する術がない。

既にフィールドの反対側の入口からはちろちろと赤い炎が揺らめき、黒い煙が上がっている。船が沈むよりも、ここが炎に包まれる方が早いかもしれない。

「…いいでしよう」

「監督！？」

「眼を見れば分かる。…貴方は、正義感が強い。人を傷つける嘘をつける人間じゃないわ」

すくと瞳子が立ち上がる。まるでデザームの事をよく知つてゐるかのような口振りだ。

その時、潜水艦の中に駆け込んでいった塔子、照美、聖也の三人が戻つて来るのが見えた。聖也はぐつたりした様子の照美をおぶつている。何かあつたのかもしれないが、それを尋ねるのは後だ。

「…俺も、信じる。デザーム」

戻ってきた彼らを視界に入れ、デザームを見て、円堂が言った。  
「信じるべきものが何かくらい、分かるさ。…お前は嘘をついたりしない」

「…僕も信じるよ

「吹雪…」

円堂に続き、吹雪も顔を上げた。

「それに僕も、あんたと決着をつけたい」

瞳子も円堂も吹雪も賛成した。ならば他のメンバーも断る理由がなくなる。どちらにせよ、二ノ宮なんぞの手で、こんな場所で死にたい奴など一人としていないのだから。

まずは生きる。生きて、生き抜いてから考えればいい。その先の未来をどう在るべきなのかは。

「いい返事だ」

デザームの笑みが濃くなる。彼の掲げた黒いサッカーボールが、黒紫の光を放つた。それは霧のように、緩やかに空間を包み込んでいく。

「大阪に、我らが廃棄した訓練施設がある」

空間転移。ワープの寸前に、デザームの告げる声が聞こえた。

「そこへ再びあいまみえよ。楽しみに待ってるぞ、雷門イレブンよ…！」

やがて黒紫の光の中、彼の姿も、沈没寸前の潜水艦も見えなくなった。

光が収まつた時、吹雪達がいたのは愛媛埠頭。

真帝國学園は田の前で爆発し、海の中へと消えていったのだった。



救急車の音を聞く度に、あの日の事を思い出す。兄が死んだあの日。そして多分これからは今日の事も思い出すのだろう。

多分一生忘れまい。その傷も、痛みも。むしろ忘れてはならない事なのだろう。

その痛みこそ、鬼道有人と音無春奈が生きた証なのだから。

「佐久間君…」

救急車の担架に乗せられていく佐久間を見る。不幸中の幸いと言つべきか、頭から上は無事だつたようだ。一時的にとはいえ意識を取り戻した彼は、横たわつたまま春奈の方を見た。

「…すまなかつたな。とんだハつ当たりに巻き込んで」

「…いいえ」  
掠れ、疲れきつた声だが、この距離で聞くには充分だつた。春奈は首を振る。

ハつ当たりなんかでは、ない。自分は彼に恨まれても仕方ない立場だ。ある種影山より、自分の存在こそが兄を苦しめていたと言つてもいい。

淀んだ世界で、鬼道の存在が、鬼道を想う気持ちが春奈の支えとなつていた。きっとそれは佐久間も同じ。

それを身勝手な都合で奪われれば、憤るのも当然の事。

「もつ…手も脚も動かないんだ。…きっとこれが、鬼道を悲しませた罰…。すぐえなかつた罰なんだ」

事実なのだろう。佐久間の首から下は不自然すぎるほど動かない。呼吸の音も、何だか引っかかっているように聞こえるほどだ。

「だからさ。…あなたに頼みがあるんだけど」

「…何ですか？」

その佐久間の動かない手を握り、春奈は尋ねる。

「あなたは、生きるよな」

「……！」

「あなたは、泣かせるなよ、あいつをさ」

何処かで見守ってくれているあのを、悲しませてはいけない。空の上で涙を流させるような事があつては、ならない。

『あなたがこのまま不幸になつても…鬼道は絶対喜ばない』

塔子が言つてくれた言葉を思い出す。

大好きな人を泣かせたくないから。笑つていて欲しいから。幸せを、願う。

その気持ちは、自分達みんな、同じ。

「…はい」

春奈は頷く。

「生きます。お兄ちゃんに、笑つていて欲しいから」

生きて、生きて、生きて。

幸せを見つけて、生き抜く場所を見つけて。

ありがとう、と。佐久間はほつとしたように笑つた。そして呟いた。

「また鬼道と、サッカーやりたかつたな」

隻眼がゆつくりと閉じられる。

「あつち行つたら、またできるの、かな……」

ハツとする。佐久間が完全に意識不明に陥つたのが分かつたのだ。元より重傷患者なのだ。救急隊員達の動きが慌ただしくなる。駄目だ。

死んでは、駄目だ。彼はこんな場所で終わつていい人間なんかじゃない……！

「佐久間さん……」

ぐつたりと、中に運び込まれる佐久間に向かつて。春奈は精一杯叫んでいた。

「貴方も生きなきや駄目です！生きて……生きて下さいっ……！」

彼の護るべき帝国は、この過酷な現世にある。遠い遠い、手の届かない場所なんかじや、ない。

「みんな貴方を待つてます……私も待つてます……だから……生きて帰つてきて下さいっ……！」

救急車のドアが閉まり、遠ざかっていく。春奈は祈るよう口の手を握り締め、見送り続けた。

鬼道だけではない。源田も、佐久間も、愛されて愛されてそこにいる。今生きている。帝国では仲間達が彼らを待つていて。自分も、待ち続ける。

どんなに残酷な世界だとしても。それが必ず光になる。パンダラの箱の底には、ひとかけらの希望が残されていたよ。

秋が両手で顔を覆い、啜り泣いている。彼女との付き合いは長い円堂だが、こんな風に涙を流す彼女を見るのは - - 初めてかもしれない。

それだけにやるせない。本当にこんな結末しか無かつたのか。本当にこれで良かつたのか。

田の前の現実が重すぎて、過ぎてしまつた悲劇が苦しくて、円堂は唇を噛み締める。

「…サツカーって、楽しいものな筈よね」

ポツリ、と夏末が呟く。

「誰かを傷つけるとか…壊すとか、苦しめるとか。そういうものじや、無い筈なのに」

どうして涙が出るのかしら。空虚なその声に、夏末の顔を見る事ができない。

勝負に負けて悔しい。そんな涙なら当たり前なのだ。いくら流しても構わない。それは次の笑顔に繋がっているから。

でも今の自分達は、違う。同じ無力さでも、何かが違う。負けたわけじゃないのに、一度と戻らない何かを悔やみ、失い、途方に暮れている。

- - 泣くな、俺。

まだつけたままだつたグローブで、コシコシと田元を擦つた。顔に土がついたが、どうでも良かった。

「俺はキャプテンなんだ。キャプテンの俺が弱気になつたら、チームは終わるんだ。」

自分は必ず最後まで立つてゐる人間にならなくてはならない。どんな場所でも、それがキャプテンとしての責任なのだ。

彼らの前で、涙は見せるな。仲間達を不安がらせるな。言い聞かせ、グラつく心のネジをきつく締める。

「…田堂」

さりげなく、一ノ瀬が側に歩いてきた。彼は何もかも分かっているような気がする。

田堂の気持ちが弱くなつてゐる事も、それでもどうにか脚を踏ん張りうと足搔いてゐる事も。

「無理、すんなよ」

その優しさが嬉しくて。  
少しだけ、辛くて。

「…うん」

なんとなく、理解していた。彼が鬼道の代わりに、眞を精神的に支える立場になろうと頑張つてゐる事を。

自分達はそれだけ鬼道に寄りかかっていて。一ノ瀬もそれに気付いたに違ひない。今更空けておくにはあまりに大きな穴なのだと。

「とりあえず全員一度病院、ね」

瞳子が疲れた顔で言つ。さつきまで響木に電話していたようだ。相当説教されたと見える。その傍らではレーゼが悲しげな顔で彼女にしがみついている。

「これから行動はその後で考えましょう。少なくとも染岡君は入院確定でしようし」

「染岡君…」

俯く吹雪。佐久間、源田とともに染岡は既に病院に搬送された。足を骨折しているのは誰が見ても明らかだ。他のメンバーも満身創痍。照美や吹雪も、しばらく休ませなければマズいかもしない。一ノ瀬や土門もかなりダメージを負つている筈である。

佐久間達はどうなるのだろう。鬼道の件、彼らは直接殺していいにせよ、リンチに加わったのは確からしいし。どちらも十四歳は超えている。怪我が治つたら逮捕という事も考えられるのではないか。

「…救えなかつた。あの人を」

ぐつたりと聖也に支えられたまま、照美が言つ。

の人 - - 影山零治。多分照美と彼の間には、自分達には推し量れぬものもあつたのだろう。恩人あつたのは確かだろうから。潜水艦は爆発し、水底に沈んでしまつた。何人が死んだだろう。脱出できたのはあの場にいた雷門陣と真帝国メンバーだけだ。何人もいただろう従業員達と影山の生存は、絶望的だろう。

真帝国メンバーはとつて、呆然と近くに座り込んでいる。まるで糸の切れたマリオネットのように。キャプテンの不動は錯乱状態だつた為、染岡達と共に既に救急車に乗せられていた。

彼らの事も、身元を確認し、処遇を検討しなくてはなるまい。

「照美ちゃんは、精一杯やつたよ。あれがあの人なりのケジメのつけ方だつたんだ。今はそう、思うしかない」

声もなく涙を流す照美を抱きしめる聖也。

みんな、悲しい。大好きなサッカーをして、それなのに悲しい。——終わらせなくちゃいけないんだ。

円堂は拳を握りしめる。

大好きなサッカーを護る為に、全ての悪夢を断ち切る。それはきっと自分達にしか出来ない」と。

悲しいだけのゲームはもう、これっきりだ。そうしなければならないのだ。

「……そろそろ、頃合いかもしねないな

照美を抱きしめたまま、聖也は一つ息を吐ぐ。そこにいたのは普段の楽天家でも、さつきの阿修羅のよつな少年でもない。真剣な、戦士の顔だった。

「みんなにも、話すよ。鬼道が調べてた事…そして俺が知っている事の、全てを」

突然目眩に襲われ、デザームは膝をついた。

「だ、大丈夫かい！？」

グラムが慌てて駆け寄ってきた。申し訳なく思いながらもその手を借りて立ち上がり、手すりに寄りかかる。

今この廊下には、自分と彼の二人しかいない。部下達の前でなくて本当に良かった。

これ以上イブシロンのメンバーに心配をかける訳にはいかないのだ。キャプテンの自分が弱れば、ただでさえ動搖している彼らの士気をさらに下げてしまう事間違いない。

「ごめんね。…今こんな事頼めるのは、君しかいなかつたから。俺が出ていけたら良かつたんだけど」

「構いません、グラム様。貴方はジエネシスの正当なる継承者。まだ表舞台に出るには早すぎますから」

「まだ正式決定じゃないんだけどね」

グラムは謙虚な姿勢を崩さない。しかし、彼の率いるガイアがジエネシスの最有力候補である事は口を見るより明らかだった。

バーンとガゼルも頑張つてはいる。実力だけ見れば互角かもしれない。しかしガイアは他二チームと比べ連携に長け、メンバー全員の忠誠心も高い。

それにいざという時最も冷静で頼りがいのあるキャプテンが誰かと言えば…グラムを置いて他にいないのだ。それに彼のチームには、グラムと同等の実力を持つウルビダという優秀な副官もいる。

「…すみません。少し休ませて、下さい」

断りを入れて、デザームは廊下に座り込んだ。正直立っているのも辛い体調。実験の後遺症か、熱がなかなか引いてくれないし目眩

と吐き氣も酷い。雷門メンバーの前ではかなり無理をしていたのだ。  
それでも。グランの命令とはいえ、二ノ宮の命令に背く事を他の誰かにさせるわけにはいかない。自分はどうにあの女に目を付けられているが、仲間達は違うのだ。巻き込むわけにはいかない。  
それに。

「本当に…レーゼは雷門にいたのですね」

どうしてもこの眼で確かめたかったのだ。自分が追放した彼が無事でいる事を。

「本当に…何も覚えていないとは

「デザーム…」

そこそこ付き合にはあったつもりだ。だがレーゼは自分の姿を見ても、まるで反応を示さなかつた。まるで初めて会う人間を見るようだ。

何も知らなかつたとはい。これが自分のした事の結果だ。彼は記憶を消され、かつて見下していた敵チームに保護されている。これも運命なのだろうか。

「…でも。生きていた」

それでも生きていってくれただけで良かつた、なんて。そういうのは自分のHゴなのだろうか。

「なんか、分かる気がするな

「何がです?」

「ふふつ

グラムはデザームの隣に座つて、言った。

「デザームがイプシロンのメンバーにあんなに慕われてる理由。分かるなあって」

「…貴方にはかないませんよ」

キャプテンとしての在り方を自分に教えてくれたのは、グラン達だ。言葉にはしなくとも、チームは、彼を心から尊敬している。自分は実力こそ劣るとしても、気持ちだけでは負けたくない。いつか彼のような心強きリーダーになる為に。

復讐の舞台は幕を下ろし。  
次なる惨劇の幕が上がる。

「明日も… その大事な人が側にいてくれるだなんて保証は、神様だつてくれない」

「生きてて、いいの？」

「あんたを怯えさせる全てのもんから、うちがあんたを護つたる！」

「「めんね、染岡君」

決意の雷門へ選ばれた勇者達へ。

「感謝するぞ。 今日まで私の我儘に付き合つてくれた事を」

「人間ナメンじやねえぞ、魔女」

「貴方達は生まれ変わるのよ。 大好きなお父様の為に、ね」

「頑張りましょー！強くなつたり、せつと陸上もお喜びになつま  
す」

覚悟のハイリアへ仕組まれた侵略者達へ。

「お願ひつ…デザーム様を死なせないでえつ…」

誰もが求めたのは、ありきたりな平穏。

誰もが手を伸ばすのは、最期の楽園。

イプシロンは全てを賭け、雷門に勝負を挑む。

「強いでしょつよ。女は恋をして綺麗に、強くなる生き物だからね

「悪いと思つなら、生きて、ブッ倒れるまで働きやがれ。…帝国で  
よ

「一之瀬のサッカーは一之瀬だけのものだ…つ誰かに操られた結果  
なんかじやない…」

「破滅の魔女、グレイシア。ここに」

「また一緒に、風になろつぜ」

「信じてるからよ……治兄！」

「でもね、リカ。運命ってこののは、諦めの出来でないのですよ」

終わりの鐘を鳴らすのは、傷だらけの細氷。

「……」めんなさい……

二次創作、イナズイレブン長編。

『この背中に、白い翼は無いとしても。3』

「第一章・どうか畏れないで、目の前に在る真実を。」

近日公開予定。

「私の手を、いつも引いてくれたのは……貴方、だった

絶望を知る時、彼らは選択する。

まずはこの小説を読んで下さった方、全てにお礼申し上げます。初めまして、もしくはこんにちは。煌はじめ（スマラギハジメ）です。毎度無駄に長い長編と無駄につつとおしい心理描写に定評があります。

今回は真帝国編ということで、旧帝国組と春奈ちゃんにスポットを当てさせていただきました。

前章をお読みいただいた方はご存知と思います。序章ラストでの、鬼道有人の死。そこからいかに雷門を立ち直らせるか、が彼らにとつても私にとっても最初の課題でした。正直、難産だつたです。大切な人の死から立ち直つて前を向くのは、並大抵の覚悟じやないですから。

そこで一番辛い筈の塔子に最初に立ち上がつてもらうこと、彼女の強さを表現……しようとした痕跡はあるかと。説明しないと誰もわからんのが最大の問題です（ザ・国語力不足）。

また、ゲームではプレイヤーとして使えるマネジの子達を生かして、春奈ちゃんを選手にしてみました。プレイされた方はご存知でしょうが、マネジトリオはなかなか強力な必殺技を覚えてくれるんですね（ステータスはともかく）。ただ応援だけさせとくのは勿体無いなど（笑）。

さらに今回、ある意味一番書きたかったのが影山の本心と真実。ゲームの3で明らかになる通り、彼はけして根っからの悪人ではないのですよね（もつともこの話を執筆した時は2が発売して間もない頃でしたが）。本当はサッカーが大好きで鬼道の事も本当に父親として愛していく・でも歪むしかなかつた悲しい人。少しは皆様にお伝えすることが出来たでしょうか。

この物語ですが、皆様お気づきの通り、まだまだ完結してません。あくまで“第一章”完結というだけです。ここまできてまだ第一章。

本気で長いのはこれからで……す。（滝汗）少しだけお休みした後、続きを執筆させていただく予定です。今後も悲惨な展開が続きます。次章予告で分かります通りイプシロン虐めがハンパないです。特にデザーム様。ぶっちゃけ3t o p虐めもハンパないです。

こんなにも続き読んでやるよ！むしろさつさと書け！という神様のごとき方。感想、切実にお待ちしておりますゆえ、お気軽に足跡残してやつて下さい。喜びのあまり逆立ちして屋上ダイブいたします（意味不明だから！！）。

それでは長く語りてしましましたが、お後がよろしくよつで。縁があればまた。

煌はじめ 拝

「感想、『アクセス、誠にありがとうございます』…作者の煌はじめです。

今回的第一章から、感想の数もあくせ数も増え、本当に驚かされる事ばかりでした。こんな悲惨極まりない駄作でも“続きが気に入る”と仰有つて下さる方に感動したと仰有つて下さる方…。本当に光栄すぎて涙が出そうです。

本当はもつと早くアップしたかったのですが、少々間が空きましたこと心よりお詫び申し上げます。仕事さえ…仕事さえなけりや…！おのれ深夜残業！

本日七月二十四日、この物語の続きである『この背中に、白い翼は無いとしても。3『第一章』どうか畏れないで、目の前に在る眞実を…』をアップいたしました。“同一作者の最新小説”から飛べると思います。何故深夜なのつてそりや深夜勤明けだからという分かり易い理由です。たかが十一時間労働、されど十一時間労働（涙目）

繰り返しになりますが…相変わらず残念な文章力に加え、救いのない展開が続きますが、最後は必ずハッピーエンドです。何卒新章もお付き合いいただければ幸いです。

煌はじめ 拝

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7475m/>

この背中に、白い翼は無いとしても。2 《第一章～どうか忘れないで、君が交

2010年10月10日13時35分発行